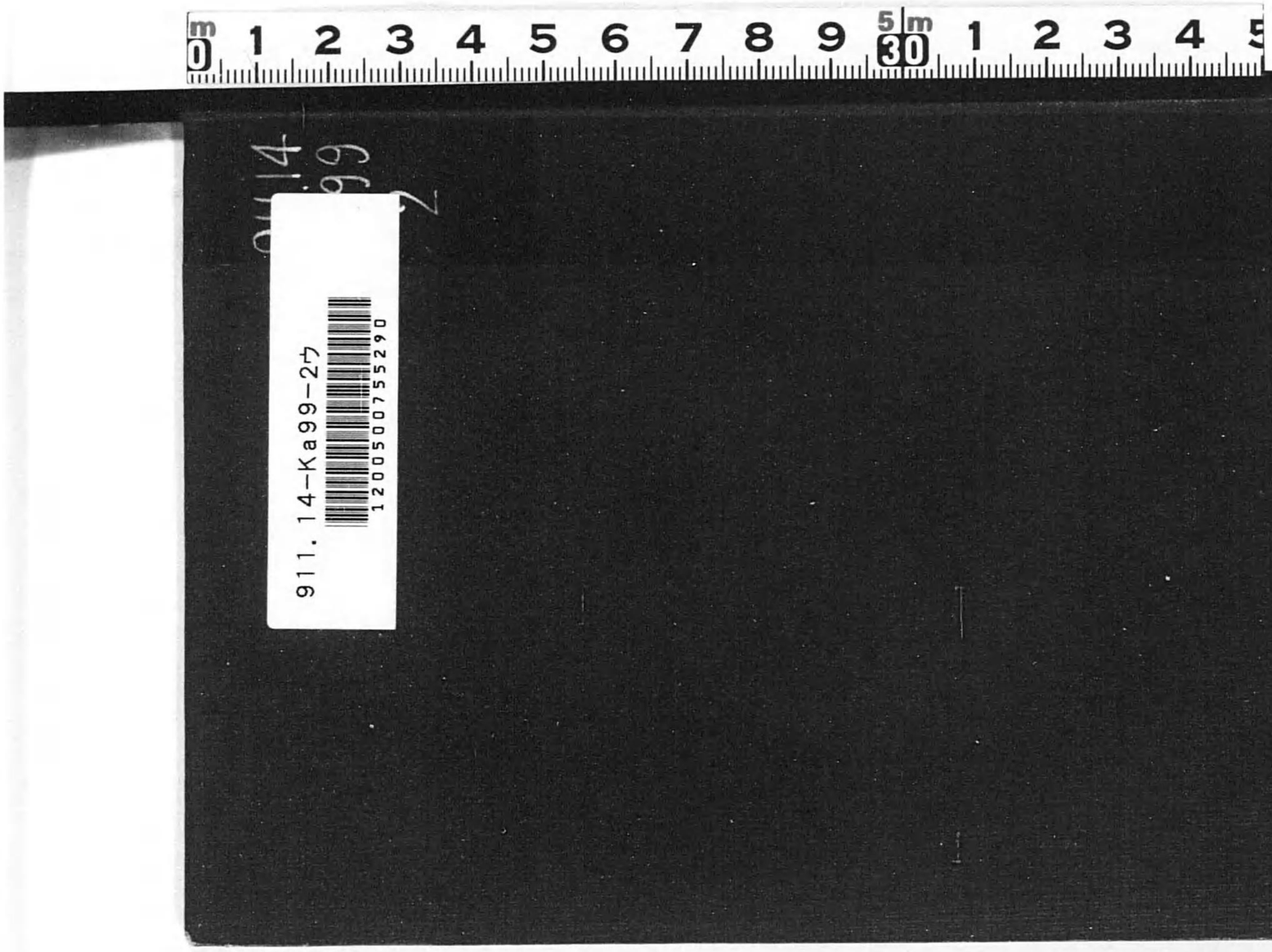

911.14-Ka99-2ウ
1200500755290

911.14
KA99
2

ラヂオ新書 ☆ 9

中世の文學傳統

—和歌文學論—

風卷景次郎著

帝國大學 昭和十五年

797
87

はしがき

朝の國文講座で、新古今集、山家集、金槐集、新葉集のそれぞれについて一度づつ、都合四回の放送をしたのが緣になつて、この本を出すことになつた。

放送の時はだいたい中世の和歌について話すといふことになつてゐたのだが、歌集本位の立案だつたので、どうしても話が獨立になりがちで、中世の和歌一般については、必ずしも充分の言葉をつひやすことができないでしまつた。それにまた、中世和歌についての概括的な考へは、まだ何處へも書いたことがなかつたので、一つには自身に放送のあと始末をつける氣持と、今一つには私としての中世和歌概觀を書き下して見たいといふ要求とに驅られて、まとめあげたのである。だからこれは放送の草稿とは殆ど何の關係もない。ただ放送が緣になつたといふだけで、新しく書き下した私としては最初の中世和歌概觀である。

文學といふ言葉を今日考へるやうな意味で用ひる限り、前代からの文學の傳統は、中世においては全く和歌の上に傳へられてゐる。書名を中世の文學傳統としたのは、さうした意味から

のことである。

何しろ怱忙の間に書き下したので、文章の練れてゐない點は幾重にも讀者諸君の御諒恕を乞ひたい。ただその趣旨について何ものをでも汲みとつていただければ、筆者望外のよろこびである。

昭和十五年一月二十日

風巻景次郎

目次

一　うたとやまとうた、漢詩と和歌、詩と歌、和歌と短歌……一

二　中世、和歌は中世文學の主軸、物語は文學でない性質を含んでゐる、勅撰和歌集、二十一代集、古今集の傳統が金葉・詞花で衰へる、千載集の後また古今集傳統が復活する、これが中世文學の開始である、藤原時代藝術の特色、その金葉・詞花への反映は和歌の危機を意味する……一三

三　藤原俊成、隱者文藝、千載集、その特色、抒情性の優位、幽玄……四一

四　西行法師、山家集、貴人生への敗恤と交換した文學精神……六七

五　新古今集、その特色、錦繡的妖艶、後鳥羽院の御趣味、新古今撰定前の歌界、若き定家……七八

六　新古今集の撰定の經過……一〇五

七　後鳥羽院、院の御製と新古今時代廷臣の歌とは別の所から生れてゐる……一一三

八　源實朝、金槐集、實朝の歌の多くは風流の歌である……三一
九　老いたる定家、歌に對する見識の變化、世間的幸運……四一
十　新勅撰集、新古今調からの離脫、世襲の藝道の建立、有心、歌における「詩」の喪失の警告、「詩」を培ふものとしての漢詩、漢詩と和歌との融合……五一
十一　爲家……六八
十二　二條・京極・冷泉三家の分立、持妙院統と大覺寺統、分立の意義、爲世歌論の保守主義、爲兼歌論の新鮮さ、玉葉の歌と新後撰・續千載の歌と……七二
十三　吉野朝時代の勅撰和歌集……九六
十四　鎌倉末この方の自然觀照、天象が景色の重要な要素となる、玉葉・風雅の叙景歌の功績、頓阿の歌、牧溪水墨山水に觸れた心……一九九
十五　宗良親王、新葉集……二一〇
十六　室町時代に歌は藝術であることをやめ始める、今川了俊、正徹、堯孝、飛鳥井雅世、正徹の論理と堯孝の論理、正徹と堯孝との定家の立て方……二三〇
十七　東常縁、老年の定家を立てて新古今集を排斥する、宗祇、古今傳授……二三〇
十八　歌道はまさに消えようとしてゐた、結語……

中世の文學傳統

——和歌文學論——

一

草木のさやぎにも神の聲が聞かれた遠い古の代から、歌は神や人とともに在つた。もちろん私どもの祖先は、いまだ文字を使つてをらなかつたから、その歌はもつぱら口承されてうたはれたものであつた。それにまた、それ等の歌はいづれも生活の中から生れたものであつて、年中行事や祭儀や勞働と素朴に結びついてをり、寧ろその一部だといつてよかつたから、異民族の歌の魔力がしのび込む餘地は全くないといつてよかつた。たとへ異國の歌でも、もし彼等の

生活にとり入れられたものならば、それは卽ち彼等の歌であつた。彼等の歌でないものは、彼等の生活意識の中に場所を占める魔力を持つてゐなかつたのである。このやうにして、私どもの祖先はたゞ單にうたを持つてゐるだけであつた。

さうした頃の歌は、數かぎりなくこの日本列島の聚落のうちで、人たちの口にうたはれてをつたであらうが、社會生活の生長變化にともなつて、生活から遊離する歌は勿論つぎつぎに出來ていつた。それ等の歌は、恰度松の木の皮のやうに、あるひは人の頭の雲脂のやうに、古代人の生活の幹から脫落していつたが、書かれたものでなかつたから、大方はみな消えはててしまつたと思はれる。それ等の歌のうちで、朝廷に傳へられたものだけが、形はたとへ變つたりきれぎれの斷片になつたりしたにしても、記錄の行はれる時代まで持ち越されて、古事記や日本書紀や古語拾遺やのうちに、二百あまりも書きとゞめられたことは、私どもにとつて得がたい幸であつた。

けれども、それ等の歌とても、すべてたゞうたであればよかつたのであつて、何も殊さらやまとうただの和歌だのといつたり記したりする必要は少しもなかつたのである。現に古事記に

も、日本書紀にも、和歌といふ名詞は、まだ全く一度もあらはれては來ないのであつて、數々の歌を記すところにも、歌曰とか歌之曰とかと記されてゐるに過ぎないのである。思へば單にうたで通つてゐたものが、やまとうたでなければならなくなり、あるひはまた、和歌とか倭歌とかでなければならなくなつたといふことは、まことに意味の深重なものがある。これは一種の自己限定であるともいへるし、自己分裂であるともいへるであらう。何故ならば異國人が私どもの歌を指して「日本の歌」といふのならば事は別であるが、自から自分の歌をつきはなして、「日本の歌」と呼ぶやうになつたとすれば、すでに日本の歌でない何か外の歌との對立が、彼等の生活の中に生れてゐると見なくてはならず、さうだとすれば、自分の生活と自分の歌との素朴な結合はすでに搖ぎつつあるからである。諸君もきつとこの點に大きな疑問のまなざしを指し向けられたことがあるであらう。何故そのやうなことが起つたのであらうか。そして何時そのやうなことは起つたのであつたか。

和歌あるひは倭歌といふ名辭のあらはれるのは萬葉集からである。しかしやまとうたといふ意識が明らかになつてきたのは恐らく大化改新の頃からのことであらう。そして自からの歌を

やまとの歌と意識させた對立物は、私どもの祖先にとつては、外でもないからうた、卽ち漢詩であつたのである。

もちろんこの意味のからうたは、支那の土地で支那人によつて愉しまれつつあつた漢詩を指してゐるのではない。さうしたものならば實はどうでもよろしいのであつて、大切なのは、日本人の精神生活のうちに、漢語でつゞる漢詩と、日本語でつゞる和歌とが、ともに相並んで場所を占めるやうになつたといふことであつた。もちろんまだ稚かつた日本が老大支那の文物に觸れはじめたのは、恐しく早い昔からであつたが、漢字漢文を理解し得たのも決して遲いことではない。けれども異國語の難關をのり越え、爛熟した生活感情を咀嚼してまで、老大國の文學を机邊の風雅とすることは、あまりに稚い民族には、いまだ與り得ない、精神の放蕩であつた。私どもの祖先が、日本語の歌と同時に、漢魏六朝の詩賦に魅せられ、それを眞似うるやうになるためには、そのやうな文化的感應と欲求とが自づと內から生れてくる位に、生活そのものが成熟する時を待たねばならなかつた。そして、そのやうな文化上の開花期が日本列島の上におとづれたのは、飛鳥朝から大化改新を中にして近江朝へかけての頃であつたのである。

今から一千三百年前におこなはれた大化改新が、明治維新にまさるとも劣らぬ大維新であつたことは、諸君も夙に熟知してをられるところであらう。明治維新を境として、歐洲文明がしきりに移植されたやうに、大化改新を境として、支那文明がしれ等二つの何れの場合にも共通な點は、外交の觸手がふれ合ふやうになつた先進國の文明を取り入れて、自分を補强し變貌することが、その先進國を相手にまはしながら毅く自分を生かすために、是非必要のことだつたのであるが、さうした文化工作が形の上でも質の上でも成果を見せるには、彼土の文明を大した矛盾なしに同化しうる位に、こちらの生活が成熟してゐなければならなかつた。明治維新の日本はまさにその通りであつたのである。

たゞ一つ彼と此とで違つた點が見られるのは、文學上の問題であつた。明治維新の後も、英語を以て國語としようといふやうな論が、一時行はれたことはあつたにしても、つひにそのことは實現せず、羅馬字運動も明治十年代に早く生じてゐながら實を結ばず、まして日本詩壇の一方に英語詩や獨逸語詩が場所を占めて創作されるといふのでもなかつたのに、何故大化改新

の方では、それを境にして、日本國内に本來異國語の詩である漢詩が根をおろすやうになつたのであらうか。しかしながらこれは、割合に單純な二三の原理に基づいて生じた相違であつたのだが、特に形の上からいふならば、先進文化の輸入が同時に彼の用ひる文字文章の移植と切り放し得ない事情にあつたといふ點に、大化改新の場合と相違させる原因の一つがあつたのである。當時の人々は、國語をもつてはゐたけれども、それを書きしるす國字をもつてゐなかつた。明治の人々は歐洲文化を日本に植えつけるに當つて、飜譯すればことは足りた。しかし大化の人々は、文化を輸入するために、先づ漢文を移植しなければならなかつた。近江朝廷の令にしても、大寶律令にしても漢文で記されねばならなかつたし、詔勅も上奏も太政官符も戸籍も歷史も、すべて支那文化に則る政治風教の百科の事務はみな漢文の記錄にたよらなくてはならなかつた。大學は官吏養成のために漢文と儒學とを教授したのである。隨つて宮中の雅宴に唐の法式が影響して、漢詩の制作がはじまつたとしても、まことに自然のことだつたのである。これは羅馬の文化がアルプスを北に越えてから、中歐の文化開明期に、地方語の歌のほかに羅典語の詩が書かれ、學者の間にはながく羅典語が使用されたのと全く同じ

現象であつたのである。

このやうにして、からうたは日本の宮廷を中心にして日本列島の上に根をおろした。そしてそれに對立してやまとうたの意識も宮廷を中心として成り立つて來るのであつた。この事實をいちばんよくあらはしてゐるのは、漢詩と和歌との文字づかひであらねばならぬ。この詩に對して歌といふ字を使つた使ひ方に、その頃の日本のうたの在り方がよく表はれてゐるのである。

さきに和歌の語のはじめてあらはれたのは萬葉集だといつたが、その和歌の多くは他人の歌に對して、こちらからも歌で應和返答する意に用ひてあるから、かへし歌とかこたへ歌とかいふ意味で、日本の歌の意味ではない。しかし倭歌と記してある方は、漢土で日本のことを倭といつた用法にしたがつたのであるから、日本の歌の意味であることも明らかである。次いで歌の字の問題であるが、いちばん簡單にいへば、釋名に人の聲であるといつてゐるのがそれで、今少し精しくいふと、書經の舜典にあるやうに、言を永くすることである。說文には詠也とあつて、言を永くするを一字にあらはせば詠である。さて同じく詠ずるのでも、そこに差があつて、詩經の魏風の疏によると、樂器にあはせて詠ずるのが歌、伴奏なしで詠ずるのが謠である

といつてある。歌謡といへば、だからすべてのうたふうたを包括することになる。これを要するに、歌はうたふといふ日本語に恰度あたつてゐるのであつて、しかもその當時は、日本古來の歌のうたひ方として、和琴を伴奏に使ふことがほゞ法式のやうになつてゐた。地方などではいざ知らず、宮廷關係ではまさにさうだつたのである。實例はいくらもあるが一つ擧げて見ると、萬葉集卷八に、

時雨の雨間なくな降りそ紅に匂へる山の散らまく惜しも

といふ歌がある。これは天平十一年冬十月に光明皇后の營まれた維摩講においてうたはれたもので、終日大唐樂や高麗樂のやうな舶來の大管絃樂の演奏される間にまじつて、うたはれたのであつた。そして特に琴を彈いた人は、市原王と忍坂王とで、うたつたのは田口朝臣家守外十數人であつたと記されてある。こんなわけで、日本語の歌は樂器伴奏でうたはれるものといふのが、その頃の宮廷關係の人たちの常識であり、日常目に見、耳に聞くところであつた。だからこの日本のうたに謠ではなくて歌といふ漢字を當てたのは、實に正しい文字使用法であつたことが分るのである。

それに對して詩の方はどうかといふに、いちばん簡單にいふと、說文に志也とあるのや、書經の舜典に詩は志をいひあらはすものだとあるのがそれであるが、今少しく精しくいふと、詩經の國風關雎の序に、心に在る間を志と爲し、言に發したのを詩と爲すといふのや、漢書の藝文志に言を誦するのを詩といふとあるなどがそれである。要するに日本語でいふ所のうたふでなくて、思つてゐること、胸の裡にあることを言葉に發表したものを指すのであるらしい。支那の字書の定義は警句めいてゐて精密とはいへぬから、私どもには本意を摑むのがむつかしいが、右のやうに考へるならば、詩は文學の本質に觸れてゐる。しかも古代民謠のやうなものでなく、個人的な志想をあらはした創作を指してゐることになるであらう。とに角、單なる歌は詩でないが、同一の詩でも、音樂としてうたふ側からいへば歌といつてもよいわけらしい。當時支那から傳はつた漢詩はすでに民間の歌謠とは別で、文字にたよつて個人の感懷を表現する創作的文學作品となつてゐたし、當時の宮廷の人たちもさういふつもりで取り入れたのだから、當然漢詩であつてよかつたのである。

このやうにして、その當時の實情に即して、漢詩と和歌といふ名辭が宮廷の人たちに用ひられるやうになつたと思はれる。たゞそれと同時に忘れてならぬのは、漢詩と和歌、からうたとやまとうたといふ文字なり言葉なりは、繰り返していふやうではあるが、宮廷を中心にした貴紳の間でのことであつたらうといふことである。所が漢字の使用に馴れてくると、萬葉集や詔のうちの一體である宣命やなどに見られるやうに、早くも漢字を一種の表音記號に用ひて、日本語を可成り精密に記載しうるやうになつてきた。日本語が字で書けるやうになると、やがて支那の詩賦に眞似て、はじめから文字にたよつた讀む歌がつくられはじめた。そのことは實に日本文學史の上から見れば、劃期的な大事件だつたのである。現在のごとく口承文藝に對立させて、詩といはず小說といはず、すべて文字的創作文學のみをはつきり文學と意識するかのごとき立場からいへば、日本文學史はまさにこの時代にはじまつたのであり、和歌文學はまさにこの時代に發芽したのである。

とに角字に書いて個人に送つたり、一人備忘にそなへたりするうちに、表現は自づと個人の癖をよく出すやうになり、讀者も特定の一個人の感懷としてその意味を汲みとることに馴れて

くる。讀む歌は急速に個人的な創作に變貌する。既に音樂と袖を分つて文字にのり換へた歌、聽覺から視覺へと轉居した歌は、民族の聲を大まかに傳へるのでなく、民族の中のある個人の心を傳へるやうになる。すでにそれは歌謠ではなくて創作詩である。現に萬葉集には倭詩といふ言葉も見えてゐるが、實質からいつて、和歌でなく倭詩といふべきものが生れ出たわけである。萬葉集には和歌と倭詩とが同居してゐる。次の古今集になると殆どが倭詩になつてくる。このやうにして名稱の上では一旦できてしまつた和歌といふ名稱が繼承されたけれども、宮廷の實情は、歌の傳承を意味するのではなくなつてしまつて、漢詩に對立して制作される日本語の創作詩だけを指すやうになつて來たのである。

それでは何故に一旦用ひられた和歌といふ名稱が、そのまゝ傳はつたかといへば、その重な原因はその詩型の上にあつたと思ふ。一體萬葉集には三つの詩型がある。長歌・短歌・旋頭歌がそれである。長歌は5・7の句が繰り返されて7の一句で閉ぢるのが一ばん整つた形だが、もつとゝゝのはないのもある。古事記・日本書紀の歌謠を見ても句形はゝゝのつてゐないので、破調の多いのは古いもの、整つてゐる程新しいものと考へられる。早く本居宣長もいつてゐるや

うに、うたふときは音數は少し位ちがつてゐても、節の上で加減するからよいのである。形の正整は眼で讀むことの快感をもとめるために生れてくるのである。だから新しいもの程調つてくるのである。それに反歌といつて、短歌か旋頭歌のついてゐるものがある。反歌は一首の意味を簡約して最後に繰りかへすもので、たしかに漢詩からの影響である。さうしたものを筍子には反辭といつてをり、楚辭には亂といつてゐるが、反歌は反辭をそのまゝ眞似た名稱であらう。長歌二百六十二首のうちで、反歌のないのが三十一首あるが、ない方が古體で、ある方が新しい。ない方はうたつた歌だつたかも知れぬ。反歌のある方は大方みな近江朝より後の作である。有名な柿本人麿だつてその例に洩れない。彼の作は讀む詩の初頭をかざる力作であつたのである。

旋頭歌は577・577の形を持つ。萬葉集には六十一首あつて、これも古いものはうたつたものであつて、調子も字に書いた上では調つてゐない。卷十六に、

梯立(はしだて)の　熊來(くまき)の海底(やら)に　新羅斧陷れ、
かけてかけて　な泣かしそね　浮び出るやと見む、　ワシ

などとあるのが一例であるが、これに屬するものも大部分は創作詩である。卷八にある山上憶良の有名な

萩が花　尾花葛花　なでしこの花
女郎花　また藤袴　あさがほの花

などは正整の體、まことに文筆の雅遊である。

短歌は57577の形を持つ。本來57の句が二度くり返されて、7の一句で閉ぢたものでうたつたときの句つゞきは本來それであつたらう。

吾はもや　安見兒(やすみこ)得たり、
人みなの　得がてにすとふ、
安見兒得たり。

（藤原鎌足）

風をだに　戀ふるはともし、
風をだに　來むとし待たば、
なにかなげかむ。

（鏡王女）

などは、時代も早い近江朝頃だから、うたつた歌の句つゞきがのこつてゐるのであらう。その一面に575・77の句つゞきが次第にひろく力をもつてくる。萬葉集の短歌は四千百七十三首で、斷然群を抜いて多いが、その中でうたはれた歌謠と思はれるものは東國の民謠だつた東歌だのの外は、割に少いのである。

うつそを麻績の王海人なれや伊良胡の島の玉藻刈り食す

などは常陸國風土記には板來、つまり今の潮來の歌として少し句をかへて傳へられてゐて、諸國へちらばつてゐた歌謠だつたことが分るが、大體はつくられた歌である。

右の通り萬葉集の三つの歌體がみなうたはれた歌と、書かれた歌とを含んでゐるのだが、これはつまり、その頃歌はれてゐた日本の歌が大體右の三種類であつて、文字的創作詩の方でもその歌體をそのまま採り入れたことを示してゐるものである。隨つてまた、短歌四千百七十三首、長歌二百六十二首、旋頭歌六十一首といふ數は、そのまゝ三つの歌體の、歌謠または文字詩としてうたはれもし作られもした程度と正比例するものと見ることができよう。歌謠として

も創作詩としても、斷然短歌が優勢だつたのである。このやうなわけで、萬葉集の頃には、まだ長歌・短歌・旋頭歌の三本立で、それも歌謠と創作詩とを併せ含んでゐたものが、古今集以後になると、殆ど短歌一本立の創作詩專門といつてよい位に變つてきてしまつたのである。

このやうな變化を生じたのは何故かといへば、和歌といふ名稱の用ひられたのが漢詩との對立の意識または區別の意識からであり、したがつて漢文學が實地に根を張つてゐる宮廷周圍の文化圏の中においてゞあり、その範圍内の人たちが漢詩と對立させて嗜む和歌は、事實上文字に書く創作詩だけに限られてきたためである。このやうにして、和歌は、その傳統の確立するはじめにおいて、文字にたよる創作的詩歌であり、隨つてまた、宮廷を中心として嗜まれる宮廷文學であるといふ性質を身に著けたのであつた。

たまたまその和歌が短歌一本立になつた理由は、長歌・旋頭歌などはすでに盛をすぎてゐて短歌の方がもつとその頃の人の心にぴつたりとしてゐた、いはゞ一層流行してゐたといふことにあるが、そのどういふ點が當時の日本人にうつたへた點であるかは、なか〳〵重大な問題であるに拘らず、今からは容易にたしかな推測を下しにくい大問題なのである。しかし、古代の

歌謡の中から、57・57・7といふ形が次第に體を爲して來て、やがてそれが575・77といふ形に展開しはじめたのは、萬葉時代にそれ程遠くかけはなれるものではなかつたのであつて、また同時に、この詩型があれほど流行を見るやうになつたのも萬葉時代からそれ程遠く溯るものでなかつたらうことも注意されてよいことなのである。現象的に見ても、長歌・短歌・旋頭歌などの定型詩形が並び存してをりながら、短歌だけが壓倒的に多くて、他の詩型は間もなく消えて行つたといふ場合、短歌が新興の詩形であると見るのが一ばん眞實に近いのである。さういへるわけは、他の時代の文學の興廢の筋道が、みな矢張りこれと同じやうな形をとるからに外ならない。

とに角に、和歌といふ意識がうち樹てられたときすでに、音樂的歌謡の面をふり捨て創作的文學詩となり、村落巷里の歌謡であることをやめて、宮廷貴紳を中心とする文化圏の詩歌であり、そして短歌形式を主軸とする詩歌であつた。和歌は、日本人によつて日本語で作られた歌といふだけにとどまらず、以上のやうな屬性をはじめから身につけたものとして現はれたのであつた。

それに對して一般の歌謡はどうなつたのであらうか。歌謡としての長歌・短歌・旋頭歌形式

の歌はどのやうな路を辿つたであらうか。それ等は全く亡び去つたものであつたらうか。もちろんさうではない。歌謡は民族の心に宿つて、永久に宮廷の內にも村閭の間にも、そのうた聲を響かせる。のみならず、古い歌とともに絶えず新しい歌も亦生み出される。古い形式がうたはれるとともに絶えず新しい形式も亦生み出される。もちろん神樂や東遊のやうな御神事の歌の中には短歌が嚴然と形を保つてゐる。のみならず、梁塵秘抄や閑吟集や隆達の小歌にまで短歌形式は崩れずに傳はつてゆく。が、それだけに古體を存したといふことになる。そしてたとへ短歌形式であつても、神歌だつたり小歌だつたりで、決して和歌ではないのである。佛會の歌もはじめは前に引用した維摩講のときの歌や、藥師寺に傳はつてゐる佛足石歌碑の歌や、百石讃歎の歌やのやうに短歌であるが、慈覺大師あたりから後では梵讃漢讃の形にならつて、七五調の長大な和讃が生れてくる。歌謡の方では、古代の長歌・旋頭歌なども一時流行の體であつて、後から新しいものが取つてかはつて行つたやうに、短歌の體も亦一時の體に過ぎなかつたので、やがてそれが古體と見られる樣になり、更にまた新樣の歌體が作られていつたのである。そして日本語の歌謡は諸君も熟知されるやうに、たとへば木曾節の7775調、

木曾の御嶽さん
夏でもさむい
袷貸したや
足袋そへて

のやうな、つまり、近世民謡の流行形式である都々逸形式のやうなものにまで變つてきた。そして更に、どしどし新しい體が生れようとしてゐるのである。平家琵琶や宴曲・謡曲・淨瑠璃・長唄・浪曲などのやうな、語り物風なのや、謡ひ物にしても長いものに到つては、千差萬別である。音樂的詩歌の方が右のやうな勢である中にあつては、平安時代に生じたやうに、文字的詩歌である漢詩や和歌やを逆に再び音樂詩歌に引きもどして、朗詠といふやうなものをはじめるやうになつて見ても、それは如何にも智識階級だけのもので、あくまで雅潤な味をたのしむものではあつても、民族の間には滲みこんでゆかないのである。歌謡の形がつねに變つて行つて、引きとどめることのできなかつたわけは、それが何時も民族の生活から生れ、生活と一緒に生きていつたことと、そして今一つは、聽覺を媒介にするといふことが、感覺的に浮動性を

保存するといふことに關係する。

それに引きくらべて定型の創作詩は、曲節の變化によつて姿を變へることから超越してしまひ、專ら視覺を媒介として定型の創作詩は、曲節の變化によつて姿を變へることから超越してしませるやうになるものであるらしい。詩型にはその詩型獨特の情趣が生れてくるので、和歌は宮廷の文字的詩歌に定着すると同時に、傳統の詩歌となつた。ことに和魂漢才といふやうに、和漢といふことが宮廷ではつきりと相對立する觀念として意識されたことは、漢詩に對する和歌の用途をひろくもしたし重くもした。平安朝のはじめ、後宮のもてあそびであつた歌合が、清涼殿の催しにまで昇格し、勅撰の歌集が編まれ、ことに漢字が男子の公に仕へる教養であるのに對し、和歌が女子の教養となつて、大鏡にもあるやうに、古今集を全部そらんじた后もをられるやうになつてきた。

けれども何よりも增して、重要だつたものは、たゞ單に和漢文化の對立觀念だけでなくて和歌を尊いものと感じさせた自國の文化傳統に對する自覺であり、誇りであつた。日本には神代から和歌があつて、それが神の御裔の帝の廷に、絶えることなく承け繼がれて來たといふ、昔ゆかし

い信念であつた。古今集の序にも和歌は素盞嗚尊にはじまつたと記してゐる。これは古事記の、

八重立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を

といふ、尊のお歌をさすのであつて、記錄の上からいへば、これが一番古い歌であることはたしかである。しかし考へて見れば、このお歌よりも古くからもつと澤山歌があつたことは當り前のことだし、このお歌が短歌の形になり切つてゐるのも、外の神々のお歌のことなどから考へあはせ、また文字のない浮動性のはげしかつた時代のことだから、後の傳承者が短歌の形にととのへてしまつたと見るべきものと思はれるのであつて、このお歌一つに全和歌がはじまるといふ風に見るのは、今からいへば記錄だけにたよりすぎて、眞實からはなれすぎた素朴な歷史觀に過ぎないし、第一和歌といふ觀念はまだ影だに見えなかつたときなのであるが、しかし平安時代はじめの人々の考へ方としては尤もなことであつたのである。そのことが、漢詩に對して和歌の尊さを守らせたのであつた。これは和歌といふ名であらはされた、日本のうたに對する愛であつた。たゞにやまとうたの中の一短歌體に對する愛にとどまるものではなくて、和

歌そのものに對する愛であつたのである。だから私どもの祖先たちは、たとへ作るときには短歌だけしか作つてをらなくなつてゐても、それを漢詩ならぬ和歌といふやうに考へて、何の矛盾も感じなかつたのである。

日本の詩とは日本語の詩より外にないといふことがはつきり分つてをる現代の歌壇では、專ら短歌を作るから、短歌と呼んでゐて、和歌とはいはなくなつてゐる。これは詩型と名稱との間に矛盾のあることを欲しない合理主義的な欲求である。現歌壇が和歌を新しく生かすことが出來た源は、この現實に卽した精神であつたことはいふまでもない。短歌を作るだけだから、それを和歌といはずに短歌といはうとする現實に卽した精神があるから、生活の現實に卽した抒情をも爲し得たのである。それだけにおそらく、その精神は現實に對して合理的であつても、歷史に對して理解を持たうとする欲求からは遠いものでなかつたかと思ふ。少くとも明治以前においては、といふよりも江戸時代以前においては、漢文學の魔力と相剋してゐた故に、日本語の歌は、短歌といふ前に先づ和歌であつたのである。ところで憚らずにいへば、私は今一首のよい歌を作らうとする欲求の外に、日本の文化の歷史をはつきりと知ることの欲求が生

れてゐることを感じてゐる。文學が歴史かである。そして、私が今中世の和歌について一つの鳥瞰をしようとする意圖も亦、歴史を知ることの欲求にゆすぶられてのことである。そして、かうした意欲は、實をいふと、單なる過去の事實を事實として知らうとする、いはゞ博識への憧れとは全く緣のないものであつて、現代文化の對面してゐる情勢への見透しのためであり、自分の心に萌え出しつつある傾向がどのやうなものであるかを自覺するためのものであるに外ならない。さうした意味で、この鳥瞰もまた、實は現代短歌の動向をはつきりと知りたく思ふ心持に結びついてゐるのである。さてしかし、とに角に、和歌といふ觀念の發生の當初から、和歌は以上に考へたやうなものとして自覺され、把握されてゐた。そして、勿論平安末期中世初期においても、和歌は右のやうなものとして承け繼がれた。だから、これから述べるところも、文學形式からいへば單なる中世短歌史であるといへるけれども、問題を取りあげる立場から見るならば、それはあくまで中世和歌史でなければならぬ。

註　和歌史として最もよいものは兒山信一著「新講和歌史」。これは和歌史としてこれまで出たものの中では一ばん優れたものである。また右に述べたことの參考書としては折口信夫博士「古代研究」三册、武田祐吉博士「國文學研究」三册、西田直二郎博士「日本文化史序說」、高野辰之博士「日本歌謠史」等を推したい。何れも名著の譽れの高いものである。

二

中世といふのは鎌倉時代・吉野時代・室町時代そして安土桃山時代の始まる迄を包括して便宜的に使つた名稱である。この時代は平安時代の傳統を承け繼いで、全く京都の宮廷を中心にした公家の間に和歌の傳統が流れる時代である。近世の江戸時代になると、京都の公家の和歌は所謂堂上家の歌といはれて、幾分舊式の樣に見られ庶民の間に新しい和歌の流れが根を張つてくる。大體この庶民階級に和歌熱が生れてくる以前が中世の下限といふ位に見て扱はうと思ふ。

さてこの時代の和歌の根本的特質は、それが唯一の日本文學の傳統であつたといふことである。漢詩と相對立する唯一の日本語の詩であつたといふことである。しかしさういへば、諸君はたゞちに、平安朝時代にすでに美事な物語、ことに伊勢物語や源氏物語や夜半の寢覺がつくられてゐるではないか、それにまた蜻蛉日記や枕草紙や更級日記やのやうな美しい日記隨筆の類が生れてゐるではないか、そしてそれ等は何れも立派な文學ではないか、と考へられるかも知れない。勿論さうもいへるし、それが今日までの常識でさへもある。けれどもそれ等が今日

から見て文學と感じられる様になつたのは和歌風に彩どられた感情的表現にたすけられて、それによつて文學と感じられるものが随分多いのであつて、つまりは和歌を主軸にしてその周邊に咲き出た花であつた。そして物語の主軸は實は文學といふ點にはないのであつて、それは古代の歴史傳承の方法であつた語部（かたりべ）の物語が、文字に移された過程の延長なのである。だから、平安朝の物語の主題には何か神の世界から縁の切れきつてゐないものが多い。その事は竹取物語の様に、月世界から罪によつて下界へ墮ちた天女が、再び月世界へ昇天してしまふといふ様な話にははつきり感じる事が出來るであらうけれども、實は光る源氏の君でも現實の人間の寫實的描寫とばかりは決していひ切れないのである。源氏の君も何かの垂跡であつて、その本地が探られ得るのでないかといふ氣もする。とに角物語といふ名稱には文字のなかつた時代のもの語りの古い觀念が殘つてゐるのである。だから平安時代にはまだ物語と歴史との概念は十分分化してゐないのである。その證據は、源氏物語の調子で藤原道長を中心に藤氏の榮華の歴史が書かれると、それは榮華物語である。その同じ主題が大宅世繼の昔話として書かれると世繼物語ともいへたし大鏡ともいへた。世繼物語とは歴史物語の意だし、大鏡の鏡は支那の資治通鑑などの鑑と同じく、支那史學の立場から見た歴史の意味を持つてゐる。とに角に物語の主軸は歴史だつたので、平安時代には物語はすでに文字的創作文學に變質しつつあつたにしても、一方にまだ嚴として物語即歴史といふ觀念を保存してをつた。さうした中では源氏物語が今日の文學といふに適はしい所まで變質しきつた形を見せてゐる最初のものといつてよいかも知れない。

それに比べると、枕草紙のやうな隨筆は、その發想に和歌に近いものがあつたやうである。日記にもそれがよく出てゐるやうである。つまり物語よりも一層文學的であつたのである。

ところで私は不用意に文學といふ言葉をときどき使つたが、その文學とは、せまい意味の文學的な今日いふところの文學のことなのである。隨つてそれはまた、讀者の個人的心情を抒情的にする。その意味からして、平安時代から中世を通じての文學傳統の主軸は和歌であつて、それの本質は、個人の心情を通した抒情であると見なければならぬ。物語などはまだ歴史と詩との間に搖らいでゐたのである。以上のやうに文學傳統の主軸であるといふ意味から見ると、中世の和歌はなかなか重大な意味を持つものとなつてくるのである。だから中世和歌を考へることは、宮廷を中心とした唯一の文學傳統の主軸を考へることになるのである。

さてその和歌の軸になるものは、歴代の勅撰の和歌集である。これが平安時代に六集、鎌倉時代に十集、吉野・室町時代に五集、併せて二十一集撰ばれてゐる。これを併せて二十一代集と名づけてゐる。これは後々まで必要だから、次にその表を掲げて置くことにしよう。

	集名	巻數	歌數	帝・院	成立
平安時代	1 古今集	二十	一一〇〇	醍醐夫皇	延喜七年以後(一五六七—)
	2 後撰集	二十	一四二六	村上天皇	天曆五年以後(一六一一—)
	3 拾遺集	二十	一三五一	花山院	長保—寛弘(一六五九—六五)
	4 後拾遺集	二十	一二二〇	白河院	應德三年(一七四六)
	5 金葉集	十	七一一	白河院	大治二年(一七八七)
	6 詞花集	十	四一一	崇德院	仁平年間(一八一一—一三)
鎌倉	7 千載集	二十	一二八五	後白河院	文治三年(一八四七)
	8 新古今集	二十	一九七九	後鳥羽院	天久二年(一八六五)
	9 新勅撰集	二十	一三七六	後堀河天皇	天福二年(一八九四)

	集名	巻數	歌數	帝・院	成立
鎌倉時代	10 續後撰集	二十	一三六八	後嵯峨院	建長三年(一九一一)
	11 續古今集	二十	一九二五	後嵯峨院	文永二年(一九二五)
	12 續拾遺集	二十	一四六一	龜山院	弘安二年(一九三九)
	13 新後撰集	二十	一六〇六	後宇多院	嘉元二年(一九六四)
	14 玉葉集	二十	二七八七	後伏見院	正和元年(一九七二)
	15 續千載集	二十	二一五九	後宇多院	元應二年(一九八〇)
	16 續後拾遺集	二十	一三四七	後醍醐天皇	正中二年(一九八五)
吉野室町時代	17 風雅集	二十	二二〇一	光厳院	貞和二年(二〇〇六)
	18 新千載集	二十	二三六四	光厳院	延文元年(二〇一六)
	19 新拾遺集	二十	一九二〇	後光厳院	貞治二年(二〇二三)
	20 新拾遺集	二十	一五五四	後圓融院	永德三年(二〇四三)
	21 新續古今集	二十	二一四四	後花園天皇	永享五年(二〇九三)

一體萬葉集にも勅撰説があるのだし、或ひはそれは有力な考へになりはしないかとも思ふのであるが、明確でないから避ける。古今集以後の和歌集が勅によつて撰ぜられたのは、經國集・文華秀麗集・凌雲集などの詩集が勅によつて撰ばれたのに倣つたのであるが、一度古今集が出てからは、これが永く御歴代の催しとなつた。和歌の傳統が宮廷に確立したことがそこにもあらはれてゐるわけである。

右の表を見られると分るが、古今集が二十巻になつたので、その後も殆ど二十巻である。それから右の表には出してないが、歌の部立（ぶだて）、つまり分類も、古今集が春・夏・秋・冬・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・大歌所御歌としてから、大體この方針が承け繼がれた。物名や大歌所御歌などは後ではなくなつたり、神祇・釋教の部が立てられたりしたが、四季・戀・雜の三大部は古今集この方、勅撰集の根幹となつた。さうした歌集編纂の分類形式にまで、古今集の型が根強く承け繼がれたのである。萬葉の聲調と古今の聲調との間には、可成りの

さうした形式の上だけにとどまらず、勅撰二十一代集が文學の主軸をなした時代といふものは、歌の聲調までが古今調であつたのである。

ひらきがある。勿論一から十までさうといふのではなく、古今集の中でも割に古い歌と思はれる讀人不知（よみびとしらず）の歌、つまり作者不明の歌には、萬葉風の感じられる歌もあるが、大體の特色をなす聲調は、萬葉と古今とでは可成りちがつてゐるのであつて、ことに、古今集の方には、宮廷の雅會に引きつけられた貴族的な、教養人的な感じが深い。二十一代集は全くその古今集の聲調を承けてゐて、萬葉集的なところは感じられないのである。かうした作品自體の性質までが、古今集への信頼をあらはにした傳統を背負つてゐるのを見ると、宮廷中心の和歌の主軸がどの様にはつきりしたものであるかといふことがわかるのである。このことは、別に一々例を擧げて説明するまでもなく、實地に讀めば誰にも分る事實なのだから、一つの基礎條件として念頭にとどめて置くことにしよう。

さて、さうした豫備智識をはつきりさせた上で、今一度右の表を見直すと、平安末期の金葉集と詞花集とだけが十巻になつてゐて、歌數もはるかに少ないことが著しく眼につくであらう。それに、古今の後に撰び、遺れるを拾ふといふ題號にもあらはれてゐるやうに、古今・後撰・拾遺の三集は互に先の集を承けて仕事をしてゐる意識が題の上にもはつきり出てゐる上

に、歌風も殆ど同じといつてよい。拾遺集で少し感じが變るけれども、大體同じと見てよいのである。だからこの三つを併せて三代集と名づける。古今集の歌風のもととなる集は、古今集だけでなく、三代集を指すのが普通になつて來てゐるのである。そして、そのつぎは後拾遺といふ風に、矢張り前を承けた態度で題名もつけてゐるのであるが、金葉・詞花となると、題名も全く別の詞花言葉を愉しむといふやうな風雅の宴遊氣分に立脚したやうな、題名になつてゐる。これはいはば、古今集この方の感じ方うたひかたがこゝだけで力を失くしてをることになるのであつて、なかなか注意に價することなのであり、それだけにつぎの千載集で、ふたたびもとの傳統的な型に復してゐるといふ現象も、なみなみでなく注意しなければならぬ問題なのである。

一度崩れ出した傳統は、並みのことではもとに復するものではない。大方は新しい流れに押されて行つてしまふものである。それが立ち直つたのだから、千載集の復古主義は非常に力の強い、旗幟鮮明な運動であつたことを承知しなければならない。こゝに實は中世文學の開始があつたのだともいへるのであらうが、とに角この現象は並々のものではない。そこで一體かう

した出來ごとはどうして生じ得たのであらうか。私はこの問題に托して、中世和歌の說明をはじめることとしよう。

和歌、といふよりは京都宮廷の文化の一轉機が、拾遺集から後拾遺集の頃にはらまれつつあつた。花山・一條の御代から後三條・白河の御代にわたる頃で、御堂關白道長から、その子宇治關白頼通の頃、美術史の方でいへば法成寺や宇治の平等院が出來たいはゆる藤原時代の頂上で、文學史の方でいへば枕草紙・源氏物語・狹衣・夜半の寢覺め・濱松中納言物語・更級日記などの生れた頃である。

この頃の藝術全體の上の特色は繪畫的要素の支配した點であつた。繪畫的といふことは、彫刻や建築やを一層視覺的快樂に奉仕させるやうになる。線條は纖細に、色彩は美麗になる。繪畫には佛像畫ばかりのところへ風景畫が成立する。そして廣大な空間を感じさせる畫面が成立するやうになる。文學の上では描寫が成立して、讀む中に、まざまざと視覺的映象をよびさますやうな技巧が生れる。これを文藝的な方でいへば、枕草紙などは繪畫的特色の粹といふことが出來るであらう。日本の歷史の上で未だあらはれたことのないものであつた。

たとへば、

五月ついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りかゝりたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。（三十四段）

ここに橘を、葉の濃青と花の白さとでとらへてゐる、色彩感覚的な技法を、記憶にとどめられたい。しかもそれはあかるい晝の日なたでもなく、はなやかな夕陽の中においてでもなく、ただ雨の降つてゐる早朝の、冷え冷えとした、ほのあかるさの中の橘をのみたたへてゐるのである。

もちろん橘そのものは萬葉集以來、王朝の貴人になじみの深いもので、紫宸殿の御庭先にも植えられてゐる右近橘である。題材としての新しみは何もない。にもかゝはらず、右の表現が印象的なのは、眼で見た橘の性格をはつきりと感覚してゐて、それを一ばん強調できる時刻と、天候とかに配合して見せたからである。つまりは空氣と光線との中でものを見た。これが繪畫的な效果の源なのであるが、そのことは、恰度この時代から生れてくるのである。

勾欄のもとに青き瓶の大きなる据ゑて、櫻のいみじく面白き枝の五尺ばかりなるをいと多

くさしたれば、勾欄のもとまでこぼれ咲きたるに、晝つ方、大納言殿の直衣の少しなよらかなるに濃き紫の指貫、白き御衣どもうへに濃き綾のいとあざやかなるを出だして參り給へり……うららうらとのどかなる日の氣色いとをかしきに……（二十段）

などは、うららかな春晝、滿開の櫻の枝と大納言（若い皇后定子の兄君伊周公である）との配合の美しさである。

秋は夕ぐれ、夕日はなやかに射して、山の端いと近くなりたるに、烏の寢所へゆくとて三つ四つ二つなどとびゆくさへあはれなり（一段）

にしても、

日は入日、入りはてぬる山際に光のなほとまりてあかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり（二〇五段）

にしても、入日の美しい場合をはつきりと捕へてゐる。かうした繪畫的な美しさがどうして生れたかは第二として、これがひたむきな感動の表白などでなく、鋭い感力でしづかに細かく對象を感受してゐるものだといふことは分らう。そしてその美しさは詠嘆調の美しさではなく、

感性的な美しさであることもたしかである。かうした美しさは、近代でいへば木下利玄の歌に見えた視覺的な美しさであつた。根源には視覺によつてゐるけれども、冷徹な智的判斷の是非とも要り用なものなのである。そして枕草紙で成功した、かうした美しさを、和歌が採り入れはじめたのである。

山ざくら花の下風吹きにけり木の下ごとの雪のむらぎえ　（康資王母）
山深み杉の群ら立ち見えぬまで尾の上の風に花の散るかな　（經信）
木の下の苔の綠も見えぬまで八重散りしける山櫻かな　（師頼）

このやうな歌が出來はじめた。勿論これは新古今集に取られた歌で、金葉・詞花の頃にはまさかこんな歌は取られてゐない。今少し古今集この方の抒情調に近い形のものが取られてゐる。

梢には吹くとも見えで櫻花かをるぞ風のしるしなりける　（金葉）
風吹けば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲　（〃）
この里も夕立しけり淺茅生に露のすがらぬ草の葉もなし　（〃）

鶉鳴く眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕暮れ　（〃）
白川の春の梢を見渡せば松こそ花のたえまなりけれ　（詞花）
掃く人もなきふるさとの庭の面は花ちりてこそ見るべかりけれ　（〃）
名殘なく時雨の空は晴れぬれどまた降るものは木の葉なりけり　（〃）

これは金葉時代の大立物源俊頼の歌ばかりであるが、金葉・詞花に取られたのは大體この程度であつた。けれども兎に角この感覺的に對象を捕へようとする技法が取られるやうになつたといふことは、理智的な技巧がものをいひはじめたことであつて、そのために歌の抒情の要素がそこなはれるやうになつたのである。

ところが、繪畫的といふことに附隨して歌の方に流れ込んだ今一つの特色があつた。それは駄洒落である。一體古代の笑ひは敵魔攝伏の魔法であつたことが民俗學の方から次第に明らかにされて來てゐるが、そこまでは溯らなくても、奈良・平安時代の御神樂には、天鈿女命が岩戸の前で踊つたやうに、おかしな身振りをしたり、人を笑はせるつもりで、こそぐりをいつた

りすることがつきものに成つてゐた。神の心をすゞしめるには、人間のよろこぶものと同じものが必要だつたのである。さうしたことが、後宮の女房の間にもなかつたとはいへぬ。萬葉集には志婁嫗といふのが戯言で持統女帝の御相手を申しあげてゐるが、さうした役の女房が後宮にも必要であつた。皇后や中宮やのおそばをつとめる身分高い女房は、時には后の宮の妹君がつとめられたり、公卿の娘がつとめたりする。その中で下級の殿上人の娘位の者が、尻輕るにちよこまかと細かな役をつとめる下役の女房になる。駄洒落や輕る口をたたいて、宮の内に笑を作るのもこの身分のものである。清少納言などもさうした女房の一人であつた。枕草紙にも「をかし」といふ形容詞が頻發するのを、ただ輕く「おもむきがある」といふ風に置き換へて讀んでゐると少し見當がちがふやうである。とに角清女の笑ひは、彼女がさうした役目を引きうけるに最も適した性格の持主であつたためもあらうけれど、單に自發的な笑ひであるよりは、多分に宮仕へのつとめとしての笑ひでもあつたやうだ。枕草紙はさうした任務にあつたために後天的にも一層さうした心の角度でものを捕へるやうになつた一女性の印象記であるともいへるであらう。

神樂の闇夜の篝火のそばで、採り物の歌の後、御酒をいただいた樂人たちがたくらんだ戯言と同じ性質の笑ひ言が、清女の筆を通して文學の形を取り得た頃、同じやうに、駄洒落は和歌の中へも流れ込んできた。千載集の撰者藤原俊成が、その名著古來風體抄の中で詞花集を批評していつた次の言葉に目をとめられたい。

詞花集は殊に様はよく見えはべるを、餘りにをかしき様の振りにて、ざれ歌ざまの多く侍るなり。

この言葉は本當である。

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらむ
山彦のこたふる山の時鳥ひと聲なけばふた聲ぞ聞く
胸は富士袖は清見が關なれや烟も波もたたぬ日ぞなき
我が戀は蓋身かはれる玉櫛笥いかにすれども合ふかたぞなき

これはみな詞花集の歌であるが、かうした狂歌まがひの作品が、勅撰集をかざるやうになつた

といふことは驚くべき事實であつた。

枕草紙にけざやかにあらはれた感覺的な繪畫的な叙景文や、ものを「をかし」と感ずる隨想は、たしかに新文學の發生であつた。しかしこの新傾向が後拾遺集頃から芽を出して、金葉・詞花を飾つたのは、同時にまた歌における新傾向の發生であつたとだけはいひきれぬものがある。つまりは、和歌にとつての非常な危機がこゝにめぐつてきてゐたのだといへると思ふ。それに引きかへて、源氏物語を讀まれた諸君はもちろん、與謝野晶子女史の新譯源氏物語の類を通讀された人でも感じられた事と思ふが、源氏物語のあの散文描寫には、伊勢物語の和歌などにも見えることであるが、言ひ様もないふかぶかとした抒情調が存してゐるのである。このことは出來がたい大問題なのである。

それまで歌であらはしてゐたしみじみとした抒情を、かへつて、物語の方が美事にしてのけて、それによつて源氏物語のやうな立派な描寫文學が成立する一方で、和歌はこれまでたひつづけた行き方では立ち行かなくなつて、金葉・詞花のやうに感覺的表現や戲言にたよるやうになつていつたといふことは、とほい平安時代のこととして氣樂に見てはすごせないものであ

る。和歌が短歌の形式を守る限り、その頃の堂上人たちは、自由に樂に抒情をすることが出來にくくなつてゐたのである。短歌文學の危機であつたと思はれる。

それを暗示する一つの逸話を挿むことにしよう。それは「今鏡」といふ鎌倉の初期に書かれた歷史文學の「村上源氏、にひまくら」の章にのつてゐる話だが、源雅定が若い頃、石清水臨時祭へ勅使となつて臨んだことがあつたが、式がすんで退出するとき、松の梢に時鳥の鳴くのが聞えた。時の陪從、つまり勅使のお供をして、神前に音樂を奉納するお供の樂人であるが、その陪從の一人が金葉集の撰者の源俊頼であつた。雅定は俊頼に向つていつた、「木工の頭の殿はあの聲をお聞きですか。」すると俊頼はすぐ、「思ひかけぬ春鳴けばといつた趣でございますな」と答へた。これは後拾遺集春下に、

三月つごもりに時鳥の鳴くを聞きてよみ侍りける　中納言定頼

郭公思ひもかけぬ春なけば今年ぞ待たで初音聞きつる

とあるのを思ひ浮べての返事であつた。今鏡の筆者は、突差の場合、下手な歌など無理に詠ん

だりするよりは、この方がはるかに立派だと評してゐる。そして驚くべきことに、批評された相手は當代第一の歌の大家なのである。かうした說話が傳はつてゐる所を見ても、和歌は親しむべきものでなく、漢詩などと共に、なかなかやかましい教養とか學問とかいつた風のものになつてきてをつたことが分るであらう。つまり和歌が行きつまつてゐたと言ふことである。

金葉・詞花といふ前代の集に異を樹てたやうな集名といひ、それが、十卷しかないことといひ、歌の特色の上に顯著な變化が生じたことといひ、それ等はかくて、短歌自體に危機の迫つてゐたことを意味する外のものではなかつたのである。

千載集はそのあとを承けて編纂された。どうして金葉・詞花時代の和歌の足どりの亂れは立ち直つたのであらうか。これを問題に立てて考へを進めれば、中世和歌の傳統は、割合に誤りの少ない見透しをつけることが出來ると思ふのである。

註　右の部分の考へ方については、拙著「新古今時代」を參考していたゞければ幸である。

三

千載集の奏覽は後鳥羽天皇の文治三年（一一八四七）で、撰者藤原俊成は七十四歲であつた。

一體俊成の出た御子左（みこひだり）の家は御堂關白道長の子長家から出た。道長には倫子と高松殿と北政所が二人あるといはれたほどであつたが、やはり嫡妻倫子腹の賴通の子孫から近衞・九條の二家が分れ、さらに五攝家に分れて今日に血を引いたが、高松殿腹の長家の筋は攝關大臣に登る家柄にはなれないで、普通には大中納言に止まる家柄であつた。父俊忠も中納言になつたが、俊成は參議に任ぜられるやうに願つてつひに望みをはたさず、安元二年、六十三歲で出家して釋阿といつた。現任の官職で參議に列すれば、たゞの殿上人でなく公卿に連なるわけであるが俊成はそれに失敗した。勿論位階の方で三位以上になれば別に官職はなくても公卿に算へられるわけで、俊成も正三位皇太后宮大夫まで登つたのだから、最後には公卿に列したには違ひないのだが、かういふのは非參議の三位といつて、何かわびしい現世での成りそこねに見えるのである。既に道長の子孫で正二位大納言まで行ける家柄なのだから、俊成は決して現世の成功

者とはいへなかつた。

しかしこれは敢て俊成だけのことでない。禍を退治た傳説で有名な源三位頼政、西行法師、大原の三寂といはれた寂超・寂然・寂念の三兄弟、金葉集を撰んだ源俊頼の子の歌林苑の俊惠少し若手では方丈記の鴨長明など、この時代の有名な歌人は多く世捨て人であつたか、世捨て人になつたかした。勿論、京都宮廷をとりまく貴紳の子弟であるから、官位の昇進を他所に見て、いはゆる世を捨てたところで、莊園からあがる年貢は何のかはりもなく生活を支へてくれる。それに時代は地方官にでもならない限り、官職についた俸祿は殆ど手に入らぬやうになつてゐた。だから出家はたゞちに生活水準の低下といふのではなくて。生きた政治面からの落伍といふことであつた。しかしそれが現實生活での強引な競爭に對して、何かたちおくれた弱氣な落着の仕方であることだけはたしかであつた。その頃は院政の時代になつてゐて、攝關政治を抑へ、皇室御親政の古にかへすといふ力が動いてゐたので、攝關家に抑へられてゐた反對勢力が、院の御所の事務長官である院別當などを頭に立てて、源氏平家の武力を京都で行使させるといふ風になつてゐたときなので、攝關大臣の家といつてもなかなか家柄だけに頼つてゐら

れないし、群小の才人はこの時代轉換の風潮にのつて、獵官運動に狂奔する。その隙へ、保元・平治の亂で自己の力量の目醒めた平家が、西國の富裕な地盤にものをいはせて、無理おしに京都へ押し出てくる。このやうにして、地方の國司から出て太政大臣まで經のぼつた平忠盛清盛父子二代のうちの平家の地位の昇り方といふものは一ばん目に立つのであるが、元來京都にあつた村上源氏や藤原氏の諸流にしても、案外なほどの地盤を獲得したのであつて、現世的な勢力の交代はなかなかはげしかつたのである。さうした中では、これまで父祖の餘榮を愉んで、分に安んじた高からず低からぬ、割に樂しい現實生活を營んで來た教養ある中堅どころの公家の中に、割にあきらめの良い、粘りの足りない子弟が多くて、世相のはげしさをうとましく思ひ、追從と暗中飛躍と賄賂とがあまりによく利くのに愛想をつかして、隱退する者が多くあつた。彼等はひどい野心もなく、自分のつとめを程よく守り、分相應の待遇を世から受ければ十分幸福な人々で、生活的には現狀維持派であり、現實生活の禮讃者である場合が多く、現狀破壞の行動者でなく、他人を羨み妬む不平組であることは殆どない。さうした人々が隱遁を決行するまでには、隨分心の準備が必要ではあつたらうが、いざ隱遁すれば、それは本質に

おいて閑適の詩人であつた。といふよりは世を見限ることによつて、一つの詩境を建立した人だといつた方が、尙よいかも知れない。俊成も本來さういふ歌人の一人であつたのだ。折口博士の修辭學にまなぶならば、「隱者文藝」はこの時代の文藝の、非常に重要な一部を爲してゐる。といふよりは、隱者文藝によつて最も美しく悲しい成熟を見せてゐるのである。千載集の風體はさうした隱者文藝的地盤の上に支へられてゐる。もちろん俊成といふ一個人の心を通してであるが、千載集のしめしてゐるものは一個人の性癖にとどまるものではなくて、もつと普遍性のある時代の傾向であつたのである。逆にいへば、時代の傾向は俊成の仕事によつて、はじめて鮮明な姿をとることが出來たといつてもよいであらう。

俊成ははじめ顯廣といつた。恐らく若い頃一時葉室顯賴の養子となつたためであらう。今見るところでは二十二歳のときの歌が殘つてゐる。二十五歳のとき、保延四年、和泉前司道經になかだちを賴み、藤原基俊の弟子となつた。基俊は康治元年に世を去つたから、足かけ五年の間であつた。新撰朗詠集の撰者でもあり、金葉集の撰者源俊賴と對立して下らなかつた人。顯廣はむしろ俊賴の歌風を好んだが、十六歳の頃すでに世を去つてゐたから、基俊につくの外なかつた。保延六年二十七歳で述懷百首を作つた。

康治年間崇德院から百首の題を賜はり、時の歌人が百首歌を詠んで奉つた。成つたのは一つとんで次の久安年間で、初度のは殘つてゐない。二度目のは久安六年の御百首で、院の外作者は十四人である。顯廣三十七歳で、その百首は殊に傑作である。千載集以後の勅撰集に六十五首とられてゐる。この間詞花集は元養元年、三十一歳のとき、六條顯輔によつて奏覽され、顯廣の歌も一首とられてゐる。

元安六年正月六日正五位下、翌仁平元年正月六日從四位下。仁平三年四十歳、院の仰せにより久安六年百首を部類分けして奉つた。仁安二年、清盛太政大臣となつた年、俊成と改名、五十四歳。安元二年出家、法名釋阿。六十三歳。

當時歌人としては、六條家がすぐれてゐて、詞花集を撰んだ六條顯輔、その子清輔、またその弟顯昭法橋等が殊に大家であつた。彼等は俊賴・基俊の世を去つた後は事實上一代の棟梁であつた。やがてしかし、顯輔は久壽二年に六十六歳で世を去り、子の清輔も父が詞花集を撰んだので、自分も續詞花和歌集を撰んだほどの人だが、勅撰の仰せを蒙ることなくて、治承元年

に七十四歳で世を去つた。彼は作家であるとともに、奥儀抄・袋草紙・初學抄などの著者で、歌學者としても大家だつたが、あとへ殘つた弟の顯昭は、歌學者として　俊成・定家も一歩をゆづる當時第一の大家といつてよかつたものの、作者としては段ちがひに下であつた。そこで俊成は自づと當代第一の歌人といふことになつたのである。

これより前、九條兼實は清輔を認めてゐたが、その卒去後間もなく俊成を引見した。その後子供の定家は九條家の家司になり、父子そろつて永く九條家の庇護を受けるやうになつた。文治三年、七十三歳で千載集を後白河院の奏覽に供へたのである。その後、俊成は九條兼實、その子の後京極良經を背景として、歌壇の元老となり、數々の歌合に殆ど一人で判者となり、作者としても衰へを見せず、建仁三年九十歳に達し、和歌所において九十賀を賜はり、鳩杖を賜はるの光榮に浴した。普賢寺關白近衞基通が俊成卿九十賀記を書いた。翌元久元年十一月三十日に九十一歳で薨じた。恰度新古今集の竟宴が行はれる前の年であつた。

彼の家集は長秋詠藻といふ。長秋は皇后宮の唐名であるから、皇太后宮大夫であつた役名を

冠したわけである。治承二年俊成六十五歳のとき、仁和寺宮守覺法親王の仰せによつて自撰したもので今普通に流布してゐる六家集本といふのは、後の人が、獻上以後の歌を書きたしたものである。もちろんこの外にもまだ俊成の歌は散在してゐる。

その外、建久八年八十四歳のとき、式子内親王の仰せによつて、歌について論じ、萬葉から千載までの秀歌を抜いて註解した古來風體抄を作つてゐる。俊成の歌についての考へを見るに大切な著書である。その外六百番歌合判詞の如きは、顯昭のひどい反撃をうけたもので、その方は顯昭陳狀といふ名でのこつてをり、兩者あはせて見ると歌に對する批評意識をよく見ることが出來て、なかなか大切な文獻である。

とに角俊成は清輔の死によつて、九條家に拾ひ上げられてからは、歌界の重鎭となつて、實にめざましい活躍ぶりを示したが、年からいへばすでに六十歳を過ぎて世捨て人となつた後のことではあり、世界からいへば全く和歌の雅會に關する範圍だけでのことであつて、いはば藝の上での面目だから、隨分權門に對しては追從もしなければならなかつたし、また歌界だけで見れば、六條家の末輩は九條家の政敵であつた土御門家の家司になつて對抗して來たりしたか

ら、狹いなりに歌界にも歌界なみの政爭はあつて、老後の俊成には、西行や歌林苑の俊惠と心を通はしてゐた六十歲以前の頃に比べて、決して安靜はめぐまれてゐなかつたといつてよい。それもまた隱者文藝の色彩が全歌壇の傾向を導いたため、彼のやうな人間が擔ぎ出されるに恰度よい條件をそなへてをつたからに外ならぬ。そのやうな傾向が歌壇の中にうごいてをつたことは、後鳥羽院が西行を激賞されたり、若き攝政良經が自ら南海漁夫といつたり、家集を秋條月淸集といつたりしてゐるところにもよく反映してゐるといへよう。ある意味で俊成は、隱者文藝が全歌壇的色彩をもつやうになつたために、隱逸を捨てたともいへるのである。

さて千載集は壽永二年二月に後白河院の院宣が下つて、文治三年九月二十日に撰進されたものであつた。序文はその日附になつてゐる。ところが俊成の子定家の日記の明月記には、文治四年四月二十二日巳刻ごろ、俊成が撰集奏覽のために參院したと記してゐる。內々の改訂でもしたらしい。表向きの撰進は、だから序文の日附のとほりといふことになつてゐたのであるだらう。

千載集の特色は、形の上では金葉・詞花二集が十卷だつたのを、ふたたび二十卷とし、序文もつけて、すべて古今集の型にかへした點にある。これは先づ形の上にあらはれた古今集崇拜の態度である。何でもないことのやうであるが、實はこれが根本的に大切な點なのである。

當時は古典復興の氣運がしきりに動いてゐた時であつた。これは院政以來の上層部の大きな欲求で、保元平治の亂の頃の大立物であつた惡左府賴長、すなはち道長の直系の關白忠通の弟であつた賴長は、ことに政治制度の上での復古主義者で、律令格式の研究に熱中し、政令上に出でて下これを通ずる一絲亂れない平安初期の秩序にかへさうと思つてゐた。九條兼實も藤原氏に關する限り非常な復古主義者であつた。さうした政治上の復古主義がおこつた中では、文學もやはり復古的氣運に搖りうごかされるのを避けることはできないのであつた。その文學の復古現象の中で特に目立つたのは、何と云つても萬葉集の訓詁註釋の事業であつた。村上天皇の御代に宮中の梨壺に學者が集まつて、萬葉集の訓をつけ始めたのが古點、道長頃から平安末期へかけて諸學者が訓をつけたのが次點、そして源賴朝が鎌倉へ幕府の基礎を置いた元暦元年に、有名な元暦校本萬葉集が成つた。その頃まだ百五十首ばかり讀めない歌が殘つてゐたのだ

が、それは鎌倉の中頃、仙覺律師の新點で一應すべて訓み解かれるやうになるのである。それは先のことだからとも角として、大體の歌が讀めるやうになると、類聚古集や古葉略類聚鈔などのやうに、部類分けした萬葉集も出來るし、萬葉集抄のやうな註釋も出來る。柿本人麿の畫像を懸けて人麿忌が營まれるやうになる。このやうな空氣の中で、六條清輔、顯昭法橋はことに萬葉の學に精しかつた。清輔のは奥儀抄や袋草紙を見ればそれが分るし、九條兼實もその日記玉葉の中で、特に清輔の萬葉學について稱讃の辭をのべてゐる。顯昭のは袖中抄にも少し見えるが、顯昭陳狀や萬葉集時代難事などにすごくあらはれてゐる。これに對しては、俊成の萬葉集時代考や、定家の萬葉集長歌短歌説などでも、受け太刀であつたといはざるを得ない。とにかくこの古典復興の氣運の中で、六條家の歌學は萬葉研究の流れを強く代表してゐるものであつた。

俊成の古今集第一主義は古典復興の氣運の今一つ別のあらはれではあつたが、また暗に六條家の態度に對する反對派の立場でもあつたのである。強ひて反對しようとしたのではなく、一歩後から出てきたために、自づとさうなつたのかもしれぬが、またはじめから反對意識によつて立ち上つたからとそこまで來ることができたのかも知れぬ。その點ははつきりしないけれども、「萬葉と古今とがともに古典復興の氣運にのつて、歌人の間に注意されはじめてゐたことは事實であつた。」萬葉は漢字を讀みとくことがものめづらしく、男子の學問的意識が手つだつて、古今は女子の教養としての條件が舊來通りはたらいて、いづれも人々の間に關係が保たれてきてゐたに違ひないが、「その中で、少くとも俊成は、身をもつて新しく古今集に共感しはじめた代表者であつたのである。古來風體抄の中に、一箇所では、「歌の本體にはただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり」といつてをり、他の箇所では、「古今こそは本體と信仰すべきものなれば……」といつてゐる。これは顯昭陳狀の中に、「やまと歌は萬葉を本體と侍るに……」といつてゐるのと全く對立する宣言でなければならぬ。この覇氣が、現世の勢力爭ひに敗れた俊成の何處から出て來るのかとおどろかれるばかりである。

「しかも大切なことは、俊成の古今禮讃が、意氣だけ熾で實行の創作上にともなはない、浮き足立つた感激ではなくて、むしろ反對に、俊成自身の生命の直覺的共感が古今集を摑み、古今集にたよることによつて、一層たしかに表現の技術を築きあげたことである。かくて、俊成の

やうな隱者が、心から古今集に溺れるといふことが、なかなか根本の問題だといふことになるのである。

それに、萬葉の學に秀でた六條家の人々でも、清輔のやうな作家の歌は、少しも萬葉風ではない。

あさ霞ふかく見ゆるや煙たつむろの八島のわたりなるらむ
おのづから涼しくもあるか夏ごろも日もゆふぐれの雨のなごりに
薄霧のまがきの花の朝じめり秋は夕と誰かいひけむ

また顯昭のやうな人は萬葉の學に如何に秀でても、そのために歌はよくならなかつた。一時俊成の養子であつた有名な歌人寂蓮と顯昭とは、六百番歌合の批評會（衆議判の席）へ缺かさず出て爭つたが、つひに顯昭が「歌程やさしいものはない、寂蓮程の無學でもあのやうに名人になれる」といふと、寂蓮が「歌程難しいものはない、顯昭程の大學者でも歌はまづい」と應酬した、といふ傳說のある通り、顯昭の歌は冴えなかつた。

萩が花ま袖にかけて高圓（たかまど）の尾上の宮にひれ振るや誰

といふ歌など、萬葉に出てくる素材を扱つてはゐるが、聲調は全く萬葉的とはいへないのである。そのほか、後鳥羽院御口傳にも、萬葉は詞がむづかしいから、他人に使はれて解し兼ねることのないやうに、一應學ぶべきだと記されてあり、順德院の八雲御抄にも萬葉の名はあげてをられるが、萬葉を本體として、そこから出發せよといふ態度ではないのである。定家にいたつては毎月抄の中に、未熟なうちから萬葉をまねしてはいけないとさへいつてゐる。それ等を綜合して考へると、當時の京都貴紳の間においては、たとへ萬葉がたしなまれても、それがいつも博識を結果するにとゞまつて、たゞちによい「詩」を創める養分にも刺戟劑にもなり得ない事情が存在してゐたことが分るのである。それをいち早く直覺してゐたのはやはり俊成であつて、古來風體抄の中にも、萬葉の歌は玉石混交だから、餘程取捨が必要である、決して萬葉だからといつて頭から信仰してはならないといつてゐる。俊成の言はあくまで主體的であつて、詩人の言である。顯昭のやうに、萬葉集は最も古い、歌集の權輿だから本體とあがむべき

だと考へたり、勅撰和歌集は何れもありがたいもの故、どれもその點で甲乙はないとして、古今集から千載集までの七集の注を同じやうにつくるといふやうに、觀念的な、和歌の「詩」的價値以外の種々な條件を勘定に入れた考へ方はしないのである。俊成はあくまで「詩」を中心にした主體的な評價である。本來「詩」を感じるといふことは、はたからは分らぬことで、本人の主觀がさう感じるの外には感じられないものなのだから、俊成の態度こそ本當のものなのである。そして、その結果、彼は古今集を第一等の歌集だとした。

思ふに當時、宮廷貴紳を擧げて、このさき如何になつてゆくか分らないやうな不安なけはひがあらはれてきてをつたことは、すでに諸君の諒解された通りである。保元平治の亂や清盛の獨裁政治といふやうなものは實は表面化した一部のあらはれに過ぎないのであつて、あの四百年に垂んとする平穩な平安時代に、このやうな異變を可能ならしめるやうになつた、その見えざる世相の轉變こそ、きはめて徐々にではあつたが、公家の人心に無常を觀ぜしめる、どうにもならぬ原因であつた。だから、大僧正慈圓などは愚管抄の中で、歷史を推進させる道理の存在をきつく主張したけれども、その道理が具體的事件の上に如何にはたらくものであるかを法

則化して見せる社會史學のやうなものは、何等存してゐなかつたのであるから、人々はたゞ何となき不安の中にあるの外なかつたのである。現世の眞面目な勤勉が、何等それに正比例する報いを保證しない。案外に人目を胡麻化して追從贈賄を行ふと利目がある。そのやうな事實は人心を極度に自棄的にするものである。人を怨み、怒り、己の生涯に不平不滿を持つことは常住となる。けれどもそれは、それまでの佛法の教にしたがへばすべて墮獄の因である。如何に己の心を良く保たうとしても、ちひさな個人の意志が己を制し切れないほどに、世の中の相は人心を刺戟しやすく、怪奇で混亂してゐる。もし人心の歸趨するところに流されるのを潔しとしないで、獨り孤高の清節を徹さうとすれば、誇りがな心は逆にまた驕慢の罪を犯すこととならう。

かうした現實に應ずるものとして、淨土思想は急速に力を伸ばしてゆく。現世に如何に罪をつくらうとも、最後の一念によつて極樂淨土に引攝されるといふ彌陀の本願の教へが、たゞ一つ人心を救ふ宗教でありうる。森嚴な道理を世相の推移の中に探究しようとしても、それは常人には不可能の業にすぎなかつた。その上わるいことに、この時代は、どんな計算にしたがふに

しても、佛の豫言の末法の世がおとづれつつあつたのである。末法の世とは佛法が全く力を失ふ時代をいふのであるから、「末世が來つた」といふ聲は、宗教以上に高い思想を所有しなかつた時代の人にとつては、世界の瓦解の響きに似てゐたのである。

かうした轉變の世にあつて、幾代の祖先この方、不文の律と見なされたところの、家柄相應の地位を宮廷において占めることにすら失敗して退場した多くの隱者は、己が現世についてはは何の望みも持たなかつたけれども、その生活は莊園にすがつてさし當り浮浪の徒となる惧れをまぬがれてゐた。さうしたときに花咲く人の心の影が「詩」であつたのである。その詩は現實にやぶれて、それのかはりに肉身がしみ出させた眞珠の玉ともいふべきものであつた。はじめから風流の韻事である。花鳥の雅遊である。感性の愉しさに手ばなしで媚びるのである。俊成の感性が古今集の聲調に親近を直覺したのは、彼が身を以て詩客であつたからのことである。そして、俊成の聲が時代を率ゐることのできたのは、宮廷の貴紳の心が擧げて俊成の「詩」に類した詩を培ひつゝあつた溫床であるからに外ならなかつた。千載集が古今集の古へを復活させたといふことには、以上のやうに考へることのできる時代的必然が、その根源に存在してゐたのである。

以上のやうにして、千載集は歌集としての形の上で古今集に近くかへつただけではなく、その歌柄の上でも古今集に近くなつてゐた。その特色を一語でいつてみれば、それは抒情性の優位といふことに外ならない。

一つ前の詞花集と比べて見ると、その點はことによく分る。詞花集には、第一に詞の聯想からくる興味をねらつたものがある。

萬代のためしに君がひかるれば子の日の松もうらやみやせむ
子の日すと春の野ごとに尋ぬれば松にひかるる心地こそすれ
まこも草つのぐみ渡る澤邊にはつながぬ駒も放れざりけり
取りつなぐ人もなき野の春駒は霞にのみやたな引かるらむ
いかなれば氷はとくる春風にむすぼほるらむ青柳の絲

いはゆる俊成のざれ歌ざまのものであつて、一歩をあやまると、單なる駄洒落になつてしまふ

危険の非常に多いものである。しかもそれが非常に多く眼につくのである。同じ行きかたのものでも、千載集の方のは數も非常に少ない上に、

いづ方に花咲きぬらむと思ふよりよもの山邊にちる心かな
夜もすがら花のにほひを思ひやる心や嶺に旅寢しつらむ
花ゆゑにかからぬ山ぞなかりける心は春の霞ならねど

のやうな調子で、語呂合せ的な言ひぶりが、かへつてなにか風流に淫してゐるといつた感じの抒情味をしめしてくるのである。

第二に、詞花集の駄洒落の歌の間々にあつて光つてゐる歌は、次のやうなものである。

きのふかも霰降りしかしがらきの外山の霞はるめきにけり
雪消えばゐぐの若菜もつむべきに春さへ晴れぬみ山邊の里
みやま木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり
白雲と見ゆるにしるしみよしのの吉野の山の花ざかりかも

白川のはるの梢を見わたせば松こそ花のたえまなりけれ
櫻花ちりしく庭を掃はねば消えせぬ雪となりにけるかな
はく人もなき古里の庭のおもは花散りてこそ見るべかりけれ

などの類で、前にも觸れたやうに印象の鮮明で、むしろ視覺に訴へるところのある歌である。この種の歌は新古今のときに頂上に達するので、これもまた千載集としては非常に少ない。

霞しく春のしほぢを見わたせば碧(みどり)を分くる沖つ白波
春雨の降りそめしより片岡のすそ野のはらぞ淺緑なる
かげきよき花のかがみと見ゆるかなのどかに澄める白川の水

などいふ歌が所々にごく稀れに見えるだけである。それ等に對して、詞花集の方にあまり見られないで、千載集の方にはざらに見られる歌、つまり千載集調の根幹をなしてゐる歌といふのは次のやうな類のものである。

春のくるあしたの原を見わたせば霞も今日ぞたちはじめける

さよふけて風や吹くらむ花の香の匂ふここちの空にするかな

春の夜はのきばの梅をもる月のひかりもかをる心地こそすれ

梅が枝の花に木づたふうぐひすの聲さへにほふ春のあけぼの

春はなほ花のにほひもさもあらばあれただ身にしむは曙の空

花ざかり春のやまべを見わたせば空さへにほふ心地こそすれ

ささなみやしがの都はあれにしを昔ながらのやまざくらかな

おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかかる白雲

白雲とみねのさくらは見ゆれども月の光はへだてざりけり

花の色に光さしそふはるの夜ぞ木の間の月は見るべかりける

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮のそら

これ等の歌にすぐ感じられる事は、第一に嫋々とした餘韻と、第二に自然を鑑賞する特殊の角

度とである。まづ第一の點であるが、一讀して意味もよく解り、その上讀みくだしてゆく言葉の調子がなだらかで心地がよい。そのことが助けあつて、一層抒情調をゆたかにしてゐるのである。右のやうな點が古今集の正調にかへつたといはれる點で、これに比べると、すべての意味で金葉・詞花は才はじけた聰明な歌だが、眼で見、頭で詠んでゐる感じがする。千載集の歌はさうではない。いちいち心に觸れて詠歎ひさしうしてゐるといつた感じである。これは俊成が歌の理想としてゐたものと一致するものである。古來風體抄に、

必ずしも錦、繡（ねひもの）のごとくならねども、歌は、ただ讀みあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にも哀れにも聞ゆることのあるなるべし、

といつてをり、日吉社歌合の判詞にも、同じやうな說明をしてゐる。そして、かうした特色を「幽玄といつてゐたらしい。

幽玄といふ言葉については長い歷史があるが、俊成としては永萬二年五十三歲で中宮亮重家朝臣家歌合の判者をつとめた。いま殘つてゐるものでは、判者をつとめた最初のものだが、それには既に幽玄の語が出て來るのである。

うちよする磯邊の波の白ゆふは花ちる里の遠目なりけり

の歌に、「風體は幽玄調、義非ニ凡俗一」といつてゐる。その後屢々用ひてはゐるが、幽玄が先の風體抄の説明に見るやうな内容を持つてゐるものと規定したところは一箇所もない。たゞ鴨長明が無名抄の中で、近來幽玄といふことがいはれるが、むつかしい言葉である、しかし自分の理解する限りではといつて、

詮はたゞ、言葉に現はれぬ餘情、姿に見えぬ景色なるべし。心にも理深く、言葉にも艶きはまりぬれば、たゞ德は自づからそなはるにこそ、例へば秋の夕暮れの空の景色は、音もなく聲もなし、いづくに如何なる故あるべしとも覺えねど、すずろに涙のこぼるるが如しと記してゐるのが、古來風體抄の俊成の言と一致する。そこで、大體、千載集は幽玄の風だといつてよいのである。あまりいはれてゐないことだけれども、俊成が幽玄をとなへたといふことは學者の間に著明なことになつてゐながら、幽玄と千載集の歌風との關係を考へてみなかつたといふのは不思議なことである。

だから私は千載集の抒情調をもつて幽玄であるといふことにしよう。そこで千載集が古今の正調に復したといふのは、つまり幽玄の調を打ち立てたことに外ならぬのである。ただ古今集と千載集とではどこがちがつてゐるのであるかといへば、それは千載集は、幽玄といふ如きことを「詩」の必要條件として要求する心の生んだものであつたといふことである。古今集にはさうした意識はまだ成立してゐないのである。

しかもその「詩」は、隱者によつて要求された詩である。當時としては、京都の中流公家の古く誇らかな家の歷史の故に、下品で露骨な競爭から退かねばならぬ宿命を持つてゐた人々、隱者の「詩」であつたのである。俊成の子定家は治承四年に十九歳の青年であつた。それは千載集奏覽の足かけ八年まへであつたが、日記に、源平の爭亂を記して、「世上の亂逆追討は耳に滿ちたりと雖も、これを注せず、紅旗も征戎も吾が事にあらず」といつたのは有名なことである。恐らく父と心を一つにした時代、父の心を鵜呑みにしてゐた頃の言で、後年の二十代三十代の定家を思ひ比べると、この言には父の影響によるところが餘程あるやうに思ふ。しかしさうでなければ一層都合がよい。この十九歳の青年もすでに深く感じてゐたやうに、現世の政爭

を風馬牛視し得る生活の確立である。かうした態度は單なる弱さではない。現世の榮枯盛衰ばかりに氣をとられて、この世で少しでも立身出世しようといふ野性的な本能のまゝに、逞しく主我的な行動をすることに別れをつげた文化精神が、苦難のときにおいて成し遂げた目覺めであり、反射的行動への觀照の君臨である。この世において自己保存の本能にしたがふことを封じ込めなければならなかつた心の命令である。

かうした心が古い傳統にしばられたものであることは言はずもがなであらうが、それ故にこそ、そこに精神の貴族主義が生れるのである。現世に失敗しても、心の世界で低劣に墮しまいとする誇りである。それが眼を物外に向けることを教へたのである。千載集の歌はこのやうにして、すべて風流である。そこに、ある一つの角度をそなへた鑑賞が生れるのである。そしてこれがさきに擧げた特色の第二である。古今集この方和歌に詠まれたものを、そのまゝすべてよしとし、心愉しましめるものとして、無上にいつくしむのである。その證據には、千載集の四季部の歌を、その主題によつて分けてみると、古今から詞花までの歌題と全くかはりはないのであつて、新しい題材などは何もないのである。（そのことについては、精しくは拙著「新古今時

代」中の「八代集四季部の題における一事實」を讀んでいたゞきたい。）千載集の詩はかくて、無限にゆたかなこの自然物の中から、新しい材料を見つけ出すところに生れたものでなく、從來よく知られ、使ひふるされ、古臭くなつてゐる材料に、今さらの如くになつかしさを感じ直した詩である。

和歌がこのやうにして、蘇生したのであるが、同時にそれは自覺的な傳統の樹立であつたわけである。傳統は、失はんとするが故に、改めて愛することを强ひられた心に樹てられる。千載集はあらゆる意味において、中世和歌傳統の淵源となつた。といふことは中世の「詩」の源流となつたといふことである。俊成の置かれた地位を、中世の公家が經驗しなければならなかつたので、古今集に對しても、俊成が感じたと同じやうに魅力を感じつづけねばならぬ因緣を持つたのである。千載集が中世の和歌文學の第一頁を飾るのは、古今集傳統を新しく中世の「詩」の基底にたたき込んだからである。

註　俊成のことは「大日本史料」の俊成薨去年月日の所、「公卿補任」・「尊卑分脈系圖」を見られるとよい。また「短歌講座」中の「藤原俊成家集講話」、川田順氏著「俊成・定家・西行」もよい。隱者文

藝のことについては「隠岐本新古今集」巻頭の折口信夫博士「隠岐本新古今和歌集の文學史價値」を是非讀まれたい。

四

俊成と同じ時代の人がすべて俊成のやうな歌を作つたといふのではない。もちろん時代調といふものは爭はれないが、すでに短歌が歌謠と袖を分つて四百年のときが流れ、個性を反映する文字的文學の主軸となつてきてゐる以上、人によつて和歌に個人の差が出るのは當然である。しかし個人の特色といふ點からいへば、俊成はむしろ己の心をささやくことよりも、古典の中に感じられる情調に耽ることに、一層の親しみと愉しみとを感じてゐるやうな點がある。おとなしく、內氣で、しかも自分の文學精神にだけはあくまで信賴をつないだ、上品な貴族らしい人のやうである。

西行法師は數ある歌人の中で、俊成とともに最もこの時代らしい歌人である。しかも身を以て隱者の典型を示した人である。しかしながら古典に耽溺するといふよりも、自分をさゝやくことに、一層の親しみと、避けがたい宿命とを見せてゐるやうな點で、人としては俊成と對蹠的であつたといつてよい。隔てなくしたしめる、人間味のゆたかな人のやうに感じられる。そ

んな點が西行の人氣を斷然他の歌人よりも高いものにしたのであるらしい。

西行についてはすでに、尾山篤二郎氏の實證に徹した「西行法師評傳」といふ名著があるし、川田順氏に「俊成・定家・西行」といふ叡智ににほふ好著と、「西行」（創元選書）といふ手頃の本がある。またその歌集については、流布の山家集の外に、早く藤岡作太郎博士の「異本山家集」の刊行があり、その後、佐々木信綱博士の聞書集の發見、伊藤嘉夫氏の聞書殘集の發見があつたことは、その筋に興味のある人は精しく知つてをられるところであるが、それ等の資料の外、諸歌集に散見する作も拾ひあつめて、伊藤嘉夫氏の「西行法師全歌集」（富山房文庫）といふ感謝すべき標準的な良歌集が出てゐるのは、西行を知るためにこの上ない好都合である。その他の諸書はさて措いて、今は少くも右の諸書を抜きにしては、西行を語ることはむつかしくもあり不便でもあるであらう。

さて有名な山家集はやまが集でなく、さんか集と讀む。歌人も多いが西行位人氣のあるのは特別で、俳人芭蕉などと同じく、歌のよしあしなどは第二であつて、人間の親しめるといふやうな、文學以前、歌以前のものが人に感じられるからである。

そのために、途方もない傳說は早くから西行の身の上に結びつけられた。撰集抄・西行法師繪卷・西行一生涯草紙などで、とんでもない人間が出來てしまつた。たとへば、出家しようとするとき、女の子がとりすがつたのを緣側から蹴おとして家を出たとか、後年、長谷寺へ參籠すると、行ひすます尼と出會ふ、これが昔のわが妻であつたとかいふ類で、これは幸田露伴氏の「二日物語」にすばらしい筆つきで描かれてゐるが、しかし西行のこととしては、どうにも本當か嘘か判らない。蓋し中世は、佛敎的世界觀の支配した時代で、現世は穢土であり、人情のままことは煩惱と見たから、聽衆の方は、子供を蹴とばすといつた少々感情を虐げたやうな、芝居がかりのことをする人間にえらさを感じたし、傳說の方も、さうした感傷的な調子の尾鰭が、何時の間にか非常に多くなつてしまつた。謠曲などにも隨分西行は出てくる。さうした話を拾つてくると、傳說化された西行は判るが、本當の西行の姿は埋れはてるのである。中世の感傷は西行を種にして一つの芝居を作つたのであつて、いはゞ最負の引き仆しである。

西行は保元亂が三十九歲で、大體平安末の人、平家の亡びた文治元年は六十八歲で、鎌倉時

代に入ると間もなく、文治六年（建久元年）二月十六日に七十三歳で死んだ。大體俊成と同じであるが、四歳年下であつた。

名は佐藤義清、憲清とも則清とも書き、法名は圓位ともいつた。德大寺家の家人で、俵藤太秀鄕の子孫だといふが、家柄はあまり高くなく、右兵衞尉に任じた。恐らく一生つとめても五位の昇殿、國守になる位で、四位はなかなかむつかしかつたらう。しかしすばらしい富豪であつたといふことが悪左府賴長の日記の台記にしるされてゐる。だから山寺にこもつても世捨人の心を清くするための隱棲であつて、決して宗教の社會に翼をひろげようとして大僧正をねらふといふやうな、野望に燃える學侶たちとはちがふのだから、その山棲みが案外のんびりとしてゐたらうし、決してまた、世にいふ乞食坊主でもなかつた。いはゞ僧形に身をやつした風流の隱士だつたのである。

彼の前半生は全く不明である。出家は二十三歳のとき、崇德天皇の保延六年で、眞言宗である。出家後しばらく京都近くに居り、それから伊勢へ行つてしばらく住んだらしく、それから東海道を奥州まで旅した。また京近くへ歸つてきて、三十代に熊野、高野山及び天野山、吉野

山にこもつた。これが修業時代で、五十代に入ると、西國の旅に出た。備前から四國にわたり、おもに讃岐にゐて、筑紫まで行つたやうだ。六十九歳になつて再び伊勢に行き、そこから東海道を鎌倉に出て賴朝に謁し、はるか奥州平泉まで藤原秀衡に會ひに行つた。旅から歸つたのは翌文治三年七十歳のときで、しばらく京の近くにゐて、それから河內の弘川寺に入つた。醍醐の末寺で古義眞言宗の寺である。

願はくば花のもとにて春死なむその二月の望月の頃

といふ歌は死の一二年前に詠んで、仲間の間に知られてゐたが、望みのごとく文治六年二月十六日弘川寺で世を終つたことが知れると、京都の歌人の間には西行の死にふかい反響がおこつた。七十三歳であつた。

西行を旅の詩人などいふときに、普通に一生を漂泊にすごした乞食坊主のやうに考へる考へ方は、現在限り改めなくてはならない。彼は當時の公家一般の尺度からいへば非常によく旅をした。けれども乞食坊主でもないし、一生漂泊したのでもない。それは當時の源氏平氏の者た

ちでいへば、この位の旅は何でもなくなつてゐた。つまり日本人にとつて、その世界は次第にひろくなりつつあつたのである。たとへば鳥羽院頃から後鳥羽院にかけて、歴代の上皇方は屢熊野へ詣でられるやうになつて、一生の中には數十囘に及んだお方もある。上皇の御幸であつても、お供の公卿たちは急造の庵に草枕することもあつたのだが、それにしてもかうした交通の自由感の生れてきてゐたことが、一介の隱者にも世界を股にかけさせることが出來たのであつた。これは當時眞に戸籍なくして乞食のために天幕を張りつつ、漂泊に一生をすごした浮游の民の傀儡師の類とは全く別のものである。いはゞ殿樣的贅澤であつた。

たゞ思ふべきは、その當時まだ不便限りなかつた旅へ西行を驅り立てた、その內的欲求の强さといふことであつて、これが彼をして隱者文人の典型たらしめたのである。當時西行にひとしい思ひを胸に秘めた人々は公家の間にも多くあつたらうし、彼もしばしば出離を人に奬めてゐる。しかも他の人は敢然とそれを爲し得なかつたのに、彼のみが決定的にそれを爲し得たといふところに、彼の「詩」の生きる契機はあつたらう。蓋しここではすでに和歌が「詩」であり得るためには、現實を精神に隷屬させる豪奢な放蕩を必要としたのであつた。たゞ何が彼をさうさせたかは永遠の秘密といふ外はない。たゞ彼の歌の中に戀の體驗に關する歌の多いことが、一つの暗示を與へる。彼に二十三歲で世俗を蔑視する態度を取らせたのは、若い頃の戀愛であつたらう。しかもそれは身分の懸隔などのために、如何にしてもかなへることの出來なかつた戀であらう、といふことである。そして、その結果出家した西行は獨身であつたのでないかと考へられる川田氏の說は意味が深いのである。

なかなかに思ひ知るてふ言の葉は問はぬに過ぎてうらめしきかな

お察し致しますといふ貴女の御言葉はかへつてつらいといふ詞には、のり越えられぬ柵の體驗をひゞかせてゐる。

よしさらば涙の池に身をなして心のままに月をやどさむ

駄々つ子のやうな捨て鉢な態度。

葉がくれに散りとどまれる花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する

殘んの花の歌で戀歌ではないであらうが、忍びし人に逢ふ心地に、生身の心の溫かみを感じさせるのである。

うとくなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬ折もありしを

かうした歌の出來る人は、戀も知らずに大人になつて、歌會の席上戀の歌題を出されて、昔讀んだ物語の中の場面などを思ひうかべながら蕩冶な感じを歌にまとめようとした多くの人々に比べて、まるで別な精神の徑路を歩いてゐた人に見えるのである。

西行ははじめから行ひすました世捨て人ではない。實人生への敗恤と、それによつて交換し得た文學精神の不逞の自信とで、內心の動搖をなかなか處理しきれなかつた人のやうだ。出家當時は京都にゐたり、三十位になつてから熊野や高野へこもつたりしたらしいことも、それを暗示するものかもしれない。だから西行といへば、花鳥風月を友として悟りすました人のやうに思ふのはあたらないので、花月につけても傷心の歌をうたつたのである。

花見ればそのいはれとはなけれども心の中ぞくるしかりけり

花にそむ心のいかで殘りけむ捨てはててきと思ふ我が身に

出家の決意の定まつたころの歌をついでにここへ揭げて置かう。

空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つ哉

世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせむ

歌の巧拙ではない。その自體の中に宿つた心のうめきが洩れてゐるやうである。

三十を過ぎて高野にゐた頃、京から「思はずなること思ひ立つ」といつてよこした人がある。

しをりせでなほ山深くわけ入らむ憂きこと聞かぬ所ありやと

そんな悲しいお便りは聞かずにすませるやうに、もつと山深くのがれよう。この人は女であつたのかも知れない。

高野からはときどき吉野まで出かけたやうで、時には庵を結んで住んでゐる。

ながむとて花にもいたくなれぬれば散る別れこそ悲しかりけれ
吉野山ほき路づたひに尋ね入りて花見し春はひともむかしかも

月の歌も少し、

うちつけにまた來む秋の今宵まで月ゆゑ惜しくなる命かな
うき身こそいとひながらも哀れなれ月をながめて年を經にける
雲消ゆる那智の高根に月たけて光を貫ける瀧のしら絲

老境の歌、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山
さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
とふ人も思ひ絶えたる山里のさびしさなくば住みうからまし
ここをまた我が住みうくて別れ往なば松は獨りにならむとむらむ

ゆたかな情感は最後まで歌を貫いてゐる。だから、

心なき身にもあはれはしられけりしぎ立つ澤の秋の夕暮れ

のやうな歌も出てくるのである。出だしからきざな歌だといふ批評も多いが、「心なき身」は何もわざとらしい謙譲の語ではない。坊主の身にもといふことである。とに角に、西行の枯れた境といふものはきはめて徐々に、年とともに訪れてきたのであつて、その歌に人間の心の溫かみを與へたものは、悟り切れなかつた心である。さうした人間が隱者にならねばならなかつた環境である。それ故に彼の一生を支へた文學精神であつたのである。

山家集は一千五百七十七首の歌を持つが、他人の歌が七十七首あるので、西行の歌は一千五百首である。他に樣々の文獻に見える短歌六百九首、連歌が九首、合計二千百十八首。しかし佐々木信綱博士の藏される山家集古鈔本の奥書に、山家集の歌は三千百十二首あると記されてゐるので、今見る山家集が完全のものでなく、抄本であることが分る。また次第に歌の見つかるときが來れば愉しいのである。

五

西行は文治三年七十歳のときに、自分の歌を三十六番の歌合に番へて、御裳濯河歌合と名づけ、俊成に送つて批評をたのんだので、俊成は間もなく判をしてかへした。やがてまた三十六番の自歌合宮河歌合を俊成の子定家に送つて判をもとめた。定家は西行七十二歳の文治五年八月になつて返した。それを見て西行は、近頃のり出してきた定家も將來有望の歌人らしいといつたさうである。定家はそのとき二十八歳、千載集奏覽の翌年であつた。彼に並ぶ家隆もねたし、年上の寂蓮もねた。異父兄で一代の畫伯隆信もねた。歌の上には新しい傾向が動きつつあつた。この傾向が行きつくところに新古今集の聲調が花を開いたのである。

そこには西行の思ひあまる詠歎は影をひそめ、なにか優雅なきぬずれの音を思ひ、洗煉をかさねた氣品の搖曳に身をつつむ宮廷の女性を思ふのである。

三島江の枯れ蘆の葉には薄霜のほの白い頃、晝となれば芽をふく程の春風のほの溫い肌ざはりである。やがて若蘆の芽のくきくきと出揃ふ頃は、夕月の影をくだいて滿ち潮のなごりが白

ら白らと頭越しに流れよるやうになる。大空は梅が香の艶なにほひに朦朧として、月も曇りに近い霞み方である。靜艶の夜氣の中に身を任せては、梅の香にそのかみの親しかつた人の移り香を想ふが、もとより寂としてずべては再びくることのない思ひ出の上に、月の光のみがありしにかはらぬ影を投げてゐる。やがて櫻も咲きそめる。尋ねきて遊び暮した櫻の木の間は、たそがれゆくままに、山の端には月が上る。うたたねの夢とうつつが搖れ交る寢覺め、風に吹かれて袖のあたりになびく花の香は、春夜の夢の尾を引いて、またしてもありし昔の人の姿を描かせる。早くも花は散り時である。山櫻の花は幾重もかさなりて、木のもとの苔の青さも見えぬほどである。水に散つては水を蔽つて、こぎゆく舟のあとをくつきりきは立てる。

かうした春の自然とそれに融けあふ人の心とのふしぎな織物に、古人も魅惑を感じたらしいが、今もつてかうした幻影はそのころの人たちを、靜觀的な自然觀照家であり、自然をながめつつ夢想に耽る人たちとして思ひ描かせる。ともあれ彼等は優美で纖細で、色彩的な繪畫的な感覺に秀でて、教養人である。閑雅の文人である。私どもは彼らが春風に袂をなぶらせて羅生門の丹楹白壁の樓から左右にながく流れる平安城の築地のくづれを背にして、または朱雀大路

の柳と櫻とのやはらかな下蔭にたたずむやうに考へる。また上京の寢殿の長押にゐ崩れて、柔媚な東山を背にし、清澄な鴨川の水をひき入れた庭園に、恍惚としてながめ入る姿を描くのである。一日のあらゆる心の靜謐を希つて、古今集・源氏物語へのおだやかな共感を、櫻花や月光の織りなす情緒的な自然へ、そのまま流れこませ、想ひうるかぎり甘美な氣分の羅を織りなすために、その生活をまもる人たちを描くのである。まことにこの人たちの見てゐる朧々たる月ほど、意欲が影をひそめた詠嘆的な自然はない。秋の夕暮の水色に煙る薄靄は、そのまま私たちをも彼らの仲間のひとりと化して、風もながれぬ自然のなかに凝立させるためであらう。もとよりそこに、いひ知れぬ新古今集の稱讃者も生れ、無限の不滿を吐きだす反對者も生れるのである。

しかしながら、そのやうな官能的な享受をしばらくやめて、新古今集のすぐれた歌人といはれる人たちの歌を、少し讀み直して見ることにしよう。たとへば定家や家隆の作品。俊成卿女の歌や式子内親王のお歌。そのほかにも數ある代表的な作者たちの錦繡のやうに經と緯との錯雜した作品。しかも綾羅のやうに搖曳する浮き紋や透き影の、取れば消えさうでしかも嚴とし

て消えない陰影。かうしたものの、時代をへだて世をことにするための腐朽や崩壊、いはゞ私どもの感じ方の變つたために把握の外に洩らしてしまふ部分の多いことを勘定に加へても、尙かつ消すよしもない文藝作品としての徴象を見まもるにつけ、また私どもが自身の生活と思想と心理と傳統とのもつれを、彼らが成就したやうに、今ここで表現して見ようと思ひ立つやいなや、彼らの表現は驚くべき困難を征服した結果であることが納得できるやうになり、自づと彼らの詠じた世界像の單純な享受によつて作りあげてゐた考へを、隨分改めなければならなくなるであらう。

二度とふたたび新古今集の歌が、單に夢を食ふ者の安易な耽溺だと思はれぬやうにしたい。そこには安易や恣意や職人的な巧緻や、そのやうなものからおよそ遠いものの支配してゐることに氣をつけよう。それは新古今集にも、職人的な巧みさだけの歌も、なかなか多く存してゐる。しかし何時の世においても、撰集の全部の歌が同一の高さを示すことはあり得ないであらう。私どもは唯その最高の水準と思はれるものだけに觸れればよいのである。そしてそれと一緒に、職人的な巧みさがこのやうに美しいところにありうる地盤の藝術的豐潤さを想像すれば

よいのである。

彫心鏤骨は新古今集の歌にふさはしい言葉である。そして缺陷も實はその點にある。しかしそのことは、實は和歌文學が「詩」をまもるために如何に超剋すべく困難な時代へ乘りかけてきてゐたかといふことを物語るものなのである。單に野放圖や遊戲的態度からしては、新古今集を性格づけるやうな聲調は彫み出されては來ないのである。そこには意志の緊張が要る。彫り出すものの像をたえず虛空に見つめ得る眼が要る。自分がはじめて浮べ得た夢想を具體的に描き出しうるために、人は永久に覺めてゐねばならぬ。これまで使つてゐた言葉が、子供のときからの仕つけによつて無批判に用ひてゐたところの、兄姉や教師や先輩やの言葉に過ぎなかつたことに氣附き、これまではそれ等の言葉にはめ込むために、自分の感じたもののあちらこちらに鋏を入れて切りこまざいてゐた不誠實に氣附いて、今度は自分の幻影をあくまで形象の上に捕へようと無限の奥所まで追及の歩を緩めないでゆくためには、無限に緊張した注意力と、冷徹闇をも透す明眸とが要るのである。定家が「詠歌大概」で、和歌に師匠なしといつたのを知つたとき、私どもは現代における創作行動への觀察と批判との結果に等しいものを、彼

もまた獲得してゐたことを感じなければならなかつたのである。彼が希つたのは、夢想し耽溺することの快樂を、恍惚として實踐する風流人の生活、當時の言葉でいふところの數寄者の生活ではない。正反對である。彼が希つたのは歌を創造する藝術的行動であつた。

かりに定家を今しばし例に引けば、彼は憑かれた者であつた。彼の眼には、和歌文學の傳統が生れてこの方、誰もまだ捕へたことのなかつた幻影が映つてゐた。それはつまり、彼の生理心理的な實感として感じられつつあつたところの、思想や傳統や世の有樣や我が身我が家の有樣やの錯綜した全體であつた。新しい表現の對象は、職人的な器用さや、使ひきたりの鑄型で間に合ふことはない。同じやうに春の夜や、櫻や、秋風やをとり上げても、古今集の人たちがとり上げたそれ等との間には越えがたい隔りがあつた。

そのやうなわけで、父俊成が幽玄を口にしはじめてから、新古今集の撰定のあと、定家がはじめて有心といふことを說きはじめるまで、父子二代の傾向が幽玄といふ符牒によつて知られはじめた頃、世人はその表現を正當に理解することは出來なかつたのである。前にも鴨長明の無名抄を引いて說明したから、すでに諸君も知つてをられるとほり、人たちは幽玄を難解とし

た。子の定家の歌は一層拍車をかけたものだつたので、人たちは禪問答の難解さにたとへて達磨宗の非難をあびせた。しばらく歌界を支配した、このやうな新傾向への理解の不足は、定家たちの企ての非常に新しかつたこと、つまり當時の事實に卽していへば、短歌形式がそれまで持ちえた最高の智的統一にまで押しつめられたことを意味してゐたのだ。しかし俊成・定家二代にわたつて押し進められたこの新傾向が、實は御子左一家の恣ままな思ひつきでなく、當時の隱者層を生み出してくる母胎となつた、中堅貴紳層の一般的な生活や精神やの中から、根をはやして萌え出たものであつた證據には、ひと度それが理解されはじめると、歌人全體の傾向がひととびにその邊り近くまで押し移つたことでも判るのである。

それにしてもこの人たちは、何故に自分たちのための新詩型を創造しようとしないで、三十一音の短歌形式をまもりながら彫心鏤骨を敢てしたのだらう。たとへば西行や俊成と心を通はしたあの大原の三寂のうちで、寂然は唯心房集に四十九首の創作今樣をのこしたし、鴨長明のこころみた方丈記の散文體は、明澄の理智を寫すに適した筈であつた。何故に純正詩歌の上では、新詩型の誕生が爲されないで、短歌の上に獨特の一纖巧體を創造したにすぎなかつたのか。これは新古今集の特殊な性質をはつきりとさせるのに大切な急所なのである。

そこで今一度諸君に思ひ出していただきたいのは、和歌は漢詩と相並んで、京都宮廷を中心にした貴紳の文學の主軸であつたといふことである。そしてまた、公家の人たちは、平安末から鎌倉のはじめにかけて深刻な不安を感じつつあつたといふことである。まづ平家のために平和の夢を破られ、つゞいて源氏のために動搖をつゞけ、さらに平家の一門であつた北條氏のために制壓されねばならなかつた。これ等の武家の興亡はそれだけでも歷史に波瀾に富んだ見せかけを與へてゐるが、もつと根本的な重大事は、武家といはれる身分のものが、政治權力を朝權の外にうち立てたといふことであつて、その武家が次々に入れかはるごとに、その力を大きくしていつたのである。そのために、朝廷を上にいただいて形づくられてゐた藤原氏や村上源氏の數多い門閥の集團、つまり京都の文化圈を保つてきた公家の社會が、その存立の基礎に不安を感じさせられるやうになつてきた。當時の上流の生活根據は全國にある莊園である。もちろん日本の人口は、奈良時代には一千萬に足りなかつたと學者は考へてゐるが、この時代には二千萬前後にはなつてきてゐたであらう。だから全國の荒野はこの人的資源の增加に比例して

次第に開墾され、田畑は常に增しつつはあつたのであるが、それにしても、國民經濟の根本になるその田畑（當時はまだ商工業といへるほどのものは興つてゐなかつた）の、半ばは平家の領有に歸してゐたし、平家の滅亡後は源氏がそれを承けついだ。その上、公家の莊園の方にまで地頭といふ收稅官を配置した。これは義經討伐のための臨時兵糧米徵收を名として急に設置したものらしいが、それはそのまま恒久の制度となつてしまつたもので、このやうなことは平家の專權時代にも見られなかつたことである。これは文治元年十一月のことで、千載集奏覽のしばらく前であるが、九條兼實はこれを知つて、日記玉葉に言語の及ぶ所にあらずと記し、また日本國の有無たゞ今明春にあるかといつてゐる。兼實はその翌年攝政になるのだが、その兼實にしてこの嘆きを持つたのである。京都貴紳が去就にまよつて綱の切れた舟のやうになつたとしても無理はない。この未曾有の情勢が、政策的にも政治學的にも何等見透しのつかぬものであつたことが、上層の人たちに嘆聲を發しさせ、中堅以下の人々にわけのわからぬ生活の混亂とをもたらした。このやうなところでは文學は決して新しい形式たとえ創造するものではないのである。俊成や西行の時代にはめきめきと隱者が生れていつた。この時代の若い世代の人

人は、僧形になるとならぬにかかはらず、つきつめた者の心情はすべて隱者的である。でないものは目先をはたらかす機會主義者（オッポチュニスト）になつた。機會主義者の少數は追從と贈賄との巧みな使ひ方で案外な現世の幸福を得たし、隱者的な人たちは、その文學精神を鋭くすることによつて、あてのない現實の生活から眞珠を分泌させたのである。つまりさうした精神にとつて、現世の生活は創造の素材ではなくて、これまであつた藝術は心をいたはりにかへる古巢として見直されたのである。

この時代に心をやるべき古巢の最もよきものは和歌であつた。人々はこの四百年來の古巢にたてこもつて、自らをそれに準據させながら、自分自身の「詩」をうたはうとしたのである。この古き革袋を今に生かして新しい酒を盛る營みのために、彫心鏤骨は生れ出たのである。

すでに諸君も諒解されたであらうやうに、さうした生活において、何か生氣にみちた新時代があるだらうか。眞に新しいものは自らの形を結晶させる。その意味において、新古今集もまた、原理的には新しいものを所有してゐないにちがひない。問題はたゞ古きを知つて古き形式に愛着を感じるところの、虛無の熱情といふべきものである。あれだけ美しい創作ができれば

虚無の情熱もまた文化の誇りである。それにまた、古今集に發した藝術傳統は、このやうに現實の生活を釣り換へにしなければ本當の花を開かないのだといふことが、日本文學史の上で證明されたも同樣である。一民族一國民に眞の文化の花をひらかすことが、ちよつとやそつとのことでできるものでないといふことを深く理解する機緣がこれによつて與へられるならば、過去の日本の文藝と文藝家とも、國華としての誇りをもつてたゞ今の國民から見直されるであらう。いはゞ彼等はその不敵な文學精神の故に、現實生活を不幸にして、日本の文化を飾つたのである。實に幸なことには、新古今時代の歌人たちの努力を、若き後鳥羽院は嘉し給うた。このやうなことは、近世この方殆どなくなつてしまつたのである。

さて少し實例を引いて印象を鮮明にしなければならぬ。

これまでよくいはれたことだが、新古今集の一つの特色は色彩的繪畫的といはれることである。この傾向が枕草紙の叙景にはつきり見えはじめることは前に觸れた。そして金葉・詞花の時代になると歌の方にかへつてそれが鮮やかに出はじめることもすでに述べた通りである。その種の歌はだから何も新古今にはじまる特色ではなくて、前の時代を承けたものであり、完成し

たものである。たとへば定家の家集の拾遺愚草を見ても、

けさ見れば野分ののちの雨晴れて玉ぞのこれるささがにの糸
くれなゐの露に朝日を映しもてあたりまで照るなでしこの花
霜さゆるあしたの原の冬がれにひと花さけるやまと撫子
暮れそめて草の葉なびく風のまに垣根すずしき夕顏の花

などいふ歌があつて、寫生的に自然を描くといふ點では隨分精緻をつくしてゐるが、これ等の歌は一つも新古今集にはとられてゐない。一體定家のかうした種類の歌は殆どとられてゐないのであつて、この時代の作家のものでとられたのは、

棟咲くそともの木蔭つゆおちて五月雨はるる風わたるなり（忠良）
よられつる野もせの草のかげろひてすずしく曇る夕立の空（西行）

のやうな歌である。比べて見ると、この方が殺いところがあつて、當時の言葉でいへば「たけ」

があるのである。定家の歌の方はたゞ寫實といふ方に傾いてしまつて、たけが高いといふ方ではない。そして、新古今集の歌の色彩的とか繪畫的とかの歌は、實はそのやうに、寫實的な叙景といふのではなくて、次のやうに、眞に繪のやうな歌なのである。

山ざくら花の下風ふきにけり木の下ごとの雪のむらぎえ
山深み杉のむら立見えぬまでをのへの風に花の散るかな
木の下の苔の綠も見えぬまで八重散りしける山ざくらかな
花さそふ比良の山風ふきにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで
逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉村
み吉野のたかねの櫻ちりにけりあらしも白き春の曙
雨そゝぐ花橘に風すぎて山ほとゝぎす雲に鳴くなり

これは繪畫的といつても、水墨畫や鉛筆畫のやうなものではない。かなり美しい色を厚くつかつた大和繪風の屏風の繪のやうなものである。そして事實次のやうな歌になると、あきらかに

風景のとらへ方が寫實的ではなくなつてゐて、當時の屏風の山水畫などの構圖にたよつたまとめ方なのである。

なごの海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖つ白浪
霞立つ末のまつやまほのぼのと波にはなるる横雲の空
白雲の絶間になびく青柳の葛城山に春風ぞ吹く

このやうなわけで、元來、新鮮な叙景の歌の生れてきたのが、三代集にかはる後拾遺集以後の新傾向なのだといふものの、新古今集に至ると、枕草紙の自然描寫のやうにたゞ鋭く新鮮なといふだけではなくなつて、さうした歌は當時の作家が作つてゐても、新古今集には事實上、殆ど採られなかつたのである。そして寫生歌風の自然描寫といふのでなく、繪畫的な效果を歌に出すといふやうになつて、寫實といふよりは、豪奢な大和繪趣味を見せるやうになつてゐるのである。

それから今一つ、このことはこれまであまりひろく學者に論じられてゐない點であるが、新

古今集の歌で最も新古今的に感じる歌、つまり前の繪畫的といつた風なものではないのは勿論、金葉・詞花風でも千載風でもないといつたやうな、眞に新古今集にはじめて見られる歌、そしてその後すぐ萎れていつてしまつたやうな歌は、實は次のやうな一群の歌であつたのだ。

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ
梅が香に昔をとへば春の月答へぬかげぞ袖にうつれる
梅の花誰が袖ふれしにほひぞと春や昔の月にとはばや
梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の月
風かよふ寢ざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢
雨そそぐ花たちばなに風すぎて山時鳥くもに鳴くなり
たれかまた花橘に思ひ出でむわれも昔の人となりなば
橘の匂ふあたりのうたたねは夢もむかしの袖の香ぞする

これがみな四季の部の歌だといふことは驚くべきことで、それだけに新古今風だといへるのである。これ等の歌の特色は、一言でいへば物語的だといふ點にあると思ふ。あの源氏物語はその後、數々の亞流的な作品を生み出してきたが、歌人の方にはあまり具體的な影響は與へてゐないのであつて、事實、歌の上にはそれがあらはれて來ないのである。ところが、新古今に至つてはじめて、右のやうな物語の一場面を歌で描いて見せたといふやうな作が出はじめたのである。このことは、私は俊成卿あたりから源氏物語を歌人に必讀の書と教へるやうになつてきたらしいことと密接な關係があると思つてゐる。現に、かうした傾向の歌の中で一番代表的な歌だといはれてゐるのは、定家の作の、

春の夜の夢の浮橋とだえして嶺にわかるる横雲の空

であるが、この歌の中で、「夢の浮橋とだえして」といふのは、ふと夢がと切れて眼がさめたといふことなのである。それを夢の浮橋がとだえたといつた發想の根據はどこにあつたかといふと、それは源氏物語への聯想であつたに違ひない。「夢の浮橋」といふ言葉は源氏五十四帖の終卷の名であるが、それ以前にはおそらく見られないものである。懷風藻に出てくる「夢のわだ」

をここまで結びつけてくることなどは少し行き過ぎの觀がある。少くも定家は春夜の夢がと切れたといふ外に、青春の戀物語も終をつげて、ふと眼ざめた主人公は、しののめの嶺に流れる横雲をながめつつ、思ひ出を繰りひろげるのだつたといふ様な、物語的雰圍氣をねらつてゐたことであらうと思はれる。物語的といふのがどうかとならば、繪卷物の一情景の文學化であるといつてもよい。このやうな一類の歌では、十分に繪畫的な效果の外に、さらに物語的なリリシズムがむすびついてゐるのである。いはゞ源氏物語の上に花を開いた人生觀照の抒情性が、俊成定家の心を經て、歌の上にのり移つたといつてもよいであらう。

勿論抒情といつても、右に擧げた歌のやうに豪奢な、繪卷的な抒情ばかりではない。たとへば式子內親王などは、女流作家の中ばかりでなく、す直な詠嘆調の上では當時第一等のお方であるが、そのお歌にはつぎのやうなのがある。

いま櫻咲きぬと見えてうすぐもり春にかすめる世のけしきかな
はかなくて過ぎにしかたをかぞふれば花にもの思ふ春ぞ經にける

花ならでまた慰むるかたもがなつれなく散るをつれなくてみむ
花は散りその色となく眺むれば
桐の葉もふみ分けがたくなりにけりかならず人を待つとならねど
秋はきぬゆくへも知らぬ嘆きかなたのめし事は木の葉ふりつつ
玉の緒よたえなば絶えねながらへば忍ぶることのよはりもぞする
忘れてはうちなげかるる夕かなわれのみ知りてすぐる月日は
君をまだ見ずしらざりしいにしへの戀しきをさへ歎きつるかな
つかのまのやみの現つもまだしらぬ夢より夢にまよひぬるかな

ここに取つたのは新古今集に取られなかつたものも含んではゐるが、大部分は新古今集のものである。しかしながらかうした西行の歌に近い、作者の心の溫かみを傳へるやうな詠嘆は、新古今集の中に交ると殆ど眼立たなくなつてしまふのである。

右のやうなわけで、千載・新古今の時代の作者たちは、枕草紙あたりにはじまる感覺の鮮明

な自然觀照や、源氏物語あたりにはじまる抒情味ゆたかな人生觀照やを、そのまま歌に移して、すつきりした叙景歌も作つてゐれば、す直な抒情歌も作つてゐる。それは當時の歌人たちの家集や、六百番歌合、千五百番歌合などをさぐつて見ると、一層多く作られてゐることに氣づくのである。ところが新古集においては、事實上さうした作は、それほど多くは取られてゐないのであつて、自然觀照をも人生觀照をも、共に錦繡のやうに濃艶に、屏風繪のごとく豪奢に、または繪巻物のやうにあはれふかくしたものが、特に丹念に選び集められて、全巻を飾つてゐるのである。そして、そのやうな傾向の歌が、一番新時代的なものであつたし、ことに御子左家一派の主唱したものであつたことは、その以前の時代にあまり見られなかつたことでもいへるのであるが、俊成・定家一門に特に傑作の多いことでも分るのである。さうした最新流行の、しかも歌界の全般から見れば流派的な傾向を以て勅撰集の選歌標準に立てるといふやうなことは、どうして生じて來たのであらうか。これにはどうしても、臣家たちだけが撰集の全責任を負ふときには、恐らくは敢てし得ないやうな思ひ切つた英斷が感じられるのであつて、「增鏡」の「おどろの下」に記されてゐるやうに、

各々奉れる歌を院の御前にて自らみがきととのへさせ給ふ樣、いと珍らしくおもしろし。

この時も先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。

といふのは、新古今撰定の歷史事實として、うんと強く認めなくてはならない。このやうにして、新古今集風體の決定は後鳥羽院の叡旨に出たものであつたことが判るのである。

新古今集の成立には、後鳥羽院のお心が絶對のものとして働いてゐる。したがつて、後白河院政の末年から、後鳥羽院御在位の間は、京都には歌壇といふものはまだ結成されてをらなかつた。たゞ六條家だの御子左だのの流派に集る歌人の群れは存したが、さうした歌の世界は、まだ一つの歌壇に結成されてゐなかつた。京都宮廷を中心にして、新古今時代のはなやかな歌壇が生れたのは、全く後鳥羽天皇御讓位後、和歌所が設置されるにいたつてからのことであつた。だから上皇の御意志が働かなければ、到底新古今集は今のやうな形にはなり得なかつたのである。

さて右の事實を一層はつきり印象にとどめるために、定家たちを中心として、ごく客觀的に新古今集撰定前の歌界のスケツチを作つて置かう。

定家は應保二年に生れた。そのとき父俊成は四十九歳、定家には七歳上の兄成家がある。母は美福門院の女房加賀といつて、はじめ皇后宮少進藤原爲隆の妻であつた。爲隆は定家出生の足かけ二十年前、康治二年に出家して寂超といひ、その次の兄賴業は近衞天皇の藏人であつたが、久壽二年、帝崩御のとき出家して寂然といひ、長兄は爲業といつて、尊卑分脈に榮華物語の作者とされてゐる人、最もおくれて永萬元年頃、定家四歳位のときに出家したらしい。寂念といふ。これが前にも名を出した有名な大原の三寂で、西行とも親しく、俊成とも交りが深かつた。これについては富倉二郎氏の「大原の三寂」（多磨・昭和十三年四月以下四回）があつて、精しい。その寂超と加賀との間には定家より二十歳ばかり年上の隆信といふ兄があつた。母が俊成に再嫁して定家を生んでからは、定家が寵愛を獨占して、隆信は淋しさをまぎらすことができなかつたらしい。

定家の生れる前、俊成は弟俊海の子定長を養子してゐたが、定家が生れてから出家して寂蓮

といつた。隆信と寂蓮とはともに若くから歌がすぐれてゐて親しかつたが、隆信は歌よりも繪には一層すぐれてゐた。國寶になつてゐる神護寺藏の重盛と賴朝との畫像は隆信の筆といはれて、すでに知つてをられる諸君も多いであらうが、日本の肖像畫中での傑作である。藤原隆信朝臣集がある。定家ともよく行き來した。しかしその子の信實は、鎌倉第一の畫家といはれ、後鳥羽院が隱岐へ遷幸の際、特にお姿を描かしめられたのはこの信實であつた。歌の方でも出色の歌人だつた。定家の近親はみな歌よみであつた。父俊成のところへは、俊惠や西行や源三位賴政が出入した。その中で定家は早くから文學の才をあらはした。今殘つてゐる最も早い歌は治承二年十七歳のとき、下賀茂神社の歌合でよんだ三首である。定家十四のとき俊成は皇太后宮大夫を辭して、定家に侍從を申し乞ひ、翌年六十三で出家した。

二十歳ではじめて百首歌を詠じたが、二十一で更に堀河百首の題で百首を詠んだ。このとき右大臣兼實、俊惠、寂蓮、隆信の絶讃を博した。千載集には八首採られた。歌はめきめきと上達しはじめ、晩年の西行もその前途を期待したし、家隆のやうなよい友達もできた。三十歳までにほゞ俊成のあとを受けた定家の歌風は出來上つた。そして三十から四十位までにその傑作

は殆ど生れ出た。

なにとなく心ぞとまる山の端に今年見そむる三日月の影
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮
眺むれば松より西になりにけり影はるかなる明方の月
風立ちて澤べにかけるはやぶさの早くも秋の景色なるかな
夕立の雲間の日かげ晴れそめて山のこなたをわたる白鷺
人とはぬ冬の山路のさびしさよ垣根のそばにしとど下りゐて
末とほき若葉の芝生うちなびき雲雀なく野の春の夕ぐれ
冴えとほる風の上なる夕月夜あたる光に霜ぞ散りくる
なびかじな海士のもしほ火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも
歸るさのものとや人のながむらむまつ夜ながらの有明の月

いまかりに十首ばかりその歌を掲げて置くことにした。

話はもとへもどるが、治承元年に六條清輔が卒したのは、俊成出家の翌年六十四のときだが、その後右大臣九條兼實は俊成の歌を愛して彼を寵遇した。兼實も歌人だが、その子の良經は後京極攝政で、秋篠月清集の主、一代の歌人であつた。定家は九條家の家司となり、若き主良經と意氣が投合した。定家の二十四五から三十八九までの歌といふものは、大部分慈圓との競作や、兼實の女宜秋門院が後鳥羽天皇の女御として入内のときの屏風の歌や、良經邸での歌會の歌やばかりで占められてゐるといつてもよい位である。

また內大臣實宗の女を妻とした。これは後の西園寺太政大臣公經の同胞であつた。そこで定家は歌ばかりでなく、九條家や西園寺家にたよつて立身出世する野心を持つた。俊成はその方はすでに無能力者なので、彼は借りられるだけ古い日記類を借り寫して、獨力で有職の學問をした。小右記を讀みつづけて、小野右大臣實資を夢に見たとか、台記を寫したとかいふ位である。その方も相當本格的な勉強だつたといへるし、職務にも精勵だつた。けれども出世は遲々としてゐた。官は十四でなつた侍從が、二十八で左近權少將になつたきり、四十になつて

もそのまゝであつた。位は三十四で從四位上になつたままである。この昇進の思はしからぬには原因があつた。九條兼實は文治二年から建久七年まで攝政關白であり、良經もその間に內大臣になり、慈圓も天臺座主に上つたが、兼實は剛毅で、後白河院の丹後局といふ女傑の反感を招いたため、ことごとに意見が封じられ、關白を止めたときは慈圓も天台座主を退くといふ形になつた。九條家の敵は久我源氏の土御門通親で、兼實の女宜秋門院には皇子の御誕生がないのに、通親の養女承明門院には土御門天皇がお生れになり、通親の土御門邸が里內裏になるといふ形である。建久九年に土御門天皇が受禪されると、通親は外舅として勢力を得、內大臣に昇り、後鳥羽上皇の院別當となつて仙洞御所の實權を握り、卿二品といふ女傑と結んで政を左右する。それに對して九條家は手も足も出なかつた。九條家が勢力を得たのは建仁二年十月二十一日に內大臣通親が突然薨去してからのことで、これは新古今集竟宴の行はれた元久二年から足かけ四年前のことで、定家はすでに四十一であつた。定家がその青年期壯年期に殆ど出世といふことをしないで初老を迎へたのだから、その間に焦燥し憂悶したのは尤もで、大日本史歌人列傳に、性狂燥で進取に急だと書いてあるのは事實であるにしても同情のない言であつた。

通親の久我家の家司になつてゐるのが六條家の季經で、清輔卒後九條家との關係はなくなつてゐるので、久我家にたよつてゐた。季經や有家や顯昭やと俊成・定家・寂蓮などはあくまで對抗したが、通親の子久我通具や通光も歌人だし、歌の巧拙といふことは第二として、社會的にはなかなか大敵だつたのである。

定家にとつての幸は、建久九年後鳥羽天皇御讓位の後にはじめて廻つてきたことである。しかし、これは一人定家にとどまらず、多くの歌人にとつてさうであつた。御讓位になると、院は正治二年に早くもときの歌人たちから百首をお召しになつた。そのとき定家等が選に入らなかつたのは、季經等が內大臣通親を動かしたためだといつて騷ぎ出し、左大臣良經に訴へたりして揉めたが、漸く內大臣の沙汰によつて情勢一轉し、定家・家隆・隆房等が追加された。このときの作者は院をも合せて二十三人、定家は間もなく昇殿を許され、正四位下に叙された。百首を叡感あつたためであつた。翌建仁元年四十歳のとき、千五百番歌合のための百首を獻じて、殊に宜しき由の御氣色を賜はつた。間もなく和歌所が設置されて寄人に加へられた。翌四十一歳で十四年ぶりに左近中將に昇進した。後鳥羽院の下にあつては、六條季經の工作も成功

することはできなかつた。院の鑑賞力が、最高の決定者として發動したからである。

この定家の略歴に見てもわかるやうに、後鳥羽院が御譲位になると、急に和歌についての中心が生れるのであつて、新古今時代の歌人を糾合されたのは、全く院のお力であることが判るのである。それまでのところでは、御子左の人たちは九條家、六條の人たちは土御門家といふやうに愛護者をたよつて、その家の範圍内で歌合を催してはゐても、京都を打つて一丸とするやうな歌壇といふやうなものはなかつたのである。それに、その出世がおそいといふことも敢て定家一人のことでなく、中堅層の人たち全體の運命だつたので、この時代の一流の玄人作家はみな、同じやうな社會的不遇の中で、歌だけに心を傾けてゐたのであつた。後鳥羽の仙洞に歌壇ができてくるまでに、よい作者たちが歌の技の方で行くところまで修煉を積みきつてゐたことは、新古今の時代にとつて幸なことだつたわけである。

六

次にまたこれも、新古今集撰定が如何に後鳥羽院を中心にして行はれたかを明らかにするために、その經過を客觀的に概略だけ記して置かう。

建仁元年（一二〇一）十一月三日に左中辨長房朝臣の奉書を以て、上古以後の和歌を撰進するやうに、和歌所の寄人達に仰せが下された。これが新古今集編纂の事業の、形にあらはれた最初であつた。仰せを蒙つたのは和歌所の寄人（よりうど）たちであり、事務には和歌所の開闔家長が何かと與つてゐるから、和歌所の設立は撰集事業の前ぶれであつたといへなくもない。勿論新古今編纂のことだけが目あてで和歌所が設立されたか否かの確とした證據はないけれども、事のなりゆきから見ると、密接な關係がうかがはれる。

でちよつと、和歌所の設立をうかがつて見ると、土御門天皇の建仁元年七月二十七日に、後鳥羽上皇は三條殿（北殿）の弘御所を和歌所と定められ、前日來仰せを蒙つてゐた者たちが、その夜、役員の資格で初參集をした。寄人になつたのはすべてで十一人、その名は藤原良經・源

通親・源通具・大僧正慈圓・藤原俊成・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・源具親・寂蓮法師である。次いで藤原清範・藤原隆信・鴨長明・藤原秀能を加へ、源家長が開闔となつた。和歌所は後、建仁三年二月に京極殿（東弘御所）に移された。

當時は源通親が後鳥羽院の院別當であり、その女在子は早く後鳥羽の女御となり、所生の皇子はその頃の今上、卽ち土御門天皇であらせられたから、その勢力は攝政關白に對抗するものだつたことは前に說明した通りで、隨つて、通親・通具父子が加つてゐるのは異とするに足りぬ。ところでその下には六條家がついてゐて、清輔の亡き後も、その方には猶、顯昭法橋、宮內卿季經、さらに重家の子經家・有家など、歌人の多かつたこともすでに諸君の知られる通りであるが、そして中でも季經・經家たちは通親の家司でもあつたのであるが、それ等の人々の間では有家一人が加へられただけであつた。

政治上では通親に押されてゐても、後京極攝政良經は、當代屈指の歌人だし、叔父慈圓もさうである。その下には俊成・定家がついてゐる。家隆は俊成門で定家の友人、隆信は定家の異父兄で寂蓮の友人、その寂蓮は出家前俊成の養子になつてゐたことがあるのも、諸君のすでに

記憶される通りである。それから、前には出なかつたが雅經も定家の門人であつた。清範・家長は院の近臣で、秀能は歌熱心で御寵愛になつた北面の武士だから、これ等は院の御手もとの者たちといへるが、この樣に數は多くない。大部分の人たちはみな良經側で、良經・慈圓を上に立てて俊成・定家を中心にして、歌風も生活も大體共通の者たちであつた。それに後鳥羽院は歌の方では良經と大へんよく御心持があつてをられたことが「增鏡」に見えてゐるし、良經の歌才を高く見てをられたことも、「後鳥羽院御口傳」に明らかに記されてゐる。そんなわけで、この一派の人は轡をならべて和歌所に列した。後鳥羽院の御好みが和歌所の歌風をこのやうにして俊成・定家の御子左流に色づけたのである。

新古今撰者はさうした中から更にえらばれて、通具・有家・定家・定隆・雅經・寂蓮の六人が仰せを蒙り、事務は萬事良經が執掌したと「增鏡」にも記されてゐる。通具は良經に對して土御門家を代表した形であるが、定家の同胞で新古今集に皇太后宮大夫俊成女（のむすめ）と出てゐる人を妻としてゐた。この妻は當時女流作家中では最も新古今風の歌に長じた作家で、通具もその弟通光などとともに、歌風は全く御子左風といつてよい。たゞ撰者になるだけの技倆があるかど

うかは問題であつた。有家だけが六條家の人だが、これも歌の上では定家についてきてゐる人で、その子知家は定家の門人になつた。そんなわけで、この撰者の人選は全く後鳥羽院の御趣味が寄人の人選のとき以上に、さらにはつきりと伺はれるものであつた。

翌建仁二年（一二〇二）七月二十日に寂蓮が寂したので、六人の撰者が五人になつた。これ等の人たちは編纂の仰せを蒙つたのでなく、上古以來の歌を選んで獻ずべき仰せを蒙つたのである。

建仁三年（一二〇三）初夏になつて、前後して選歌を奏覽に供したらしい。はつきり判るのは通具の四月十九日と定家の四月二十日とである。

選歌はほごして一部の文書に淸書し直され、歌の頭には一々選んだ人の名が明記された。序文でも明らかなやうに、古今から千載までの勅撰集の歌はとらないで、萬葉集・古今六帖をはじめ、私家集・歌合など、何れも分つたものばかりだから、各撰者の用ひた資料もまた殆ど共通である。で、自づと各撰者の選歌に一致するものが多かつた。中には五人共選といふものもあらはれた。かうして材料が整理されると、

後鳥羽院はそこで更に自ら御覽になつて、一々よいものに點をおつけになつた。

院御自身による取捨に一年が費された。取捨が終ると部類がはじまる。四季・戀・雜など二十卷にわたる部立と、各部の中での歌の配列を決める仕事である。この仕事は元久元年（一二〇四）七月二十二日から開始された。そして元久二年（一二〇五）三月二十七日、とに角、春日殿で竟宴の儀が取り行はれた。そのときは眞名序つまり漢文序だけついてゐて、二十九日に良經の假名序の草案ができ上つた。しかし日附は二十六日となつてゐて、竟宴の前日できたことにしてある。

さて新古今集の歌は大體建仁三年四月に五人の撰者の手で奏進した選歌が基礎になつてはゐるが、その後編纂事業のおこなはれてゐた二三年の間にも歌合などは頻りに行はれるし、その中には見逃しえないよい歌もある。また古人の歌でも、後からさがせばまたよい歌もでてくるので、それ等は新しく追加された。それからまた反對に、一度載せられながら除き去られる歌も出來てきた。かうした歌の入れ換へは、竟宴の後も引きつゞき行はれ、最後的に出來上つたのは建保四年（一二一六）十二月のことだつた。このときに成立した御本は最後的な決定本とし

て、和歌所開闔源家長が清書して奥書を記して世につたへたものであつて、十二月二十六日の奥書の意を取ると、この決定本以前の新古今集は、何れもひがごとの存する本であり、この本は萬事決着の後清書した本であるから、上皇御手もとの御本と些かのちがひもないものであつて、これに違ふ點のある本は皆悪い本と思へといつてゐる。竟宴が催されてから實に十二年目のことであつた。

そのやうなわけで、この間、新古今集が全く流布しないでゐるといふこともない。反對に非常によくひろまつた。たとへば三代將軍實朝などは、首を長くして待つてゐて、九月二日には新古今の寫本一部を携へた使者が京都から歸着してゐるのである。京都の歌人間または高貴の所々に傳寫の本がひろまらぬわけはない。かうした次第で、改正の續行中に、しばしば傳寫本が世間に出てしまつたので、新古今集には大へん異同のある古寫本が多いのである。諸本の奥書を見ると分るが、家長の本が出來るまでに、これで決着といふ風に思はれたらしいときが數回あつたやうだ。そこであたらしく寫して世に出ると、また何時か院のお考へで變更されたのであるらしい。

さて一般に流布した本とは違つて、一々の歌の頭にその歌を選み出した撰者の名を註した本がある。それは前にいつたやうに、五人の撰者の奏進した歌稿を編纂の臺本にまとめた際に一撰者の名を註したのが、そのまま殘つたものであらう。その臺本に院が點をおつけになり、取るに決つた歌だけを清書したときも、それを巻々に部類したときも、和歌所の臺本にはつねに撰者の名が註されてゐた。竟宴がすんでからも歌の出し入れはつづいたが、それは院の御意志によるものだから、新しく追加された歌は五人の撰者には關係はないわけである。現に撰者名を記してある本でも、建仁三年以後に新しく作られた歌には、少しの例外は別として撰者名は書かれてゐないのである。

ところで、院の御手もとに止め置かれた御本にはその註があつたかなかつたか今からは全く分らない。お手もとの新古今集の決定本にはそんな事務上の標記のやうなものはないのが當然で、撰者名のある本も併せ御所持になつたかも知れぬが、それは本來は和歌所の事務關係の臺本たるべき性質のものだつたらう。とに角お手もとの御本は、院のお供をして、承久亂後隱岐に移された。院はそれをもとにして、多くの歌を除かれ、遥か歌數の少ない御本を作られ、そ

れに跋文を添へられた。この本を隱岐本といつてゐる。

このやうに、新古今集は、後鳥羽院の御心によつて作られてゐることが明らかであつて、一首づつの歌の選まですべて院の御心によつたものである。院が良經と俊成・定家との一群の新傾向を嘉されたところに、新古今の大體の特色の生れるもとがあつたが、一首一首を錦繡のやうに豪奢で絢爛な歌ばかりで揃へられたのは、院の御趣味であつた。前にもいつたやうに、歌壇全體としても、また御子左系の人たちだけに限つてでも、當時の歌人はもつと種々な體をもつと數多く作つてゐたことは、前にも述べた通りである。竟宴の後、歌の入れ換へがしきりにつづいたので、定家は非常に心を痛め、一身の面目はつぶれたと思つた。後鳥羽院の御考へが定家たちとちがつてゐられた證據がそこにもよく見えてゐると思ふ。

七

ここでどうしても、新古今時代の歌の最高の愛護者であり、事實上歌壇の北極星であらせられた院について述べなくてはならない。

增鏡によつて記すと、後鳥羽天皇は高倉天皇の第四皇子、安德帝の西海へ遷幸されて後、壽永二年八月に、御年わづか二歳で帝位に卽かれた。建久三年後白河法皇崩御の後は、院政を止めて親政にかへり、九條兼實・近衞基通が攝政關白の職にあつた。建久九年御年十九で位を土御門天皇にお讓りになつて、上皇と申しあげるやうになつた。その後、承久三年まで土御門・順德・仲恭三天皇の御代にわたり、足かけ二十四年間、院政をお執りになつた。後鳥羽院の御考によつて歌の榮えたのは、この院政の時代のことであつた。

それまで天皇親政の內裏では、やはり面だたしいことが大切で、歌會なども思ふままにといふわけには行かず、當時の新派の歌人は多く地下の人で、內裏の昇殿は許されてもゐず、九條家や土御門家などに集つてゐるだけで、打つて一丸とした歌壇といふものはなかつた。院が早

速正治二年に正治百首の歌を二十二人から召され、第二度百首の歌を十人から召された。初度の方では通親・季經・經家などの久我家六條家組の人と、良經・慈圓・俊成・隆信・定家・家隆等の九條家御子左家組が加へられ、二度の方では、範光・家長のやうな近臣、雅經・信實などの定家系の人や、鴨長明などが召され、それから和歌所が設けられ、千五百番歌合が行はれ、新古今集の撰が行はれ、その間にも頻々と仙洞や水無瀬の離宮などで歌合が行はれるやうになつて、歌人たちがはじめて世に在るの思ひをしたことは、既に知つてをられる通りである。

ところがこれは歌人にとつてのよろこびであるが、この御代に榮えたのは敢て歌人だけでない。まづ宮中の儀式典禮に心をかけられ、運動遊戲を好まれ、詩會を催され、連歌の會を行はれ、ことに各種の遊戲は御勘能であられた。そのことは後鳥羽院宸記を拜見すればよく分るのである。その道々の人が同じやうに世にある思ひをしたのである。野に遺賢なしといふ形であつた。順德天皇は特に同じ御性質であつたので、院と非常によく似通つてをられる。有職について、院は世俗淺深祕抄、順德院は禁祕抄をつくられ、歌については院は後鳥羽院御口傳、順德院は八雲御抄を作られたのであつた。このやうな次第で、院はすべての上に對してひとしく

帝王として君臨されてゐる。敢て歌だけに對してのことではなかつたが、また歌も院のお目を洩れるものではない。そしてまた、多くの歌の中でも院の御性質にかなつて、豪奢ではなやかな歌がよろこばれたのである。

お若い正治百首頃の御作を拜見し、さらに後鳥羽院御集のお歌をひろく拜見して感じることは、院が、新古今集に結集されたやうな錦繡の表現を、非常に好いてをられたといふことである。ところが、それが非常におほどかで、臣家たちの、剋明なうたひぶりのやうなのとは違ふが、そこに悠々としたひろさ大きさが感じられるのである。この點は、當時の天台座主であつた大僧正慈圓の歌にも見られるところではあるが、その氣品の森嚴さはやはり桁がちがふのである。帝王體はやはり臣家體とはちがふのであつた。それだけにまた、廷臣達の作の中に、職人的巧緻を感じさせる歌のあるときには、その綺麗ごとの點で愛されたのである。新古今集は院の遊蕩の御心から生れたといへるのである。

しかし何といつても後鳥羽院御自身はるかその外に拔け出てをられたのである。そのことを最もよく私どもに印象づけるものは、さうした當時の困難な、行き詰つたやうな時代におけ

る帝王としての御態度がお歌にきつくあらはれてゐるといふことである。すでに充分觸れて來たやうに、公武對立の未曾有の世となつて、廷臣たちの心には、上下おしなべて見透しのつかない混沌と停滯とその日ぐらし的不安やなげやりの傾向が萠え出てをつた。生活への熱情に焦點を與へることができなくて、文藝の道に思ひをやるといふ形で、千載・新古今の幽玄な抒情調や錦繡振りが生れてきた。さうした歌を、後鳥羽院は、それとして愛されたし、そのやうな當世粧(いまやうぶり)によつて自らもお作りにもなつたが、廷臣たちの生活に、そのやうに無常と混迷とを感ぜしめる時勢相も、帝王としての院は全く別の形で受け取られたに違ひない。神代この方の皇統を後に荷擔はれた帝王の自覺には、鎌倉幕府の權力の生長が、まざまざと影を映しつつあつたであらう。藤氏擅權の極において、後三條院のお心に院政の基をなす自覺がめばえた。今や藤原氏は藤原時代の藤原氏ではない。朝權に手依つて生きるのである。朝權に對抗する力は今では鎌倉に代表されてゐるのである。さういふお心からの政事方面の院のお振舞は、私の與り知りえぬところである。しかし何よりもお歌にそのおもかげが反映して、當時の世の中にあつては、王者でなければ口にもし得ない感懷がうたはれてある。その特色は、承久亂後、隱岐島

に遷幸になつてからのお歌にもけざやかにあらはれてゐる。その意味で、後鳥羽院のお歌は、批評の外に立つてをられる。これに對立させうる形の志向を、つまり國民とし臣家としての、朝權に對する志向をたからかにうたひえたものは、鎌倉の將軍實朝のみであつた。後鳥羽院と實朝、この組みあはせの上にのみ、萬葉以前の帝王と氏上(うぢのかみ)たちとの應和にも似通つた、志氣たかき歌の生れうる地盤がのこされてゐたのである。

おく山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

人もをし人もうらめし味けなく世を思ふ故にもの思ふ身は

吾れこそは新島守よおきの海の荒きなみ風心してふけ

限りあればさてもたへける身のうさよ民のわら屋にのきを並べて

これは毅い意志のうた聲とひゞくであらう。縛られたるプロメシウス。その氣魄のけ高さが、當時の詞でいふたけ高しを文字通りあらはしてゐるものであり、定家が最高の姿として「毎月抄」の中に述べた秀逸の體を、巧まずして得られたものである。

八百よろづ神もあはれめたらちねのわれ待ちえむと絕えぬ玉の緒

神聖にして犯す可らざる帝王が、その意志の自由にそむいて、母后の上に思を馳せられながら、北海の孤島に十九年の月日を送られねばならなかつたことは未曾有のことであつた。かうして延應二年二月二十二日、隱岐島に崩御あらせられた。御壽六十。一般の歌人とひとつなみに記すのは畏れ多いことであるが、歷史的記述の途中だから、しばらく調子をかへずに進めよう。私の意圖はすでに讀者もお解りと思ふが、院が王者としての切實な現實に觸れて發せられた抒情は、不可說のもので、當時に類を絕したたけ高いものであつたといふことである。それに應へうるものは、臣家の中では實朝の體、隱士の中では西行の體であつた。

しかし延臣一般の詠んだ種々の體は、院の御心からすれば、手にとつて愛玩なさる樣々な光澤の玉のごときものであつた。定家はその歌體を十體に分けて、長高・見樣・面白・有一節・濃樣・鬼拉・幽玄・事可然樣・麗樣・有心としたが、その中で、幽玄・麗樣・濃樣・長高などにあたる歌をお好みになつたらしいので、その結果新古今集は華麗優艷で、幽玄哀艷な調子に

まとめられたといへるであらう。いはゞ院にとつて、多くの場合歌は豪奢な風流であらせられた。宮廷の生活を飾られる珠玉であつた。だから院は定家の歌については、「定家は左右なきものなり」とおほめになる。そして、つづけて「優しくえみぇみとある樣に見ゆる姿、まことに有りがたく見ゆ。道に達したるさまなど殊勝なりき。歌み知たる景氣ゆゆしげなりき」と御口傳に記しとゞめられた。けれどもそれは歌へのお褒めである。人間定家に對しては、その藝熱心で、歌に憑かれた、名人氣質（かたぎ）を五月蠅く感じてをられたことは、「傍若無人、ことはりも過ぎたりき。他人の詞を聞くに及ばず。……又ものにすきたる事なきによりて、我が歌なれども自讃歌にあらざるをよしなど言へば、腹立の氣色あり」といふ御口傳の御言葉によりてよく判る。數寄、つまり趣味風流の人でない點が、雅會の空氣のなごやかさを破るのがお氣に召さなかつたらしくあるのである。いはゞ名人氣質の頑固さが地下人的であつて、宮廷的でないのである。恐らくこれが、承久二年に御勘氣を蒙つて、順德院も、勘當までは如何であらうと、その御記にお記しになつたやうな事件の遠因となつてゐるに違ひない。ところが定家たちにとつては、歌は彫心鏤骨の賜物であつた。頑な匠人氣質の一徹によつて、その生活を釣り換へに

して得たところの抒情であつた。新古今の華麗妖艶は、定家にとつてはまことに數寄ではなくして、その二十代三十代の生活を賭けたものであつた。多くの廷臣たちは亞流なる故に、俊成定家の創めた體を眞似て、宮廷の雅宴に列しうるを無上のよろこびとなし得たが、身を以て一體を創めた定家は、その仕事を成しとげ得た主我主義のために、人間として院の御勘氣に觸れた。文藝は主我の力のもとにのみ「詩」をつなぎ得るとすれば、定家の運命は悲劇であらねばならぬ。そして、その故にこそ新古今集時代の歌は、多くの工藝品を含んではゐるといふものの、その根柢に於て、藝術であり得てをるのである。院はその風流のもてあそびとして、多くの世にすぐれた御作をのこされた。それは後鳥羽院御集を拜見すれば判ることである。しかし、この新體を創始した廷臣たちにとつては、身を以て抒情した「詩」である所の新古今調に寄せてお詠みになつた多くのお作は、帝王の風雅であり、遊蕩であらせられる。しかしまたかくの如く困難な時代には、帝王には帝王の抒情があらせられる。院が肩をならべる者のない王者の魂を以て、獨りなされた抒情は、既に新古今調といふべきものでない。それは萬機を抜けて孤高の調であつたといふことを申したかつたのである。その一例が前にかかげた御製である。

八

ここにつゞいて、源實朝に觸れておかう。實朝は西行が世を去つた翌々年、後鳥羽天皇の建久三年（一一九二）八月九日、鎌倉名越の濱御所に生れた。新古今集撰定の勅の下る足かけ十年前、後鳥羽院は十二歳の年上であらせられる。父は源頼朝、母は北條政子、幼名千幡。正治元年千幡八歳のとき、父が相模川の大橋の落成式に行つて、馬から落ちたのがもとで急に薨去した。兄頼家が二代將軍となつたが、建仁三年辭し、千幡は十二歳で將軍となり實朝と改めた。兄頼家が辭めて、翌年修善寺で殺されるまで、なかなかの悶着があつた。元來政子の父時政は平氏であつて、頼朝のゐる間はその器量に恐れ、これを立ててゐたが、頼朝が世を去るとやがて勢力の擴張にとりかかつた。最初に肉親の孫頼家を將軍職から追つて、殺させたのも時政の手であつた。

元久二年、都では新古今集の竟宴が終つたのち、閏七月、時政はまた妻の牧の方といふ女傑と共謀して、女婿平賀朝政を將軍に立てようとし、十四歳の實朝を仆さうとした。このことが

未然に顯はれたので、政子の母性愛が實朝をかばつた。政子は北條義時と兄弟力をあはせて一網打盡に關係者を檢擧し、父時政を幽閉し、京にゐた朝政は敗死した。その後直接この少年實朝にふりかかる危害はなかつたが、執權北條氏の實力扶殖は着々進行してゐた。源氏重代の家來たち、和田・三浦・畠山・比企・朝比奈・宇都宮などの諸豪族は北條氏に對する反感を深くしてゐるのに乘じ、種々策謀して、次々に叛謀を飜させては次第にこれを滅して行つた。さうした政治的な殺戮の中にとりかこまれて生長したのだから並々の生涯ではない。

建保四年六月、實朝二十五歳である。東大寺の大佛修理をした宋人陳和卿が來た。實朝に謁して前生は宋の育王山の長老だといつて涕泣した。それに心を動かされ、大船をつくらせて、入宋しようとしたが、船が進水しなかつたので、その望みは空しくなつた。

建保六年、二十七歳の年、正月には閑院内裏造營の恩賞として權大納言、三月左近衞大將、十月内大臣、十二月右大臣に昇り、この年母政子も從二位した。

翌承久元年正月二十七日、前夜から雪であつたが、鶴ケ岡八幡宮に右大臣の拜賀の式を行ふ夜更け、歸るさを別當公曉のために弑せられた。公曉は賴家の遺子であるが、實朝は父の敵で

あるとそのかされて決行したものの、それはまた將軍弑逆の謀叛人といふ名儀でほろぼされた。清和源氏の正統はここに絶えた。

十三歳の十二月、後の内大臣坊門信清の女が北の方となつて下つたときから、京都趣味は實朝の身邊にあつたが、もともとは實朝の胸の中にあつた風雅心である。十四の年から和歌を作りはじめる。そして、十八の年、承元三年、三十首の歌を京へ送つて添削を求めた。これが定家と實朝との關係のはじめである。

二十二歳、建暦三年十一月、定家は家重代の寶であつた萬葉集を獻じたので、實朝は非常に喜んで、握玩措かなかつたことが吾妻鏡に見えてゐる。そして十二月に金槐集が出來た。

金槐集は實朝の歌集である。槐は支那の古代に三公のしるしとして殿前に植えた木で、大臣を意味する。金は鎌倉の鎌の篇を取つたのであらう。だから鎌倉右大臣家集の意である。これまでながく、金槐集は實朝一生の作と思はれてゐたが、金澤の松岡氏藏の定家所傳の金槐集を昭和四年に佐々木信綱博士が發見されたのによつて、その考は全く覆されてしまつた。群書類從に入れられた金槐集には、終に一本及び印本所載とある五十二首の歌が附けてあるが、定家

所傳の本にはそれがない。大體の違ひはそれだけで、あとは同じく、全歌數六百六十三首であるが、最も大切なことは、その本の終に定家の自筆で「建暦三、十二月十八日」と書かれてゐることである。この年は十二月六日改元、建保元年となつたのだが、恐らく鎌倉でできた原本には、改元のことが徹底しないで、舊年號のまま日附が記されてゐたので、定家もそのまま寫したのであらう。定家は作品の寫しを作るときには、如何なる誤も私意ではなほさぬといふやうな、さうした學者的な神經を何時でも見せる人である。だからこの場合もまちがひはないと思ふ。

金槐集の歌はだから、二十二歳までのものである。二十三から死ぬまでも、歌は作つてゐるに違ひないのだけれども、惜しいことにはこの分は殆どすべて亡びてゐるのである。

實朝が不可說の名人だといふ說は、すでに鎌倉時代からある。しかし一般にいひ出されたのは賀茂眞淵がほめてからであり、更には正岡子規がほめてからである。齋藤茂吉博士の「金槐集私鈔」をはじめとして、その後の多數の論究はことに實朝を顯した點で忘れることの出來な

いものであり、最近では、川田順氏の「源實朝」と「全註金槐和歌集」とも極めて有益の著である。

古來實朝は萬葉調歌人といふことになつてをり、新古今集の出來た頃に萬葉を感得した點が特にえらいとされてゐる。けれどもはたして字義通りさうであらうか。それは現代の人々の間に、萬葉集の歌はよく、古今集以後の歌は、くだらないといふ一つの既成の評價の尺度があつて、實朝を褒めるときにもそれをそのままあてはめて、誰もが輕はづみに亞流的言辭を使つてゐるのでなければ幸である。たとへ實朝が萬葉の語をよく生かしたとしても、だからといつてそれだけでは當時の京都の歌人よりえらいといふ理由にはならない。現に金槐集にしても、新古今的表現の方が多いし、武田祐吉博士が金槐集以外に散見する極く少數の實朝の和歌を丹念に集められたのによると、概して古今以後の調子である。ことに死ぬ日の朝の歌、

出でていなば主なき宿となりぬとも軒ばの梅よ春を忘るな

は、かの菅公の

東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ

を思はせて全く古今調である。それ等の歌によつて、實朝は晩年に近くなるにつれ、一層京都化して新古今調になつたのではないかといふ推定説すら可能となるわけである。勿論私はあの新古今の歌にそつくりのものになつたらうとは決して思はない。けれども、萬葉の語ばかりを使つてはゐまいと思ふのである。そしてその點は寧ろ缺點でなくて、美點であると思ふ。私は實朝がむやみやたらに天性の感力を持つてゐた點が何よりも褒めらるべき點だと思ふ。藝術家としての天分といへば「詩」があるといふことである。實朝には「詩」があつた。

川田氏の「全註金槐集」を見ると、如何に新古今の歌の句を取つてゐるかといふことが解るし、齋藤博士の諸論によると、如何に後鳥羽院の御製や三代集にまなんでゐるかといふことが分る。しかも實朝は、ひと目でそれと判るやうに露骨に人の句をとつてゐる。けれどもそれはすべての歌が二十二歳までに出來たものであることを考へれば、すべて素描の稽古時代の歌なのだから無理はない。定家や家隆などが漸く百首歌の稽古をはじめる年頃には、金槐集の歌は

すでに絡をつげてゐるのだから、それを考へれば他人の成句を如何に多く二句三句ぶち抜きにとつてゐても、その點はきびしくいふことはできぬ。しかも全くおどろかされる一つの點は、大方は眞似をした實朝の歌の方が、風雅の作品としては一層破綻がなくなり、よくなつてゐるといふことである。これは「詩」のある人でなければ出來がたいことなのである。そして、實朝のえらさといふことは、すべてその點にかかつてゐることなのである。次に少しその例を出して見よう。(例は專ら川田氏のされた調べに負うてゐる)。

うちなびき春さりくれば楸生ふる片山かげにうぐひすぞ鳴く　萬葉　一〇

うち靡く春さりくれば雀のうれに尾羽うちふれて鶯なくも　新古今　三

楸生ふる片山かげにしのびつつ吹きけるものを秋のはつ風

み冬つき春しきぬれば青柳のかづらき山にかすみたなびく　萬葉　一七

み冬つき春はきたれど梅の花君にしあらねば折る人もなし

白雲のたえまになびく青柳のかづらき山にはる風ぞふく　新古今　一

春くればまづ咲く宿の梅の花香をなつかしみうぐひすぞなく

春さればまづさく宿の梅の花ひとりみつつや春日くらさむ　萬葉　五

ふきくれば香をなつかしみ梅の花ちらさぬほどの春風もがな　詞花　一

このねぬる朝明の風にかをるなり軒端の梅の春のはつはな　萬葉　八

秋たちて幾日もあらねばこのねぬるあさけの風は袂寒しも

谷風にとくる氷のひまごとにうち出る浪や春の初花　古今　一

わが宿の梅の花さけり春雨はいたくな降りそ散らまくもをし

春雨はいたくなふりそ櫻花いまだ見なくに散らまく惜しも　萬葉　一〇

秋風に夜のふけゆけばひさかたの天の河原に月かたぶきぬ

ぬばたまの夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月かたぶきぬ　萬葉　一七

ぬばたまの夜はふけぬらしたまくしげ二上山に月傾きぬ

秋風に夜のふけゆけば天の川河瀬に浪のたちぬこそ待て　拾遺　三

さ夜中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡る見ゆ　萬葉　九

かうした歌をよく讀み比べてゆくと、實朝の歌の方が風流の歌だといふことが分つてゆくであらう。勿論自然に對して深く感じうる心を持つてゐるに違ひないが、自然を深く感じることは卽ち風雅である。その心を歌はうとして、古歌に類例を見つけ出しながら作つてゐると、いつの間にか古歌よりも卒のない、をさまつた歌が出來てゐる。恐らく彼は、自分自身の自然感覺よりは、もつともつと強く、それに似通つたものをうたつてゐる古歌の表現を愛してゐる。彼が眞に愛したのは言葉である。何故といつて、言葉には文化があるからである。それ故に、彼の歌は王朝四百年傳統の風流に身をよせる心によつて支へられてゐる。野性のたゞ逞しい力が金槐集のあのやうな歌をつくつたと考へる人があるならば、それは文藝の理解の貧困を宣言するものであつて、現代日本のためには、あまり見せたくない缺陷でなければならない。

ながむればころもで寒し夕月夜佐保のかはらの秋のはつ風

ゆふさればころもで涼し高圓の尾上の宮のあきのはつかぜ

ながむればころもで涼し久方の天のかはらの秋の夕ぐれ　新古今　四

萩が花まそでにかけて高圓の尾上の宮にひれふるや誰　　新古今　四

なども着想といひ、言葉づかひといひ、全く同じ世界のものであつて、實朝の歌も決して概括的にいつたいはゆる萬葉人のと同じ世界の歌ではない。一生行つたこともない大和の高圓や佐保川を、古歌を通して憧憬してゐるのである。實朝の中で、さうした文化への憧れが「詩」となつてはりつめてゐることがまともに解るのは、これ等一首の聲調にこもる凛々としした、たるみのない統一力によつてである。

ゆふされば秋かぜ涼したなばたの天の羽衣たちやかふらむ
夕されば秋風さむしわぎもこがとき洗ひ衣ゆきてはやきむ　　萬葉　一五

など民謡風の歌を轉じて風雅の作としてゐる。だから時にはつぎの歌のやうに、原作の生彩を失つて、をさまり過ぎた感じに墮ちることもあるし、

花におく露をしづけみ白菅の眞野のはぎ原しをれあひにけり

いざ兒ども倭へはやくしらすげの眞野のはり原手折りてゆかむ　　萬葉　三

時には同じ形の發想を用ひながら、もつと冷たい感じを出すこともある。唐衣などは遊びである。原歌の方が、はるかに肉體につらなる感情を出してゐる歌なのかも知れない。

野べにいでてそぼちにけりな唐衣きつつわけゆく花の雫に
山路にてそぼちにけりな白露の曉おきの木々のしづくに　　新古今　一〇

秋風はいたくな吹きそわが宿のもとあらの小萩ちらまくも惜し
時雨の雨いたくな降りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも　　萬葉　八
春雨はいたくな降りそ櫻花まだ見ぬ人にちらまくも惜し　　新古今　二

例はいくらでも見つけ出せるがこの位でやめることにしよう。私がいひたく思ふことは、このやうに實朝が文化人であるならば、その人が生まに自分の感じで觸れたらしい歌には、新古今集には取られなかつたが、新古今人が多く作つてゐた素直な叙景歌や抒情歌やに似たものが出てゐる筈である。勿論今からそれを嚴密に區別だてることは、むつかしいことではあるが、

詞書によつて、題詠でないらしい歌、つまり題を與へられて、それによつて作文の稽古のやうに無理にまとめたのではないらしい歌を漁つて見る。

今よりは涼しくなりぬひぐらしのなく山かげの秋のゆふかぜ

蟬のなくをききて

吹く風は涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

庭の萩わづかに殘れるを月さしいでて後見るに

散りわたるにや見えざりしかばよめる

萩の花くれぐれまでもありつるが月いでて見るになきがはかなき

夕べのこころをよめる

たそがれにもの思ひをればわが宿の荻の葉そよぎ秋風ぞふく

われのみやわびしとは思ふ花すすきほにいづる宿の秋の夕暮

秋の夕べによめる

大方にもの思ふとしもなかりけりただ吾がための秋の夕ぐれ

八月十五夜のこころを

ひさかたの月の光し清ければ秋のなかばをそらに知るかな

雨のふれるに庭の菊をみて

露を重みまがきの菊のほしもあへず晴るれば曇る村雨の空

初冬の歌の中に

木の葉ちり秋もくれにし片岡のさびしき森に冬はきにけり

夕月夜澤べにたてるあしたづの鳴くね悲しき冬はきにけり

夜ふけて月をみてよめる

さよふけて雲間の月の影みれば袖に知られぬ霜ぞおきける

いはゆる萬葉模倣歌でもないし、萬葉語弄玩歌でもない。八月十五夜の歌や、雨中に菊を見た歌や、夜ふけ月をみた歌を、今一度よみ直して見られるならば、すぐ判ることだが、古今集この方の、和歌のならはしとなつた感懐の持ち方なのである。京都の生活と、傳統文化への憧

れとを知らぬ、東國の野性の「生」からは、絶對に出て來えない歌である。のみならず、「秋の夕べによめる」の歌をつぎのやうな歌と較べて見られよ。

大方にもの思ふとしもなかりけりただ吾がための秋の夕ぐれ　實朝
さびしさはその色としもなかりけり槇立つ山の秋の夕ぐれ　寂蓮
風やあらぬ月もやあらぬもの思ふわが身一つの秋のゆふぐれ　慈圓
秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただ我れからの露の夕ぐれ　長明
たが秋の寢覺めとはむと分かずともただ吾がためのさを鹿の聲　良經

全く同じ時代の同じ人種の歌であることはあきらかである。あるひはまた、

今よりは涼しくなりぬひぐらしのなく山かげの秋のゆふかぜ　實朝
今さくら咲きぬと見えてうす曇り春にかすめる世のけしきかな　式子內親王

のやうに比べて見ても、

たそがれにもの思ひをればわが宿の荻の葉そよぎ秋風ぞふく　實朝
ながむれば思ひやるべき方ぞなき春のかぎりの夕暮の空　式子內親王

のやうに並べても、

萩の花くれぐれまでもありつるが月いでて見るになきがはかなき　實朝
花の上にしばしうつろふ夕づく日入るともなしに影消えにけり　永福門院

のやうにならべて見ても、本質的なちがひは見られないのである。大方讀者はみな既に感じてをられるやうに、清和天皇から流れ出て、賴義・義家以來東國土豪の棟梁になつた源氏の嫡孫は、田舍人になつてゐても貴族である。源氏・平家ともに持ちつづけた「都へ」の憧憬は、父賴朝の代に封禁されても、實朝の心に萌え出ないとは限らない。幕府の大世帶ができ上つて、政治的に歸洛の見込みのなくなつたところでは、都の文化に對する渴望が一層つよくならぬとはいへないであらう。その心が和歌を熱愛させる。和歌はすでに四百年の傳統を荷擔つた貴紳文藝である。この文藝に打ちこんでいつた實朝の愛は、あるひは都の人たちの思ひ知らぬほど

に一圖で清純なものであつたらうとも思ふ。それだけに金槐集の歌は風雅に凛々とした張りがあるのである。しかし風雅は風雅である。風雅とは文化人の「詩」といふことである。

たゞ金槐集には宮廷貴紳の心には成り立ち得ない一種の歌が存してゐる。これは自分が周圍の者からその集團の象徴（シムボル）と見做されてゐることを感じてゐる棟梁の歌である。この自覺は後鳥羽院においてと同じやうに、新古今調とか萬葉調とか限定するに適しない、孤高のひびきを傳へたのである。箱根二所詣の歌、

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ
わたつみの中に向ひて出づる湯の伊豆のお山とうべもいひけり
ちはやふる伊豆のお山の玉椿やほよろづよも色はかはらじ
たまくしげ箱根の海はけけれあれや二國かけてなかにたゆたふ
旅を行きしあとの宿守おれおれにわたくしあれや今朝はまだこぬ

などは、私は自ら王侯の身でなくてはひびかすことの出來ぬものだと思つてゐる。萬葉時代は

さうしたものが、もつと殘り得てゐる時代である。いまや時代は、王侯の上にしか、かうした聲調の地盤をとどめないのである。

道のほとりに幼なき童の母を尋ねていたく泣くをそのあたりの人に尋ねしかば
父母なん身まかりにしと答へ侍りしを聞きて
いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる
慈悲の心を
物いはぬ四方（よも）のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

相州の土屋といふ所に年九十に餘れるくち法師あり、おのづからきたり昔語りなどせしついでに、身の立居に堪へずなん成りぬる事を泣く〳〵申し出でぬ。時に老といふ事を人々に仰せてつかうまつらせしついでによみ侍りし
われいくそ見し世のことを思ひいでつあくる程なき夜のねざめに
思ひいでて夜はすがらにねをぞ泣くありし昔の世々のふるごと

なかなかに老いはほれても忘れなでなどか昔をいと偲ぶらむ
道遠し腰は二重にかがまれり杖にすがりてここまでも來る
さりともと思ふ物から日をへてはしだいしだいに弱る悲しき

これ等の歌に見える愛は、上にある者が下の者を包む愛である。佛敎弘通のはじめ、光明皇后が自ら非人の傷を吸はれたといふ傳說の生れた、その愛である。京都の中にゐて、水の漏れるやうな隙を鵜の目でさがしつつ、儕輩を押し仆して官位の競望に憂き身をやつした中流公家の心勞からは、生れ出ることのない大慈悲心である。その證據にはかうした歌は西行にも俊成にも定家にも一首として生れ出はしなかつたのである。かうした慈悲心が窮極するときに、

建暦元年七月洪水漫レ天、土民愁歎きせん事を思ひて、一人奉レ向二本尊一聊致二祈念一と云

ときによりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

の歌は生れてくる。かうした歌は、心の自在を得て、他から強ひられたのでない自發的な愛のあらはれを感じさせるけれども、かうした心を持ち得る地位といふものは、平安朝末までは帝

王の外にはあり得なかつたのである。でなければ、一宗を興す祖師のごとき人。それがいまや封建の組織がととのつて、實朝のごときもまた王侯の自在心をもつて歌を作り得たのである。かうした實朝の歌の良さを感じ、そしてその如き歌こそ「人間」の歌であると感得した近代人は、思へば世にも幸の多い民であらねばならぬ。

しかし勿論實朝も、日本國の中にあつては一臣民であつた。その點では京都の宮廷貴紳と何のかはりもあるわけはない。そこに、

太上天皇御書下預時歌

大君の勅をかしこみちちはははにこころはわくとも人にいはめやも
山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも
ひむがしの國に吾が居れば朝日さすはこやの山の陰となりにき

のやうな歌も生れるのだが、かうした歌の調子の高さには、當時の他の歌人には決して見られないものを持つてゐる。その點に、上古の天皇と氏上（うぢのかみ）との對面の樣子が彷彿するのである。こ

の言立てには、大伴氏の「海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍」の言立ての單純さに比べると、何か見えざる身邊の反對力に必死に反抗して、身獨りが天皇の臣たらんとしてゐる英雄の叫びといつたものを感じさせて、悲壯さ限りもないが、それはこの封建の王侯實朝の身の上を考へるときに、充分その必然を理解することができるであらう。

後鳥羽院の帝王體と、實朝の王侯體との對面は、一般にいふ新古今調からは一つ高い身分の世界に拔け出たところにおいて行はれた光景であつたのである。この關係こそ、上代文化の地盤をなしたところの、上代社會關係の象徴的殘映であつたのである。今とかけはなれた古典の世界を理解しようとするに當つて、專ら現代人の鑑賞力ばかりに賴らうとする直指人心の態度は、古典文藝の理解といふことが如何なることかを考へても見たことのない我儘に過ぎぬのである。和歌であるが故にひとつなみに同じく人間の詠歎だといふ風にうけ取る限り、實朝が何故あの歌を殘したかは永久に解決しがたい問題であらう。

九

正治百首によつて後鳥羽院の仙洞に昇殿を許された數々の歌人のうちで、定家は光つてゐた。その恩賞として四十一歳で正四位下左權中將になつて、新古今集序にもこの肩書で撰者の中に擧げられてゐる。その後かの承久亂のために、後鳥羽・土御門・順德三上皇の遷幸といふ未曾有の事件が生じて、後鳥羽院仙洞を中心にできてゐた都の歌壇がばらばらになつたのは承久三年、定家六十歳であつた。この二十年に定家は正三位參議民部卿播磨權守に昇つてゐた。

しかしそれの一方、次第に後鳥羽院の御趣味とぴつたり合はなくなつて、最後には御不興を蒙り、勘當に與つて、そして承久亂が來てしまつたことは前にちよつと觸れた通りである。これは後鳥羽院がかはられたのでなくて、定家が變つたのであつた。それには無理もない點があつた。一體新古今の氣分なり歌風なりの基調になつたものを、定家などが身をもつて創出したのは、治承から正治へかけての二十年であつたが、そのとき定家は二十代三十代の盛りの年頃であつた。ところで正治から承久までの二十年間は、恰度また院二十代三十代を過された時代、

院から申せば盛りの御年だから、いよいよ豪奢な新古今の錦繡の調べを愛せられ、來る日も來る月も歌會の催しがにぎはしく續けられた。しかし定家はそのときすでに、四十から六十におよぶ年齡にさしかかつてゐて、自づとこれまでの調子には行かなくなつてゐた。これは重要な素因として、枯れた調子を愛しはじめる老衰といふことも考へねばならぬが、今一つは新しい時代を早く感じはじめてゐたことでもあると思ふ。このことについては後に尙、新勅撰集に觸れるとき、改めて考へ直すことにするが、とに角さうであつたのである。これまでの調子はくだらなく見えてくるが、院の御好みはもとのまま故、何ともなし得なくなつたところへ、恰度老境にさしかかつたため、倦み疲れて、新しく自分を調節し、今一度創作の方でふみ出す力が出きれないでしまつたのだと思ふ。にはかに作歌數は減少しはじめ、仙洞の雅宴を厭ひはじめる。明月記にも、「鷄鳴、月未だ入らざれど退出、老後の數奇、病きほひ起り、はなはだ堪へがたし」とか、「百首の題を給ふ。年内に詠進すべしと云々、連々として三百首爭でか風情を得んや、はなはだ以て堪へがたし」など書きはじめる。また四十八の承久三年に實朝へ送つた「近代秀歌」にも、「老に臨みて後は、病重く憂も深く沈み侍しかば、言葉の花色を忘れ、心の泉源

涸れて」といつてゐる。そして、五十五歳の年に自分の創作に一つのくぎりをつけた。「定家卿百番自歌合」と家集「拾遺愚草」とがそれである。

建保四年二月に自歌二百首をえらんで、百番自歌合をつくつた。これは「續群書類從」和歌部に收められてゐる。そのために、年來の歌稿全體に眼を通したので、それを分類整理して家集「拾遺愚草」三卷を淸書した。上卷の終に成立の由來を認め、建保四年三月十八日に書いたと記してゐる。

註　これまで觸れてきた新古今時代の有名な歌人中、慈圓の拾玉集・良經の秋篠月淸集・俊成の長秋詠藻・西行の山家集・定家の拾遺愚草・家隆の壬二集を六家集といひ、江戸時代の刊本もあり、續國歌大觀・國歌大系にも入つてゐるが、中でも拾遺愚草は佐々木博士校訂の岩波文庫本がよい。近くは改造文庫にも加へられた。

かうした氣持ちになつて行つたので、後鳥羽院も御口傳のうちに、定家は左右なき者だが、數寄といふことを知らぬから、眞面目一圖で駄目だといふことを記しとゞめられたことは前に一度觸れた通りで、かうした院の御心と定家の强情な藝人氣質とが、次第に勘當といふやうな

破局を醸成するやうになつていつたのである。

だから定家はこの頃になると、若いときとは考へも變つたし、歌を見る眼も變つて來た。それにこの頃になると、兼實・良經・土御門通親・俊成・西行・寂蓮・隆信などすべて世を去り、定家・家隆の時代になつたが、家隆は溫和で、それに定家が俊成の後繼者だつたため、事實上歌界の元締めの形になつてきて、多くの作法心得を書いた。それがあるので幸なことに彼の考への大體は分るのである。並べて見ると、

近代秀歌　承元三年　四十八歲
二四代集　建保三・四年の間　五十四・五歲
詠歌大概　二四代集より後、每月抄より前
秀歌之體大略

每月抄　承久元年　五十八歲

のやうになる。（この順序を決めるには久曾神昇氏「二四代集と定家の歌論書」〔昭和十年七月・國語と國文學〕といふ名研究報告に安心してたよれるのである。）近代秀歌は實朝に送つた心得で、名の示

すやうに、終りへ近代の秀歌、つまり經信・俊賴・顯輔・清輔・基俊・俊成の近代六大家の秀歌を記し添へたものであるが、自歌合や家集やを作る頃になると、はつきり一轉機が來たと見える。二四代集を編んだのは恰度同じ頃で、これは名の示すやうに八代の集、つまり古今から新古今までの勅撰和歌八代の集の秀歌の拔粹であるが、これが出來ると定家の新しい立場はつきりしてきた。

次に書いた詠歌大概に添へてある秀歌之體大略は全部二四代集からの孫引だし、また前に述べた近代秀歌の秀歌を除き去つて二四代集の中の歌を附け換へた。實朝へ送つた方は「群書類從」和歌部に入つてゐるし、後で歌をつけ換へた方は自筆本が殘つてゐて、久松潛一博士校訂の「中世歌論集」（岩波文庫）中に收められてゐる。見れば判ることだが、この後の方は古今以來の秀歌を取つてゐるから、近代の秀歌ではなくなつてしまつてゐるわけである。

ところが大切なことは、この選歌方針は、承久亂後の定家に一貫した態度であつたといふことである。何故判るかといへば、秀歌大體・百人一首・新勅撰和歌集の三つによつて判る。秀歌大體は、承久亂の後立たれた後堀河院に獻じたといはれ、古今・後撰・拾遺のいはゆる三代

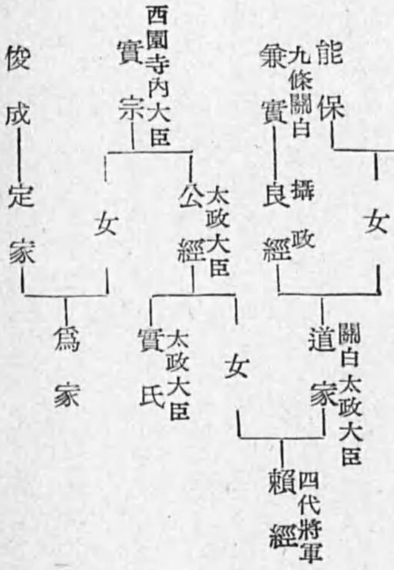
集と新古今集と併せて四代の集だけから選歌してあるが、三分の二は二四代集の歌と符合する。またつぎの百人一首はすべて勅撰和歌集に見える歌ばかりを揃へてゐるが、ことに九十四首は八代集の中に見えてゐる。その中九十二首は二四代集の歌である。

註　百人一首の撰者についてはいろいろいはれてゐて、ことにこの位の歌ならば定家でなくても選べるといふ恐るべき印象論まで出てゐるが、たとへ定家でなくてもすべて二四代集の歌であるのを見れば、定家の標準と全く同じ標準で選んでゐることが判る。この百人一首成立については拙著「新古今時代」中の「百人一首の再吟味」を參照して下されば幸である。

そして、第九代の勅撰集である定家獨撰の新勅撰和歌集の色あひがまた全く以上の場合と同じなのである。そんなわけで、五十四五歳の頃、一轉機が來たのが事實らしく、自歌合や家集やを作ると同時に、一方では全く自家用として二四代集を撰んだりして、新しい批評のものさしがはつきり決つたのである。新古今と新勅撰とを讀み比べて見ると、同一人が關係してゐるとは思へない程感じが違つてゐるのであるから、新古今を良しとされる院が、新勅撰的標準の出來てきてからの定家の言說態度に滿足されなくなつたことは遺憾ながら致し方のない運命だ

つたのである。

さて承久亂の後定家は思ひもよらぬ幸運に面接した。一體定家がたよつてゐた人々はみないづれかといへば、鎌倉に對して何等かの關係のある人たちであつた。次にかかげた系圖をよく見ていたゞくと判るが、



九條家と西園寺家とは姻戚關係があり、九條家は賴朝と姻戚關係があつたので、後京極攝政良經の子道家と、西園寺公經の女との間に出來た賴經が、實朝の亡くなつたあと、將軍に立てられたのは尤もだつた。それに、賴朝存生中も、兼實や慈圓やは、東西の外交に、惟れ努めた方だつたから、この家筋の人々は鎌倉追討の御企てのをりは、警戒して敬遠されてをり、慈圓などは愚管抄といふ歷史論を書いて、諷諫するといふ風であつた。定家は前に述べたやうに、その九條家の家司をつとめたし、公經の姉を妻に迎へてゐるから、自然鎌倉にも緣が出來て、實朝の添削をする樣にもなり、嫡子爲家には關東の豪族宇都宮賴綱の女を娶るといふ風であつた。而もそれは北條時政の孫女であつたのである。定家の關東との關係の程が判るのである。

後堀河天皇が位に卽かれると、西園寺公經が內大臣になり、ついで太政大臣になり、ややおくれて、嫡男實氏が內大臣になつた。また良經の弟九條良平が內大臣になり、ついで左大臣に昇り、道家はまた少しおくれて關白に就いた。亂後の勢としては、關東との關係上かうならざるを得なかつたらうが、その結果は、定家の一身上に大きく響いてきた。彼自身は承久亂の年は六十歲で、その翌貞應元年從二位に昇つてから、六十六で正二位、七十一歲で權中納言に就

き、七十二歲で出家、仁治二年八月、八十歲を以て薨去した。

しかし御子左の家の幸運は、もつと著しく嫡子爲家の上にあらはれてゐる。彼は建久九年に生れ、承久亂の年には二十四歲で從四位上左權中將であつたが、二十八（嘉祿元年）頭中將、二十九（嘉祿二年）從三位參議兼侍從、三十九（嘉祿二年）從二位權中納言に昇り、四十四歲（仁治二年）のときすでに正二位權大納言となつた。御子左の家柄としては極位極官である。それにこの昇進の早さは、たしかに大臣家の公達に互格であつた。父定家はそれを見て世を去つたのである。この昇進の早さには定家自身呆然として、「二十八にて藏人頭、將相の家すらも猶以て幸運の輩なり」といつたり、「頭中將（爲家のこと）馳せ來つて云ふ……參議に任じ侍從を兼ぬと……運の早速なること更に筆端の及ぶ所にあらず……未だ三十に及ばずして八座（參議のこと）に加はる、實に言語道斷の事か……眼前に公卿を見る、愚眼の宿運は身の運に似ず、驚奇するに足れり」などとも記してゐる。勿論九條・西園寺兩家の背景があるからであることは、定家自身が一ばんよく知つてをつた。

後鳥羽仙洞の雅會を飾つた作家達はみな亂の後は世に隱れてしまつた。家隆や源家長が第一

それで、藤原秀能なども出家して如願といつてゐた。隱岐島で遠島御歌合のお企てのあつたときも家隆が萬事斡旋して、歌をまとめてお送りしたが、定家は加らなかつた。恐らくは、嘗て御勘氣を蒙つてゐたからといふよりは、彼が家隆と組んで行ふには餘りに關東への結びつきが強くなりすぎてをつたためだつたかも知れぬ。そのやうなわけで、往年の歌人は多くすでに世を去つたし、殘る者はすべて世を憚る人々であつた。前代の寵遇に與りながら、後堀河の御代となつて引きつづき時めいた歌人は、定家の外には誰もなかつたといつてよい。さうした中で後堀河天皇の勅により、定家は獨力で新勅撰和歌集を撰進したのであつた。

十

定家は貞永元年六月十三日、後堀河天皇から和歌集を撰進するやうにとの勅命を蒙つた。この年の末御讓位、四條幼帝卽位される。一年を隔て、天福二年六月三日に一千四百九十八首の自筆の本を奉つて假奏覽を行つたが、その後引きつづき改訂を行ひつつあつた。ところが八月六日後堀河院が崩御されたので、悲歎の餘り翌七日庭上に草本廿卷を置いて燒き棄ててしまつた。その後十月になつて、九條道家が院の御手もとに奉つてあつた草本を尋ね出して、定家に完成を命じたので、引きつづきそれに從事し、翌嘉禎元年三月十二日に完成して奉つた。名筆行成卿の子孫である世尊寺行能の淸書で、全二十卷、流布本によれば歌數一千三百七十六首。歌數がこの樣に減じてゐるのは、道家が草本を院の御所から尋ね出して定家に交付した翌月、十一月頃に定家自ら九條家に赴いて道家・敎實父子に草本を示したところ、用捨の事ありといふので、百首あまり切り棄てられた。その結果が形の上にあらはれたものである。

定家の一ばん心を使つたのは後鳥羽院をはじめ奉り、三上皇の御歌を如何にするかといふこ

とであつたに違ひない。恰度撰集の進行中に、前に囑れた後鳥羽院の遠島御歌合の料の歌を家隆の手もとからまとめて御送りするやうなこともあつて、定家は相當神經をつかつてゐる模樣だつた。また特に力量拔群の三上皇の御歌を入れなければ歌集の體を成さぬし、家隆や如願法師(秀能)など後鳥羽院の寵遇を蒙つた歌仲間の思はくも如何である。とはいへ、關東の意況を考へれば難しいといつて、進退に窮したりもした。佐渡院(順德院)が撰集の沙汰を聞し召された由だが、もし御製を載せ奉るなら、一存にせず、必ず相談せよと某有力者から仰せを蒙つたことも日記へ書いてゐる。

明月記を讀んでゐると判ることであるが、定家は神經質で立身出世を希ひつつ權力者の意向に兢々としてゐた男だが、自己の藝道にかけては上皇の御心に楯ついて「傍若無人、ことはりも過ぎたりき、他人の詞を聞くに及ばず」と嘆聲を發せしめ奉つた程に強性で、己の判斷力に固執した人物であることを考へると、彼は權力と己の藝術心との間に煩悶懊惱した上で、三上皇の御製を採つたのでないかと思ふ。道家・教實が百首も切り棄てたといふことは、「百煉抄」に載つてゐるのだが、これは最も信ずべき史書であるから、事實に違ひない。そして、佐渡院

のお歌を入れるなら相談せよといふ仰せがあつたといふ定家の日記の言葉と照し合せて考へると、定家が採つた御製を道家・教實(兩人ともそのときは前關白)の所存によつて削つたのだといへさうである。これは別に定家を庇ふ意味でなく、これが定家にとつては窮して通ずる唯一の道であつたのだらうと想像されるのである。

さて三上皇の御製に關する以外では、歌に關する限り、定家はこわいもの知らずの地位にあつた。彼は思ふさま自己の主觀にたよつて選をした。その結果が前にいつた二四代集、秀歌之體大略、自筆本近代秀歌の秀歌例、秀歌大體、百人一首などの聲調と相等しい聲調の歌集にでき上つた。新勅撰風の樹立といふことは美事になしとげられてゐる。

しかし作家の人選の點になると、關東關係の政治權力の影響と、定家自身の歌人的地位からくる私情的人選の恣意とが、大部あらはれてゐるやうである。もちろん新古今集は充分理解されたであらうやうに、個人的運動などの餘り利かない方法で撰ばれた集だが、個人の撰者が勅を蒙つたときは、隨分入集を希ふ人々が運動をしたもので、これは寧ろ和歌界の佳話として傳へられたりする。何時の撰集のときにも現存歌人でゐて、一首か二首しか入集してゐない人が

可成り多數にあることは、作者別勅撰集を作つてみると、どの集にでも感ずることなのだが、さうした人々の中には、隨分緣故を辿つたり、紹介の効果によつたりして合格した者も多かつたらうと思はれる。新勅撰集には、定家の日記があるために、つき合せて見ると、運動の効によつて一首か二首入れられた證據が擧るのである。しかしこれは定家だけのことでないし、歌風の大局にひゞく程のことでもない。

相當眼に着くのは政治權力への顧慮からくる影響で、武士と武家出身の僧侶とあはせて十四人の人がえらばれてゐる。新古今集では歌人として名の高かつた源三位賴政、平家方では忠盛、鎌倉幕府方では賴朝の三人で、賴朝すら一首しか取られてゐない。それに比べると、實朝の歌を多く取つたのは別として、泰時・重時・政村などは關東の意を汲んだので、蓮生坊宇都宮賴綱は岳父だから、信生法師は宇都宮の一族の上、實朝と歌の上で親しい臣家でもあつたからといふ意味が、鎌倉方の人といふ外に加つてゐたに違ひない。とに角全部で十四人の人數の出てゐることに、勅撰集としては未曾有のことであつた。朝幕關係がまざまざと反映してきてゐる。

また承久亂後はその前に引きかへ、まるで歌壇は寂漠たるもので、ことに後堀河院は二十三で崩御、次の四條天皇は十二で崩御といふふうに、歴代お若かつたのであるから、禁裡仙洞に歌會の盛に催される氣運の生れずして終つたことは當然である。それだけに、歌人といへば新古今の時代の人が中心になるわけであるが、それが歌人としての力量の點よりも、九條・西園寺兩家、したがつて彼自身に關係のある血筋の人といふ點に重きを置かれてゐて、殊にその中でも死亡した人より現存の人に厚くしてゐる。

歌人名	歌數
隆　家	四三
經　良	三六
成　俊	三四
經　公	三〇
圓　慈	二八
家　道	二五
朝　實	二五

雅	經	二	〇
×	相	一	八
實	模	一	七
定	家	一	五
殷富門院大輔		一	五
×	貫之	一	四
×	和泉式部	一	四
西	行	一	四
式子內親王		一	四
×	俊頼	一	四
二條院讃岐		一	三
知	家	一	三
八條院高倉		一	二
道助法親王		一	二
信	實	一	一
長	方	一	〇

現存專門歌人の筆頭は家隆ゆゑ、最高にしてゐる。これは別格で、次は舊主良經と父俊成とを立て、次に實朝はどうしても二五位は採りたいので、道家も釣合上同數にし、慈圓は大家だが然るべく良經と道家との中間數としたといふやうなけはひが直ぐそれと察しられる。公經と實氏とは立てなければならぬので、自分はそのつぎに座つたのである。貫之・和泉式部・西行・式子內親王を同數としたことは、定家の評價の良さを今からでも見ることが出來て、歌人としての力量の鋭さは掩ふべくもない。しかし九條家に對立した土御門通親を五首、「歌仙落書」といふ面白い書物まで作つたその子の久我通光を四首におとしたり、その方へ結びついてゐた六條家の人々は、新古今撰者だつた有家も四首、顯昭は一首、季經などは全然採らず、たゞ定家の門弟になつてゐた知家だけは十二首を採つてゐる。右のやうな點には京都內だけでの政治的關係や、歌壇的勢力關係がかなり鋭く反映してゐるのである。

以上のやうな人選上の傾向は、一つには時代のひゞきではあるが、それが定家の性癖を通し、またそれを自由に表へ出させ得るやうな社會的地位を通して、一層過度に強められてきてゐる感は少くないのである。同じ立場に立つたにしても、家隆だつたら隨分ちがひはしなかつ

たかと思はれる。

しかし、新勅撰風といふものが定家のものであつたことは、前にも十分説明した通りなので

ある。

註　新勅撰集に關しては、石田吉貞氏の「新勅撰集の成立について」（昭和六年七月・國語と國文學）「新勅撰集の定家的性格」（昭和十四年一月・國語と國文學）が未曾有の名論文である。以上の記述も非常に負ふところが多いのである。ことに事實に關することで、坊間の和歌史などと異つた點があつても、私はすべて石田氏の研究が正しいと思つて、それに學んだ點が多いのである。

天のとをあくるけしきも靜かにて雲井よりこそ春は立けれ　俊成

うちはへて世は春ならし吹風も枝をならさぬ青柳の糸　實氏

み冬つき春しきぬれば青柳のかづらき山に霞たなびく　實朝

面影に花のすがたをさきたてて幾重こえきぬ峯の白雲　俊成

月影の梢にのこる山のはに花もかすめる春のあけぼの　賴實

名もしるし峯の嵐も雪とふる山櫻戸を明けぼのゝ空　定家

明日もこん風しづかなるみ吉野の山の櫻は今日くれぬとも　行能

春風のやゝふくまゝに高砂の尾上に消ゆる花のしら雲　長方

春の夜の月も有明になりにけりうつろふ花になかめせし間に　雅經

山櫻さきちる時の春をへてよはひは花の蔭にふりにき　信實

白雲にまがへし花は跡もなし彌生の月ぞ空にのこれる　公經

これ等の歌を讀んで分ることは、千載・新古今と根本にちがふ世界ではないといふことである。ただはつきりいへることは、前に精しくふれた新古今の色彩的繪畫的な錦繡調が減つて、むしろ千載調に近くなつてゐるといふことである。これはさもあるべきことで、年齢の上から見ても千載集をえらんだ頃の俊成と似た境地へちかよりつつあつたといへるであらうけれど、寧ろそれよりも、我が子爲家に和歌の學問を傳へようとする熱望が、逆に父俊成の庭訓を承け繼ぐ氣持を強くしたのであつて、封建時代の特色である世襲の觀念が、和歌のやうに文學的創作文學になり切つた文藝の世界においても、個人の創意を凌いで芽を吹いてきたしるしなので

ある。定家の四十を越して感じはじめてゐた鑑賞力の轉變の底には、このやうにして、和歌そのものを創意的なものとするか、それとも傳統的なものとするかの動搖が含まれてをつたのであつた。平安時代四百年に、三十一音の短歌形式を護ることによつて、詩歌は民謠から文藝へと昇華したが、今や文藝としての和歌は、形式をも護る上に、さらにその形式にともなふところの文藝性を護ることによつて、傳統を中世に傳へようとしてゐる。新古今調から離脫して千載風なものに近くなつていつた定家の感覺には、精神生活の上へまで押し寄せてきてゐる中世封建の空氣に順應して、己を活かし切らうとする本能的な敏感さを認め得られるのである。封建制度の中ではもちろん文藝は變る。文藝を護る人の心がけも變るのである。

その點については、新古今風の創造に若い空想を傾けつくしてゐた頃の定家に、どれだけの自覺があつたか疑はしく思ふ。むしろなかつたのが當然なのであらう。ところが實朝に近代秀歌を送る頃になるとはつきりそれは體を成して來てゐるのである。

その第一は、萬葉でなく、古今へ歸れといつたことで、第二は、古今の中でも貫之以後をあまり褒めず、その以前にかへれといつたことであり、第三は、漢詩との對立を意識して、和歌

の特性を優しい點にみとめようとした點にある。

註　右の第一は「詠歌大概」に「詞は三代集を出づべからず」といつてをり、第二は「近代秀歌」に「昔、貫之、歌の心たくみに、たけ及びがたく、詞强く姿面白き樣を好みて、餘情妖艶の體を詠まず」といひ、その後この系統が墮落して歌らしくもなくなつたといひ、暗に千載集以前の智巧的傾向を壓へ、近き世に再び姿がかはつて「花山僧正・在原中將・素性・小町がのち、絕えたる歌の樣わづかに聞ゆる時侍る」といつてゐる。つまり貫之より前の六歌仙時代、短歌が文學的創作となりはじめの純抒情歌であつた時代を銳く摑んでゐるのである。それをもつと端的に「詞は古きをしたひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて、寬平以往の歌にならはば、自づからよろしき事もなどか侍らざらむ」ともいつてゐる。第三は「每月抄」に「まづ歌は和國の風にて侍る上は、先哲のくれぐれ書き置ける物にも、優しく物あはれに詠むべき事こそ見え侍るめる」とある。

そして、俊成は何處ででも獨創でものをいつてゐるのだが、定家はくりかへし親の訓へとか重代の名とか、先人の庭訓だとかいふ詞を用ひるやうになつて來てゐるのである。定家の意圖はほゞ明らかだと思ふ。

これはつまり、傳統文學論の立場がはつきり出來上つたことに外ならない。千載集では、詩

歌が文藝であることを護るために抒情が叫ばれたのだが、今や詩歌が文藝であるためには、聲調の模倣が條件となつてきた。そして定家がとりあげた古今調の、しかも貫之前の作家の聲調といふことは、王朝文學の傳統を護る心にとつて、極限の一線であつたのである。そこに立つて彼は「心の新しき」ことを求めたのである。定家自身すらむづかしくあつたに違ひないことで、それ故に、歌はたゞ抒情すべきものではなくなつてきた。かうした困難な條件の中では、和歌が「詩」をつなぎとめるためには、極度の表現上の緊張が必要になつてくる。少しのゆるみが「詩」を失はせる。そこで、大へんな修煉が要求されてくる。和歌はすみやかに「道」となる。文藝は藝道に移つてゆく。定家後半世の創作の衰退は、藝道の建立と、後繼者爲家の上に藝道を實現させるためだつたともいへるのである。

新勅撰集は、中世の歌道にとつて、歌の尺度となるべき模範を建てようとしたわけである。そして事實がそれを證明した。爲家以後の歌は大體このコースの上を走つたのである。

定家は「毎月抄」の中で十體に說き及び、中でも有心體を最上とする。實はどんな體でも心

のないのは悪いのであつて、すべては心があれば良いのだが、たゞひたすら心あることをねらつた歌が有心體だといつてゐる。西行が「心なき身にもあはれは知られけり」と歌つたのは、坊主の身にもこの感じは解るといふ意味で、坊主はもののあはれから超越した者と思はれてゐるから心なきといつたのである。反對に俊成は「戀せずば人の心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る」と歌つたといはれるやうに、物のあはれを知るのが心有ることである。そのやうなわけで、十體の中、麗樣・長高樣・濃樣・見樣などの多い新古今調がぴつたりしなくなり、專ら有心といふことを强くいふやうになつたのである。これは今の詞でいへば、和歌は「詩」がなければ駄目だといふことの警告なのであつて、このやうな警告が必要になつたときの歌壇の狀勢を想像することのできる諸君は、必ずや詩歌の危機として、他人ごとならぬ慄然たる思ひを味はれるに違ひあるまい。

たゞ問題は、その「詩」が野生的な生活に結びついてゐるものでなく、古典文藝の鑑賞に培はれる一種の雰圍氣である點であつて、その「詩」をつくり出すために、定家は白氏文集の第一・二帙を讀めと、「詠歌大概」にも「毎月抄」にものべてをり、「拾遺愚草」員外を見ると、文

集百首といふのさへ作つてゐる。新古今集の歌に對する漢詩の影響といふものは、なかなか根ぶかいのだが、恐らくこれは、佛教の方に漢文直譯體の七五調の和讃が生れたり、それが四句切りはなされて今様になつたりしたやうな歌謡方面からの影響かも知れない。惠心僧都作の天台大師和讃の發端、

歸命頂禮大唐國
天台大師ハ能化ノ主
佛ノ使ト世ニ出テ
一乘妙法宣べ給フ
眉ハ八字ニ相分レ
目ニハ重瞳相浮ミ
妙慧深禪身ヲ嚴リ
佛ニ殆ド近カリキ

を切つて、「梁塵祕抄」の僧歌の中に採られた今様、

天台大師は能化の主
眉は八字に生ひ別れ
法の使に世に出でて
殆と佛に近かりき

などの幽玄調を見ても、また佛歌の中の一首

佛は常にいませども
現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉に
ほのかに夢に見え給ふ

の哀怨調を味はつても、これ等の方が漢語調からの脫化を先へものにしてゐることが感じられる。大原三寂の一人唯心房寂然は、「唯心房集」に四十九首の創作今様を殘したが、それは多く朗詠の句の飜譯である。一例だけ擧げて置けば、

蘭省に花の匂ふ時

錦の帳をぞ思ひやる
香爐峯の夜の雨に
草の菴は靜かにて

は有名な白樂天の

蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草菴中

である。そして、この同じ句から俊成の歌、

むかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙な添へそ山ほととぎす

も出てきてゐる。漢詩と和歌との對立が、やまとうた意識發生の契機であつたことは、すでに序說のところでかなり叮寧に觸れてきたところであるが、今や和歌文學は、この對立を融合させることによつて、創作的詩歌の中に溷れようとする「詩」をつなぎとめようとするに到つてゐる。有心體の唱導の中心になるべき「心」が、このやうにしてつながれねばならない「詩心」であつたところに、定家の嘗めさせられた困難の並々でなかつたことが覗はれるのである。「詞

は古きをしたひ、心は新しきをもとめ」といふ消息がこれで幾分はつきりして來ると思ふ。そして一刻も忘れてはならぬことは、これが京都の中堅貴紳の欲望であつたといふことである。

私は定家が白氏の詩句をほめて「詩は心をけだかくすます物にて候」といひ、貴人の前での作歌には「心中にひそかに吟じ」、「さらぬ會席ならば高吟もすべし」と訓へてゐるのを見ると、ここにもとめられてゐる新しい抒情が、もとより風雅であることを知るのである。俊成の幽玄と定家の有心とは、要するに同じ文化人の、風雅の色あひの變遷に外ならなかつたのである。たゞひたすらに有心をめざして警告をしたといふところに、新古今以後の流行を追ふ言葉の端の模倣と、一首の歌に「詩」を打ち込まんとする藝術心の衰弱とが旺溢しはじめつつあつたことを感じさせられるのである。

十一

定家の嫡子は爲家、建久九年に生れ、次男であつた。異腹の兄は清家、後光家といつて、事あつて廢嫡され、五位侍從に終つて髮を剃つた。爲家は承元三年十二歳で侍從、翌四年十三で左少將、建保五年二十歳で從四位上左權中將であつた。承久亂の年爲家は二十四歳であるが、そのときまでは順德天皇の近習として、「禁秘御抄」にも名を記されてをり、なかなか實務的でよく働いたらしく、また蹴鞠には天分があつて、後鳥羽院がその方へ屢々御召しになつた。定家は五十頃になつて、歌に對する考へが變り、近代秀歌以後にあらはれたやうな立場をはつきり持つ頃になると、爲家の歌學に對する不熱心を氣にしはじめて、相當やかましく責めるやうになつたらしい。爲家は後鳥羽院や順德天皇にお仕へする方と、父の庭訓との板挾みになつて、相當苦しまされたのでないかと思ふ。貞應二年二十六のとき、出家しようかと思ひつめて慈圓になだめられ、日吉に參籠して一七日の間に千首歌を詠んだ。これが爲家千首といつて、今も群書類從に入れられて傳はつてゐる。この出來がよかつたので、定家も安堵したらしいのである。その後は、定家の世を去る仁治二年（四十四歳）までに、正二位權大納言に昇つたことは、既に前に述べた通りである。定家の薨後は事實上歌壇の棟梁であつたけれども、定家に抑へられてゐた反對勢力が少しは動き出した形があつて、平穩とばかりはいへなかつた。建治元年五月一日薨去、年は七十八であつた。

六條家の有家は新古今撰者の一人であつたが、この一黨は新勅撰集ですつかり定家に壓へられてしまつた。たゞ知家は父に早く死別して定家に學んだため十二首採られたが、定家の薨後爲家に反對した。その著名なのが蓮性陳狀（群書類從和歌部）である。蓮性は知家の法名であるが、寶治二年後嵯峨院の御百首歌合のとき、蓮性。爲家何れも作者に召され、爲家は判者となつた。しかし蓮性はその判に不平で、院に奏したのが蓮性陳狀であつた。蓮性の子は行家といつて後に續古今集撰者の一人に加はつたが、その後六條家は歌壇に殆ど勢力を失ふのである。

このときの寶治百首は爲家の傑作として、その流派に尊まれたものである。

この年後嵯峨院が爲家に勅命を下され、四年目の建長三年十月二十七日に奏覽したのが、第

十代目の續後撰和歌集であつた。爲家五十四歲、新勅撰集奏覽から十七年目であつた。

それから十年目の龜山天皇の弘長元年に、後嵯峨院の仰せによつて、弘長百首（續群書類從）が行はれた。爲家・爲氏・實氏・基家・家良・行家・寂西（信實）の七人が百首を詠んだので七玉集といはれてゐる。ところでこれより足かけ三年前、正元元年に、爲家は二度後嵯峨院の院宣によつて撰集すべき旨を承つてゐたが、弘長二年になつて、急に基家・家良・行家・光俊の四人が撰者に加へられた。はじめ三人は弘長百首の作者だが、後の藤原光俊は出家して辨入道眞觀といつた人、爲家に學んだのであるが、後異風を樹てて、爲家を不快がらせた。後嵯峨院の皇子の將軍宗尊親王の御師範として、鎌倉へ行つてゐたので、その筋の力によつて撰者の中に加へられた。家良が途中で世を去つたので、四人の共撰で、文永二年十二月二十六日に奏覽した。續古今和歌集がこれである。

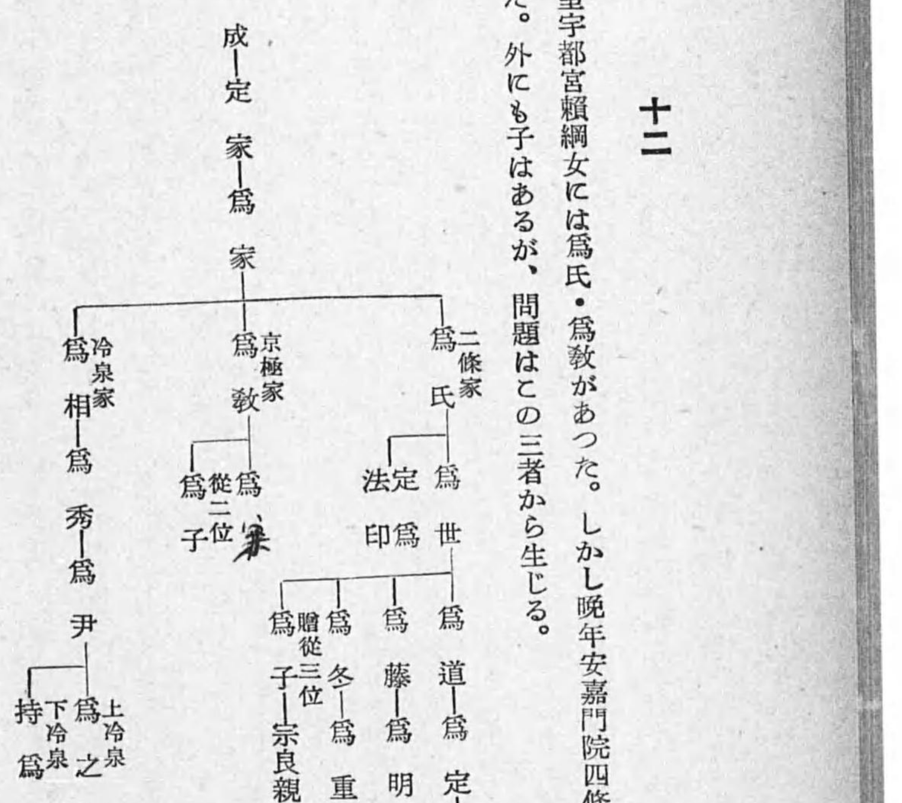
爲家の反對派は右の蓮性と眞觀とが筆頭であるが、外にも歌道の家筋はあつた。まづ飛鳥井であるが、これは定家の門弟飛鳥井雅經にはじまつて、敎定・雅有と來、雅有は隣女和歌集（群書類從和歌部）を殘し、嵯峨の通ひ路を書いて、爲家に源氏物語を學んだことなどを記してゐる。それから四世の孫雅世がはじめて最後の勅撰集の新續古今集に撰者となつたので、中世歌壇ではさまで大きな家筋ではない。また西園寺家も歌の筋といはれてゐるし、實氏の弟實雄の筋に出た小倉流も歌の家といはれてゐる。しかし歌の家としてはやはり、俊成・定家・爲家の御子左三代が築いた流派にかなふものはなかつたのである。

爲家に爲家集がある。寫本で傳はり、江戸時代の木版の刊本もあるが、何時頃できたものかよく分らぬ。爲家千首や寶治百首などをのぞいて、その他の歌を分類整理し、よくととのつた集になつてゐる。しかし、爲家の風體を見るには爲家千首・寶治百首・續後撰集がよいと後の世からいはれたのである。また彼には詠歌一體（八雲口傳）がある。

註　爲家については石田吉貞氏「藤原爲家論」（國語と國文學・昭和十三年八月）「藤原爲家傳」（國學院雜誌・昭和十四年三・四月）が立派である。

十二

爲家の室宇都宮賴綱女には爲氏・爲教があつた。しかし晩年安嘉門院四條を後妻として、爲相を生んだ。外にも子はあるが、問題はこの三者から生じる。



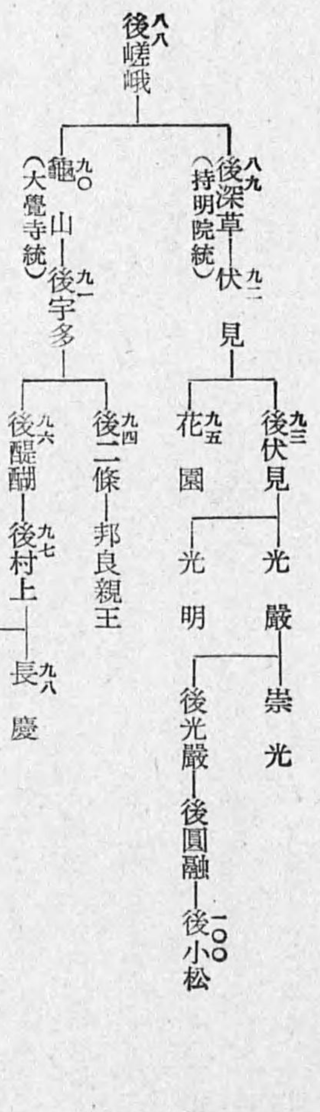
爲家薨去の建治元年には、爲氏五十四、爲教三十七、爲相十三である。和歌所の領として、播磨細川庄と近江小野庄とがあつたが、恐らくは承久亂後定家が領有してその地頭職となり、爲家が相續した。阿佛は餘程爲家を動かしたと見えて、爲家は細川庄を爲相に傳へるやうに遺言して死んだのである。ところが爲氏は兩庄とも横領して讓らないので、爲相の母阿佛は鎌倉まで下つて訴へた。十六夜日記・夜の鶴・庭の訓などがこのとき書かれたことは人の知る通りである。

長男爲氏と次男爲教はあまり仲がよくなくて、爲教はへつて阿佛尼の肩を持つたりしたので、つひに三家分立の形になつた。それぞれ二條・京極・冷泉といふ。さて阿佛の訴訟は容易に決まらない中、阿佛は鎌倉で歿し、引きつづいて弘安九年爲氏六十五で薨ずると、二條家では嫡子爲世がつづいて爭ひ、漸く二十七年たつて正和二年、冷泉爲相の勝訴となつた。はじめからいふと三十九年目に當るのである。爲相はその後正二位權中納言に昇り、嘉曆三年六十六で薨じた。家集は藤谷和歌集といふ。後妻腹で、爲氏・爲教よりはるか幼く、爲世・爲兼よりも若い有樣なので、爲世・爲兼・爲相と同時代に並んでゐるのである。二條・京極兩家は爲氏・

爲教兄弟のときから惡かつたが、爲世・爲兼從兄弟になつてもますます對立は嚴しくなつた。そして、爲教と阿佛が近よつたやうに、爲相・爲兼もまた親しくしてゐたのである。

ところで爲相は母とともに鎌倉に下り、彼の地で薨じたので、自然京都に歌の家として力を張ることは出來ず、武家方に門弟を作つたのであつた。吉野・室町の時代になつて、冷泉流の教をうけた人々が活躍し出すが、冷泉家自身としてはあまり勢力はなく、歌の家として重きを爲すのは、寧ろ江戸時代になつてからである。たゞ二條・京極の兩流は何れも吉野時代に歌壇の棟梁となるべき血統が絶えたので、その後は、門弟が道統を傳へるといふ形になつてしまつた。それ故、御子左三代の血統を今に傳へるのは冷泉伯爵家だけになつてしまつたのである。

大體以上のやうであるから、鎌倉時代には冷泉家は、殆ど訴訟のことばかりで、京都の歌界內部に對しては、全く無關係であり、專ら二條・京極の對立によつて時代は展開して行つたのである。そして兩家の對立は、實は皇室における大覺寺・持妙院兩統の對立を後にしてをつたのである。



承久亂後、後堀河・四條兩帝が相ついで立たれたが、四條天皇は幼くて崩御になり、皇子がおいでにならぬので、九條道家は順德上皇の皇子をお立てしようとした。ところが北條泰時の反對でそれが實現せず、土御門上皇の皇子が卽位せられた。これが後嵯峨天皇であつた。これ以後北條氏の力は皇位繼承にまで常に干涉いたすやうになつた。後嵯峨天皇は英邁であらせられたが、幕府の力で卽位されたので、關東に對し御謙遜になつてをつた。後、第一皇子（後深

草）が卽位されたが、後嵯峨院は第二皇子（龜山）の活潑を愛せられて、これに位を讓らしめられ、ここに二流が分立することとなつた。後嵯峨院は龜山天皇を愛される餘り、さらにその皇子を皇太子に立てられた。後深草院はこれにはさすが御不滿で、父院の崩御の後、自ら院政を攝られんとして、龜山天皇と對立の形になり、狀を幕府へ訴へられた。幕府は後嵯峨院の皇后大宮院に上皇の御遺志をうかがつたところ、龜山天皇の御筋を立てるべしとのことだつたと答へられたので、龜山天皇の親政となり、ついでその皇子が卽位された。後宇多天皇がそれである。兩統の臣下も各々二つに分れて反目するに至つた。幕府はそこで、後深草院に同情申し上げて、その皇子を後宇多天皇の皇太子に立て奉り、ついで位につかれたのが伏見天皇である。

伏見天皇御卽位の後、本來これが第一皇子の御血筋なので、持妙院統の臣下たちは、永久に皇位を確保しようとして、種々畫策するところがあつた。そこで、兩統互格の勢となり、幕府も兩統迭立といふ議を建てるに至つた。

ところが後醍醐天皇の皇太子にはおなじく大覺寺統の後二條院の皇子邦良親王が立たれたので、後伏見院は憤怒された。邦良早世ましましたので、後醍醐天皇は御自身の皇子を皇太子に

と思召されたが、幕府は兩統迭立の議によつて、後伏見の皇子量仁親王（光嚴院）を皇太子に立て奉つた。そこで後醍醐天皇は幕府の干渉を憤怒された。天皇の幕府追討の御決心の直接原因はこれであつたといはれる。そしてこれが吉野時代の兩朝對立にまでひゞくのである。北朝は第一皇子の御血筋ではあつたが、三種神器は吉野朝廷におはしたので、これが正統であることは勿論のことで、後小松天皇のとき、兩朝一に歸したことはまことに慶賀にたへないところであつた。

思へば實朝は將軍の身ながら、後鳥羽院に君臣の衷情を寄せ奉つたが、北條氏は飾りの將軍をあやつりつつ、幕府の一執權職としてこれ程のことをしてゐるのであつた。これは九條・西園寺の親幕政策がことをここに至らせたといふよりは、中世封建の勢力が、そこまで伸びてゐたのだと見るべきであらう。だから、その力を適當に評價して、これを敵にまはさなかつた九條・西園寺が京都の政治を左右できたし、それに結びついた定家の一黨が、歌界においても勢力を張りえたのであつた。名分の上からいふと、後鳥羽・土御門・順德・後醍醐四帝を流し奉つた北條氏が日本歷史の上で亂臣賊子と扱はれないのはよく判らぬことであるけれど、當時の

情勢はまさに、それ程に、封建勢力が京都を左右してをつたのである。だから二條家が大覺寺統に結び、京極家が持妙院統について、おのおの家を立て、歌界の覇を爭つたことも、實に深い中世的現象であつて、王朝文藝の傳統が封建の力によつて、各自の意識しない間に切り崩された一つのあらはれに外ならぬのである。

さて爲家薨去の建治元年には、二條爲氏五十四、京極爲教三十七。爲氏の子爲世と爲教の子爲兼とはともに二十二であつた。ところで爲教はその後五年目の弘安二年に四十一で世を去つたので、爲氏一代は、冷泉爲相と細川庄の問題を爭つただけで、京都歌壇における二條・京極の對立はまだ起り得なかつた。いはゞ爲氏の獨り舞臺だつたのである。

まづ爲家薨去の翌建治二年に龜山上皇の院宣を以て撰集の御下命があつた。二年餘りかゝつて弘安元年十二月に奏覽を終へた。續拾遺和歌集がそれである。その後爲氏は弘安九年に六十五を以て薨去した。正二位權大納言。爲世はこの間父のもとで藏人頭から參議に進み後宇多朝の內政にまで與つたのであつて、華やかであると共に大覺寺統の人として世に出たのであつた。

その後數年、正應六年（永仁元年）八月に、持妙院統の伏見天皇の御卽位後間もなく、その御考によつて二條爲世・京極爲兼・飛鳥井雅有・六條隆博（續古今撰者の一人行家の子）の四人を召し、撰集の御企てがあつたが、四人の意見が衝突してつひにまとまらなかつた。爲兼は伏見帝の御代から持妙院統に特に親近し奉つたのであつて、爲世の向ふを張つて、撰者に重用されたのだつた。中々の人物で政治にも畫策したため、陰謀の疑ひをうけて永仁六年三月佐渡に流され、七月天皇も御讓位になつたので、撰集の沙汰は全く有耶無耶に終つてしまつた。天皇はもちろん御代の中に勅撰集がなくて終つたことを非常に遺憾と思はれ、

わが世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をやあとに殘さん

と詠じ給うたことが、增鏡浦千鳥の卷に見えてゐる。二條・京極の對立はすでにはじまつたのであつて、嫡流二條家の力によつても、爲兼の持妙院統の御代における存在を如何ともし得なかつたのである。

次はまた持妙院統の後伏見天皇であるが、わづか三年の御在位で、大覺寺の後二條天皇の御

代となり、後宇多の院政となつた。すると正安三年十一月二十三日に撰集の院宣が爲世一人に下され、二年あまりして嘉元元年十二月十九日に奏覽を終へた。新後撰和歌集である。この年爲兼はゆるされて佐渡から京に歸つた。

德治三年後二條天皇が崩御になり、持妙院統の花園天皇が卽位されて、伏見院が院政を攝られ、延慶と改元されると、また爲世にかはつて爲兼の活躍のときが來た。ただ最初、延慶年間に撰集のお企てがあつて、爲兼が撰者になる筈のところ、二條爲世の手が動いた。嫡家の家名と傳統とにものをいはせ、京極爲兼の庶流であつて流罪の人であることを强調して、勅撰集の撰者になることを壓へたのであつて、これに對しては爲兼が陳狀を奉つて反駁すると、爲世はさらに陳狀を奉つた。兩者あはせて延慶兩卿訴陳狀といひ、有名なものである。しかし應長元年に伏見院から撰集の院宣が下り、爲兼獨力で撰んで、正和二年八月奏覽を經たのが玉葉和歌集であつた。その前の年正和元年に、爲兼はつひに正二位大納言にいたつた。玉葉集に對しては、二條派では歌苑連署事書のやうなものを作つて批難してゐる。

ところがこの玉葉集の奏覽された正和二年に、伏見上皇が御出家あつたので、爲兼はお跡を

したつて同じく出家した。翌々年正和四年には春日神社へ願立のため奈良へ赴いたが、勿論これは再び持妙院統のために畫策するところがあつた故で、その冬捕縛され、翌五年二月土佐へ流された。六十三歲である。その後は都から影を絕つてしまつて、消息は不明である。元弘二年、後醍醐天皇の隱岐遷幸の年、七十九歲をもつて世を去つた。忠兼・爲仲などいふ子もあつたが、京極家の歌壇的勢力は爲兼一代で終つたのである。

爲兼が土佐へ移つてから中一年措いて、文保二年二月二十六日に花園天皇御讓位、大覺寺統の後醍醐天皇が卽位されると、再び爲世の時代がめぐつてきた。しかも今度は爲兼が失脚したので爲世の獨壇場である。すぐその年、後宇多院から院宣が下り、中一年措いて元應二年に奏覽に供した。續千載和歌集である。二代の撰者たり得た得意は思ふべきである。

この御代は中々文事は盛大で、元享二年に龜山殿千首、三年に龜山殿七百首が行はれたが、その年後醍醐天皇から歌集撰進の勅命が二條爲藤に下つた。翌元享四年七月十七日、爲藤は五十歲をもつて病歿したので、更に爲定に勅命が下つた。爲定は爲藤の兄爲道の子だが、早く養

子にしてゐたので、順を追つて爲定に命ぜられたのである。爲世は末子爲冬を愛してゐたが、その望みはかなはずして、爲定が撰して奉つた。時に正中二年十二月十八日、續後拾遺和歌集がこれである。爲世は自分の子や孫が勅撰集の撰者となるのを眼のあたりに見たし、嘉暦三年には爲相が六十六で薨去した。二條家の歌壇的地位は安泰である。その上、爲世の女(贈從三位爲子)は後醍醐天皇の側近に侍し、その腹に尊良親王・宗良親王のやうな英邁の皇子がお生れになつてゐる。爲世は自足して元徳四年出家し、八十の高齢で華々しい榮華を一とまづ閉ざした。その後、高野山の蓮花谷に隱棲したが、元弘建武の間また京都に歸つてもゐる。かくて延元三年八十九歲を以て世を去つた。

以上は鎌倉時代末期における二條・京極・冷泉三家分立の概略であつて、關東にあつた冷泉は別とし、二條・京極兩家が、兩統のかはるごとに、如何に撰集のことによつて競爭したかといふことについては、讀者も充分の印象を作られたであらう。かうした頻々とした撰集の沙汰は何とも自然發生的なものでなく、歌の家からの隨分はげしい嘆願のあつたことを想像するにかたくない。そして、そのことが、勅撰和歌集の重みを少くしたことはあらそへない事であつた。家の分立と抗爭とが、關東封建勢力によつて暗に誘導されてゐるものとすれば、ここにもまざまざと王朝傳統を弱め、ひき割く封建勢力の作用を感じうるのである。しかしながらその對立は、內容的に見てどんな形にあらはれてゐるであらうか。その點を、爲世・爲兼の歌に對する考へと、撰進した歌集の特色とによつて、簡單に考へて置かうと思ふ。

そこで爲世については、嫡家の家名と傳統とを保持しなければならぬ立場にあつたことと、和歌はすでに自由な創作的文藝でなくなつて、一つの「道」となつてゐることを念頭に置くこととしよう。そして彼の「和歌秘傳抄」を見る。それは注意事項を幾條かの箇條書にして、それに自己の解說を付したものであるが、そのはじめに、

心は新しきを求むる可き事

この事古人の教ふる所、更に師の仰せに違はず……

とある。これはもとより先に觸れた定家の作歌心得の何れにも强調されてゐる、あの「詞は古

きを慕ひ心は新しきを求め」の態度を、家傳の訓へとして承け繼いだものに外ならぬ。しかしそのあとで爲世は自己の注解をほどこしていふ、

但し新しき心いかにも出來がたし。代々の撰集世々の歌仙、詠み殘せる風情あるべからずこれはまたなんとした無氣力さかと、讀者は思はれるかも知れぬ。全くその通りで、「新しき心」を求めることは定家の絶對命令として立てられてゐるが、それだけに、この一箇條は爲世時代の宗匠には苦の種であるのだつた。そして、これが苦の種になるのは、外でもない、爲世の生活が和歌に新しい心を盛るだけの新しさを失つてゐるといふことに外ならぬ。これはつまり、和歌を「詩」たらしめることの困難を宗匠自ら告白した言葉なのであつて、文藝としての和歌にとつて、一つの危機の到來を告知してゐるものであつた。勿論その頃の人に「詩」が失はれたといふのではない。何時の時代にも生活のあるところに「詩」はあるのだが、その頃の宮廷貴紳の「詩」は、その在り場所を變へたのであつて、和歌の形體と傳統とによつては、それは表出できない種類の「詩」となつてゐたのである。

しかし爲世はそれを自覺もしなかつたし、また意識したところで認めは決してしなかつたであらう。もし認めるならば自ら和歌を廢業しなくてはならなかつたからである。

「詩」を失つた和歌を、傳統の家業として繼承するには、祖先の庭訓に對しても、御都合主義の姑息なこじつけが必要となつてくる。爲世はまさにそれを行つてゐる。人の顏はみな眼は二つ横にならび、鼻は一つたてについてゐるが、「しかも又同じ顏」でない。「されば歌も亦、かくの如き」ものであつて、花を白雲と見ちがへたり、木の葉の音を時雨とあやまつことはどの歌でも同じことなのだ。しかし少しでも銘々の特色が出れば「作者の得分」となるといふのである。そこで幸にも爲世が例に出してゐるところの、花を白雲と見ちがへるといふやうな櫻花のとらへ方は、八代集の春の部の歌に確立された角度のとらへ方なのであつて、その他のとらへ方がないやうなことを爲世がいふのは、つまり和歌の形式だけでなく、「詩」の感じ方までが因襲的になつてゐるためである。所がただそれだけでなく、今度は逆に、歌の新しい趣向を考へることの禁止が强く述べられ、和歌的な零圍氣へ耽溺することが要求される。「大方四季の景物はみな季に隨」つて感じがちがつてくる。春は世の景色もうらうらとしてゐるが、決して「心すごく淋しき體」ではない。夏は「四方の木立のしげしげとして、涼しき樣」には見えぬが、

さりとて幽玄でもない。ところが秋はすべて「淋しく悲しからぬ」題があらうや。また「冬は蟲の音も草の色も枯れはてて、露こほり霜むすびて、冬ごもりたる様」が「淋しからずといふ事」はない。かく爲世は四季それぞれの感じを一定不變のものと見て「唯四季の歌こそ大事に侍るべし」と斷定するのである。かうしたところでは、もう有名な後鳥羽院の御製の、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕は秋となに思ひけむ

に見られるやうな、あたらしい情緒の世界の設立は禁斷であらねばならぬ。もとより院の御製はやはり枕草紙に警拔な調子で「春は曙」といひ、「秋は夕暮れ」と決められた、あの王朝四百年の感覺に對する抗議に新しい「詩」の湧き出る地盤をもとめられたものであるが、爲世にはこの氣力は毛頭ないばかりでなく、むしろそれは歌道に對する異端ですらあると見た。それは、爲兼が「詩」の地盤を生きた感性にもとめた故に、彼の手になつた玉葉集を罵詈したのでも分るのである。けれど諸君もすでに察しられたであらうやうに、そのやうに歌の形式だけでなく、詩的内容までが限定されるとなれば、作歌は殆ど會席の作法のごときものとなつてしまふであらう。庭をほめるにも、床の間の軸をほめるにも、挨拶をかはすにも、茶を飲むにも、す

べてが型に定められたものがあるやうに、作歌もすべて法式の外に出てはならず、個人の自由な感じを出すことは避けねばならぬ第一の條件となる。かうしたところでは、恰度茶をのむことや、人々との會席の振舞やに藝術を創めるのでなくて、茶の湯を嗜むことが一つの風流であるやうに、歌を作ることにおいて文藝作品を創造するのでなくて、歌を嗜むことが一つの風流であると見られるやうにならなければなるまい。そして爲世の態度は全くそれであつた。爲世の女贈從三位爲子腹の宗良親王は新葉集の撰者、吉野朝の柱石であられるが、それに親近して吉野朝の右大臣まで昇つた花山院長親の耕雲口傳に次の一文がある、

肝要はたゞ數寄の志一つなり。京極中納言(定家の事)以來、御子左の一門此道の宗匠なり。彼の家には、達者と數寄とをならぶるに、達者よりは數寄の人を執する由、故おとどは語り給ひしなり。

故おとどは宗良親王の外祖父大納言爲世である。しかしこれは少くも爲世の嘘であらう。定家は數寄の心がなく、歌會の雅遊を風流としてたのしめないから頑固で駄目だと後鳥羽院が御口傳に記された通りで、和歌の嗜みに風流をもとめず、和歌の上に「詩」を創めようとしたの

であつたから、爲世の立場は御子左一門の、定家以來の立場でなく、おそらく爲家の晩年頃から爲氏・爲世と次第に色濃くなりまさつたものに違ひないと思ふ。

とにかく、作歌が貴紳の嗜みとなつたのであるから、同時にそれは藝道となりきつたのである。藝術と藝道との相違は屢々日本の藝術に關して述べられるところであるが、藝道といふことについて、これまで人は餘りに高く評價しすぎてをり、何か神秘的な意味を感じてゐたやうである。しかし實は藝道を口にする時代の生活には、またはそれを口にする人々の間には、その時代の藝術を創造する力は失はれてをるのである。右の點は嚴に注意されねばならぬところである。ただ一般にいつて、すでに完成された藝術作品を專ら鑑賞する側に立つ大衆からいへば、定評あるものを愉しむのが早道でもあるし、また自然さうするの外ない事情もあるだらうから、純粹にそれを愉しむといふ態度を持つ人には、自づと藝道的色彩、つまりその嗜みによつて生活の感じを統一し、一種の風格をつくるといふやうな傾向が出るのも當然であらうが、創作する人間が、自分の藝術は數寄であるといひ出すときには、彼はその時代の創作家としては落伍したものといはれても仕方がないのである。もし彼が尙詩人であると主張するならば、

その「詩」は、その時代の現實の生活に結びついた情緒とは別の地盤の上にある「詩」に外ならないのであらう。

それに對立する爲兼の態度は、藝術論としての限り、根本的に別である。爲兼卿和歌抄がそれを示してゐる。

爲世が和歌秘傳抄で、「代々傳へたる家領ことごとく讓りあたへ、たびたび朝家に採用せられて、勅撰を承る家督には秘し教へぬ事を、庶子に授くる事」があらうや。無下に俗な歌などは「家の庭訓を受け、師の口傳をも聞」いた人がよも詠むことはあるまい。古人が詠まなかつたといつて珍しがつて見苦しいことを詠むなどは、「道の口傳なきが致す所」であらうといつた。これはすべて爲兼の言說や玉葉集の歌やに對する反撥である。爲世は何よりも家傳を尊重して嫡家の家格を擁護する。これは双刀の刃であつて、新を求める者に對しては傳統がないから卑俗だといつてたたく武器となるが、自身に對しては「代々の撰集世々の歌仙、詠み殘せる風情あるべからず」といふ自繩自縛になつてしまふ。しかも爲兼が、家傳なきによつて見苦しいて

とを詠むのだと批難されたやうな立場を、敢て取るについては、爲世の側には到底理解されない別の立場にしつかりと立つてゐるのである。

爲兼は心に感ずるところを直截に詠まうとする。さういふ爲兼は歌の理想を萬葉集に見る。定家は近代秀歌の中に、「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿を願ひて、寛平以往の歌に習はば、自づから良しきこともなどか侍らざらむ」といつてゐるが、爲世の和歌祕傳抄には、この詞の中、特に「寛平以往」といふ點を全く默殺してゐる。文字通りとれば古今集の撰ばれたより前といふことになるが、それはきつくいへば萬葉集とまでいへる可能性が出てくるからである。爲世はそれに對しては「萬葉集の耳遠き詞などゆめゆめ好み讀む可らず」と一本釘をさして、「詞は三代集を出づ可らず」を固く守る。だから爲世一派の野守鏡や歌苑連署事書も、用語の粗笨さの點で玉葉集を難じたのである。ところが、爲兼はまさにその「寛平以往」を足場として、萬葉集に學ぶ立場の自由を導き入れてゐるのである。そのことはくどくなるから省くことにするけれども、爲兼卿和歌抄の上にさまざま述べられてゐるのである。

但し爲世・爲兼の根本の差は、爲世が用語論からして、萬葉の詞など詠んではいけないとい

ふに對し、爲兼は態度論からして、萬葉に學ばうとするのである。まづ萬葉の頃は心の起るところのままに、「歌ことば、たゞのことば」の區別もなく、「心の起るにしたがつて、ほしきまゝに言出」した。「自心性をつかひ、うちに動く心を外にあらはす巧み」であるから、すぐれた歌が出來たのだといつてゐる。萬葉の歌すべてがさういふ見方で律しえられるか否かは大きな問題であるが、少くも爲兼はさう理解することによつて、因襲にとらはれるなく、自己の詩心に誠實にならうとする態度の自信を心中に築いたのである。その點に立つての爲世に對する反撃は、「たゞ姿・詞のうはべをまなびて、立ち並びたる心地」でゐては、どうして古歌にかなふわけがあるか、古歌に劣らぬ歌は何處から如何に詠み出すべきかと、叶はぬまでもつとめて見るのが大事だといふ形になつたが、これはまことに當然のことであらう。

言葉にて心を詠まんとすると、心のまゝに詞のにほひゆくとは、變れる所あるにこそ。これが爲兼の結論である。そして爲兼は爲世と袂別する。

ここで私は、爲兼自身あまりはつきりはいつてをらぬけれども、右のやうな立場を爲兼がとる以上、當然さうなるべき結果を一つ指摘したいと思ふ。それは、爲兼のやうな形で萬葉集を